

SB-116 (SID区)

一辺5.2mの正方形竪穴住居であり、2m間隔の4本柱を配し、西柱間に地床炉を設けている。炉周辺の1m範囲には炭化物の堆積が認められる。柱穴間に炉を設ける竪穴住居の設計は、当該地を中心とした東日本で弥生時代V期箱清水式段階の長方形住居に主流となる。本来の正方形住居の規格としては住居中央部が炉の位置としては相応しく、弥生時代住居規格の部分的遺制として理解される。

遺物の出土は比較的疎であるが、原形を保つ土器が床面直上に数個体確認され、住居廃絶に伴う遺棄の状態を示す。出土土器群のうち、台付甕(4)は東海系統、甕(7)は北陸系統の影響下で成立するものと予想される。口縁部を有段とした器台(1)は、布留2式併行段階に盛行すると考えられ、SB-70資料より新相に位置するものか。

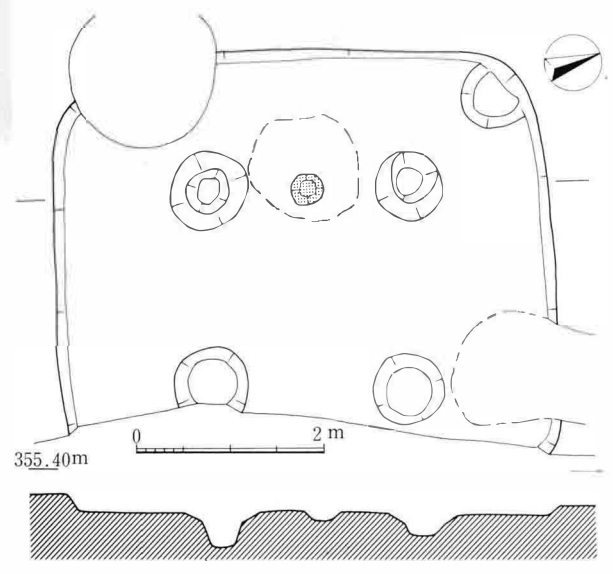


図48 SB-116 (1 : 80)



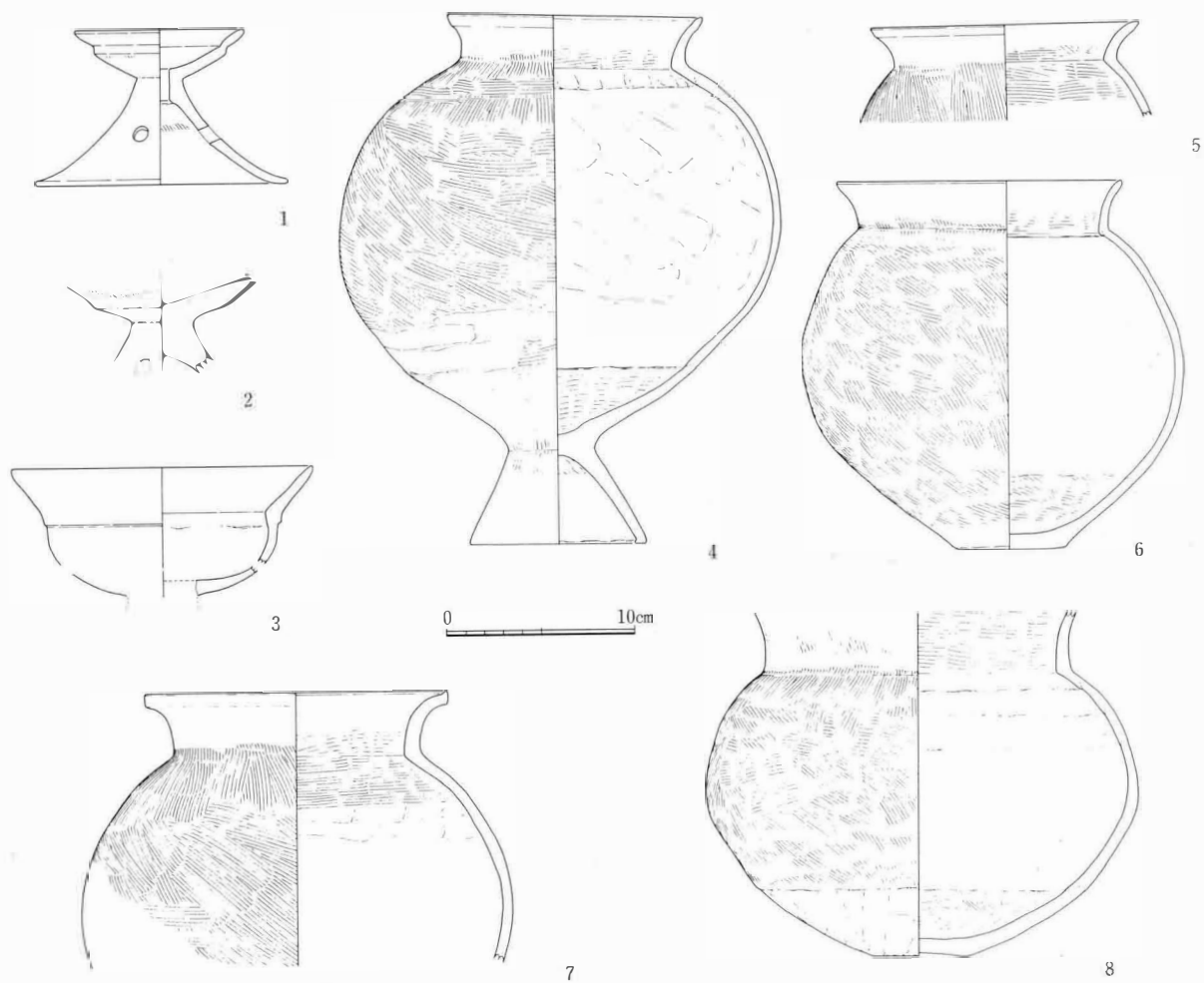
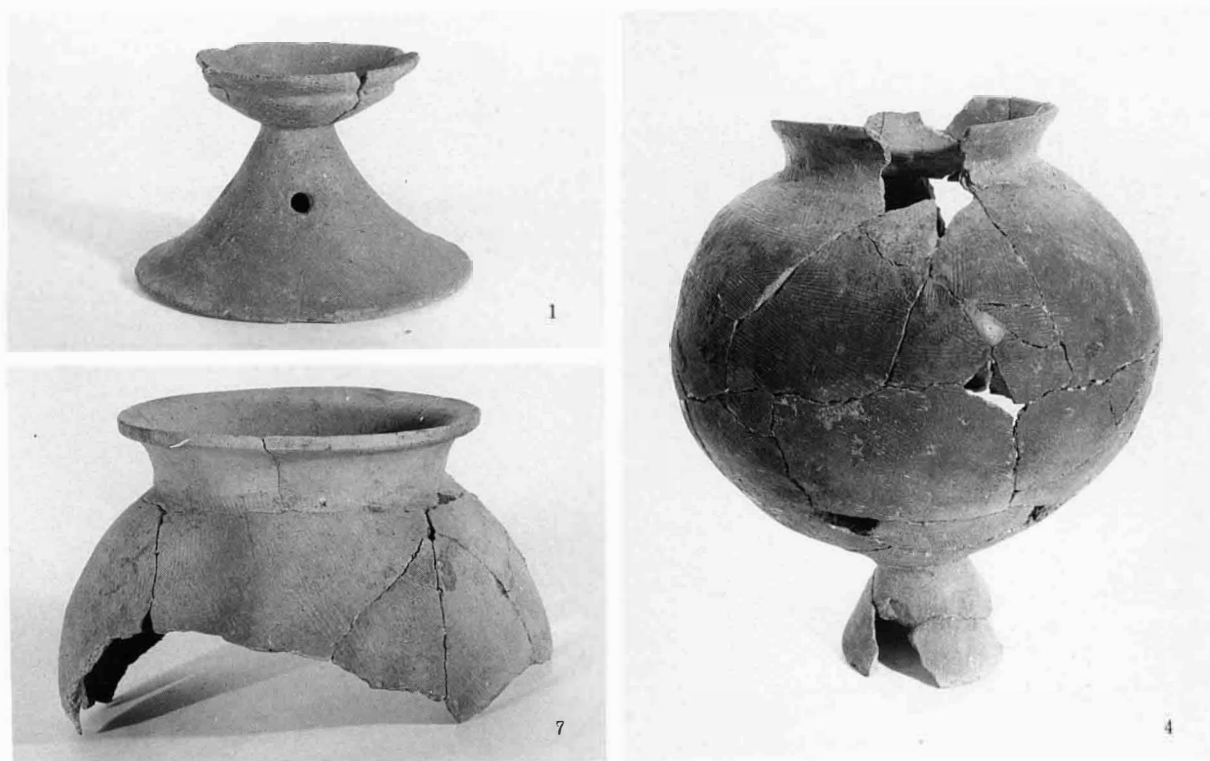


图49 SB-116出土土器 (1:4)



SB-118 (SIC区)

一辺5.4mの正方形住居で、床面壁際に周溝がめぐらされる。2.6m間隔の4本柱を配置し、北西柱間には炉が設けられる。土器出土量はやや多いが、復元可能となる個体は限定される。床面よりやや浮いた位置での検出が目立ち、住居廃絶後の廃棄に伴うものか。

出土土器群の組成では、畿内系高坏(7~15)の増加傾向が顕著となっている。脚部が中空筒状を呈して須恵器出現段階の型式に接近し、布留2式併行段階と考える中実柱状の型式より、さらに後出的といえる。小形器台の末期的型式と考えるX字形器台(4)も存在しており、従来空白に近かった布留3式併行の段階に併行させることが妥当と思われる。当遺跡の古式土師器のなかでは新相に位置付けられよう。

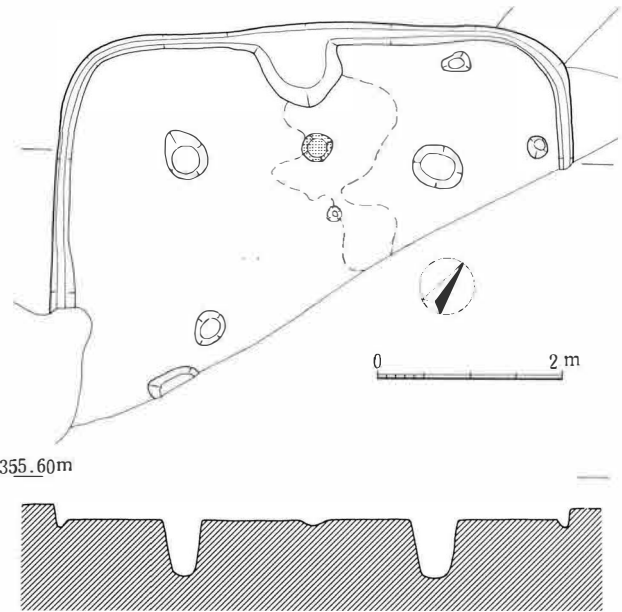


図50 SB-118 (1:80)

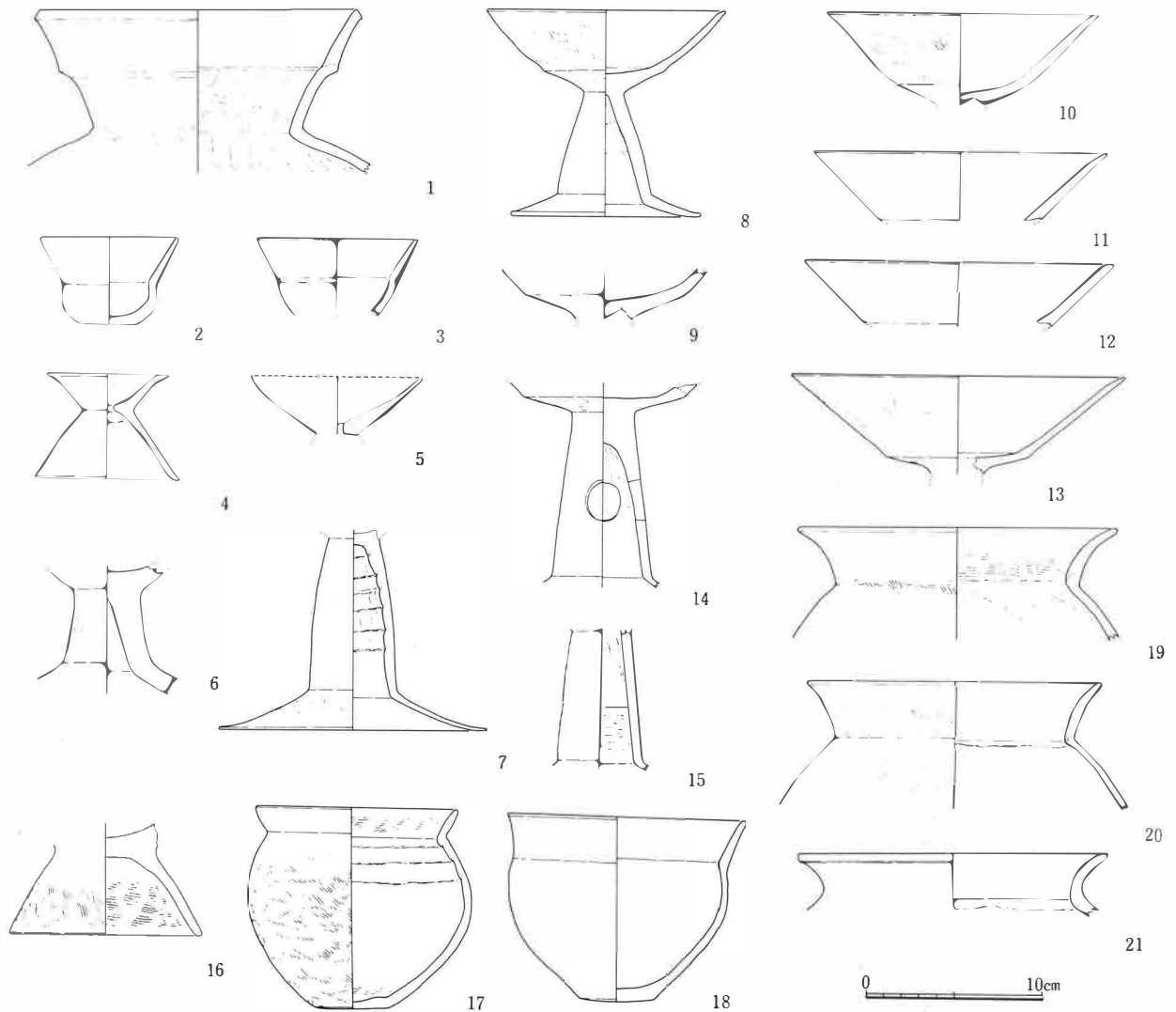


図51 SB-118出土土器 (1:4)

SDZ-1 (I区 古墳時代周溝墓第1群)

検出範囲が一部のため全形は不明であるが、最大幅3m、深さ0.5mの溝により区画される大形周溝墓と予想している。なお、隣接する高速道路用地内での調査成果から、前方後方形周溝となる可能性についてのご教示を得ている。溝の底面近くには赤色塗彩された底部穿孔の有段口縁壺(1)を含む5個体の土器(2を除く)が、ほぼ原形を保った状態で検出され、埋葬行為に強く関連した土器群として判断される。箱清水式的装飾要素をとどめる壺破片(2)の共伴と、ミガキ手法による甕(4)の存在から、該期の中でも古相に位置する可能性がある。

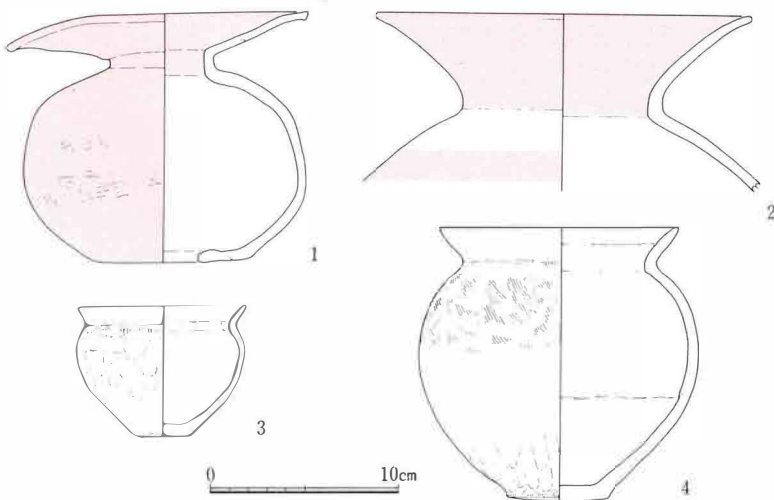
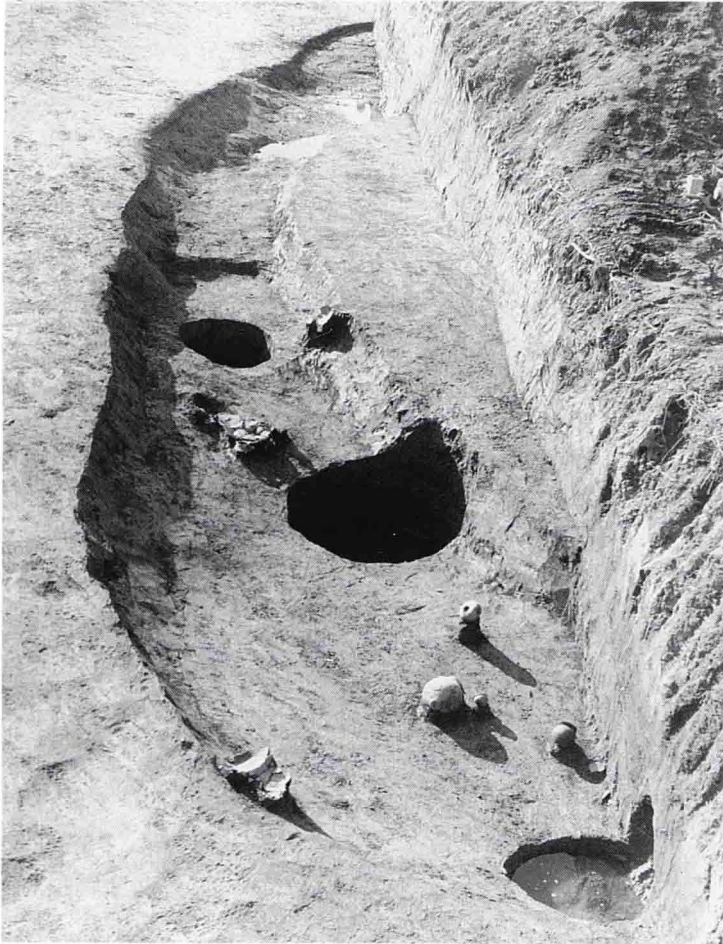


図53 SDZ-1 出土土器① (1:4)

る壺破片(2)の共伴と、ミガキ手法による甕(4)の存在から、該期の中でも古相に位置する可能性がある。

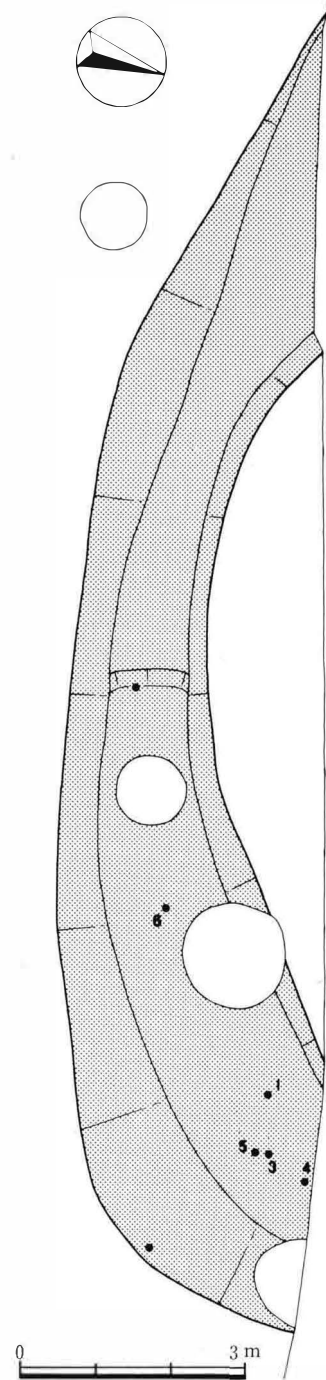


図52 SDZ-1 (1:150)

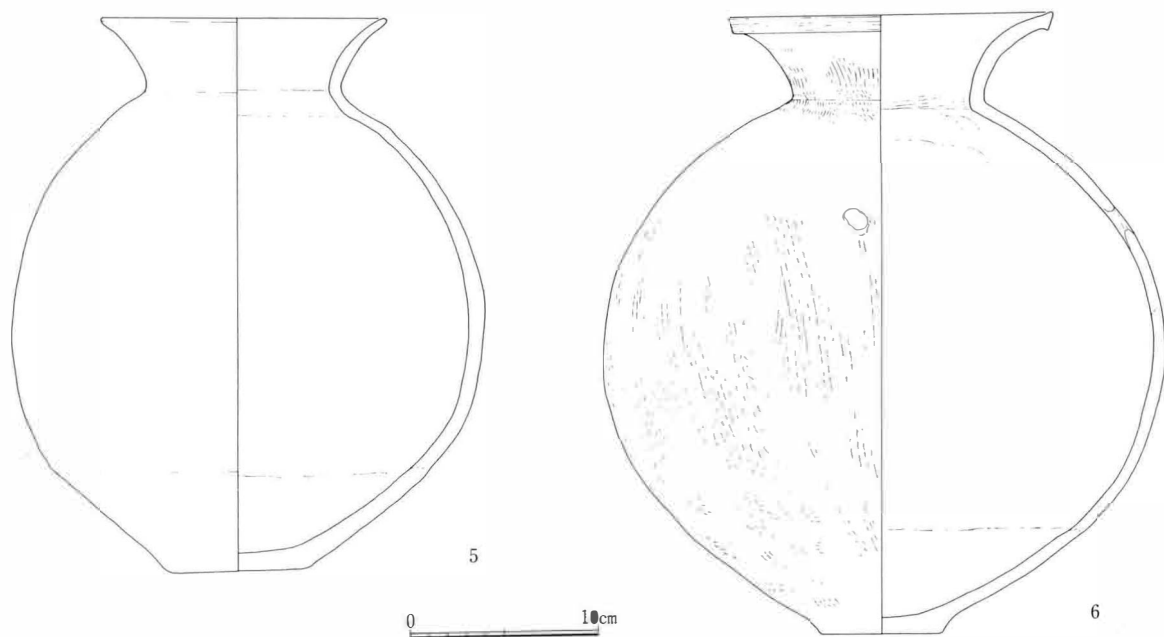


图54 SDZ-1出土土器②(1:4)



SDZ-3 (II・III区 古墳時代周溝墓第2群)

周溝開口部が突出した前方後方形を呈し、溝幅最大4m、周溝規模最大長25m弱、周溝区画の内法一辺約12mを測る大形の周溝墓である。湧水により周溝内の全てで底面を検出していないが、溝の深さは最大で90cmを確認している。僅少の出土遺物中、SD-3出土の赤色塗彩底部穿孔壺と接合関係をもつ土器破片存在が判明し、当周溝墓出土遺物としても取り扱うこととする。粗いハケ調整ののち雑なナデ調整により整形され、その形態からも明らかに日常用の土器とは性格を異にする。ある種植輪的な雰囲気も感じられる。なお、突出部前面を区画すると思われたSD-9については、覆土の状態や掘り込み形態の差から、当周溝墓とは別遺構と判断している。

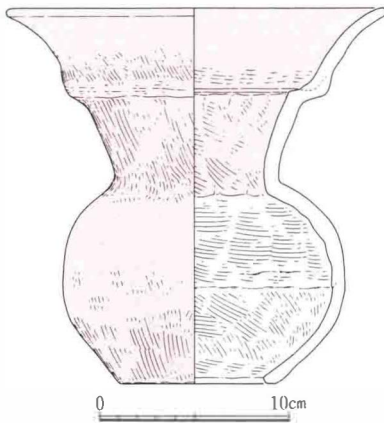


図56 SDZ-3出土土器(SD-3)(1:4)

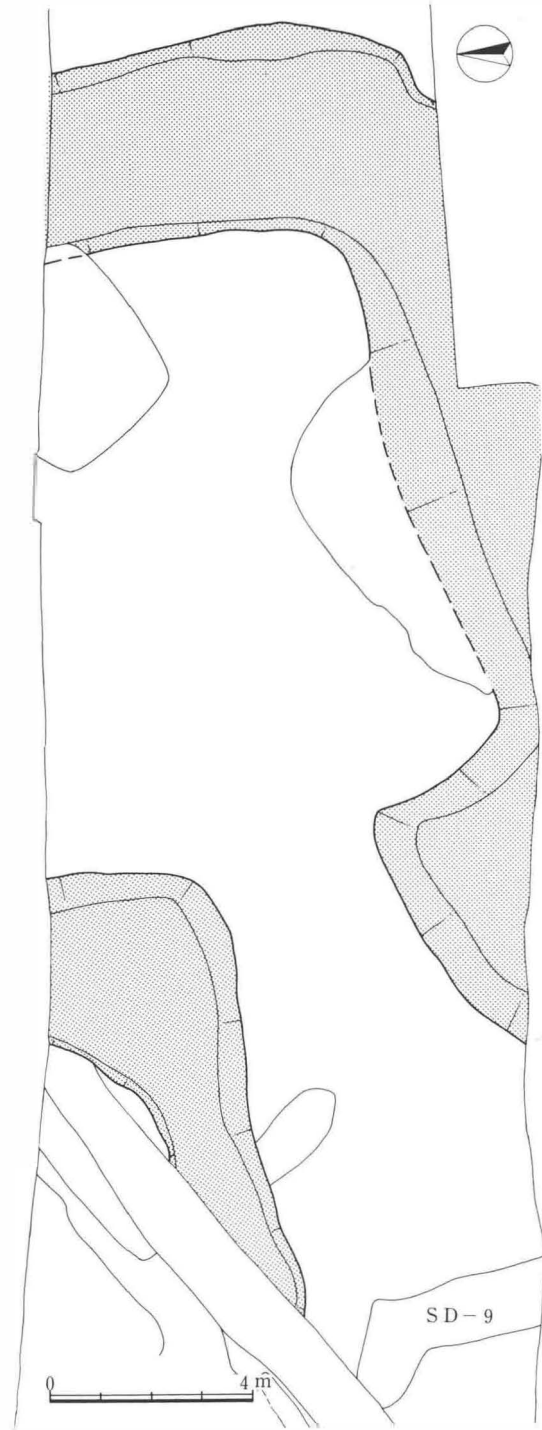


図55 SDZ-3 (1:150)

SDZ-9

(A区 古墳時代周溝墓第3群)

周溝開口部が突出した前方後方形を呈し、周溝規模最大長20m強、周溝区画の内法で一辺11m強を測る大形の周溝墓である。周溝は幅最大4.2m、部分的に幅と深さを減じ、確認面からの溝の深さ70~60cmを測る。西半の部分は、表土除去の段階から、予め周溝区画内の盛土存在に注意を払いながら検出作業を進めた。しかしながら、上部耕作による攪乱が深くまで及ぶ当該地において、上部は既に削平されているらしく、明確な盛土層、盛土内に構築されると予想される埋葬施設の確認には及んでいない。ただし、周辺部に濃密な分布を見せる平安時代住居群が、周溝区画内を避けるかのような分布状態をみせることは興味深い。平安時代段階には目視できる程度の盛土が存在し、住居の構築を拒んでいたものか。大形周溝墓における盛土内埋葬施設存在の可能性を示唆するものといえる。

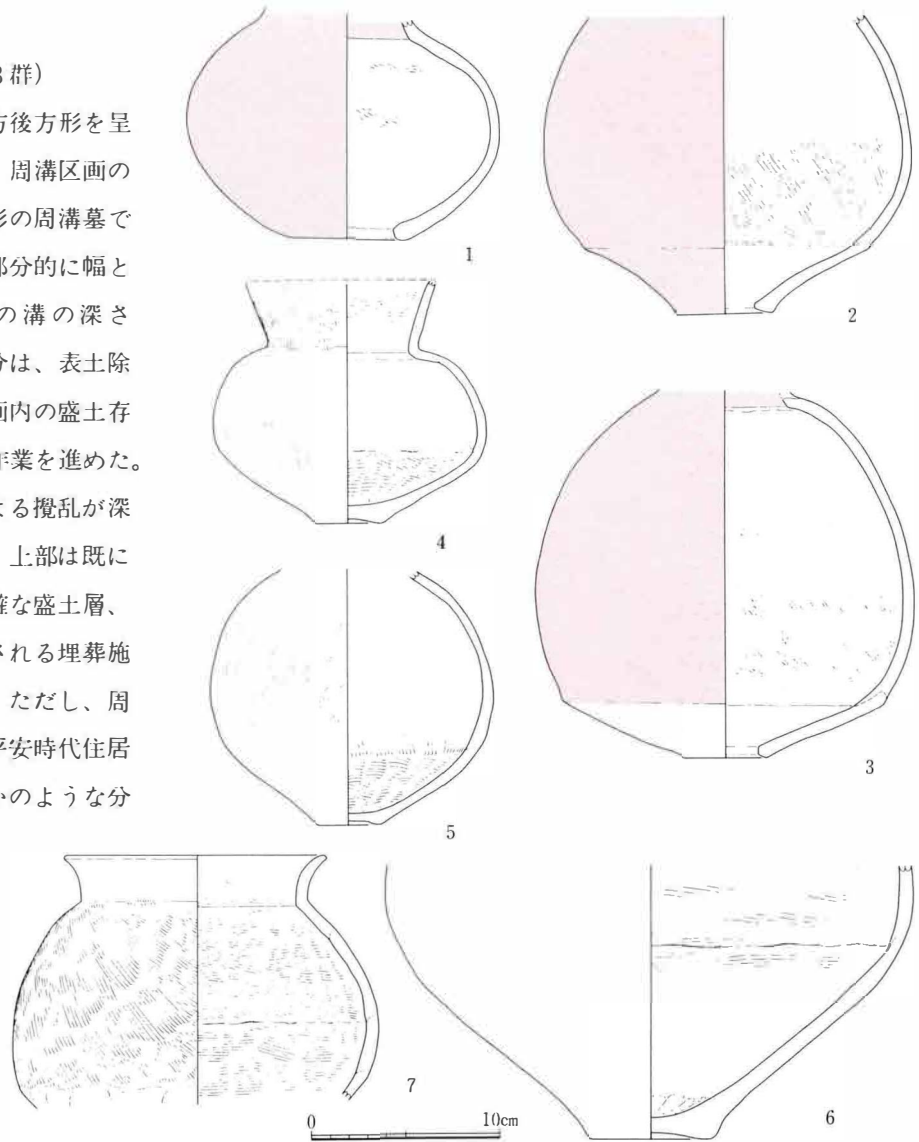
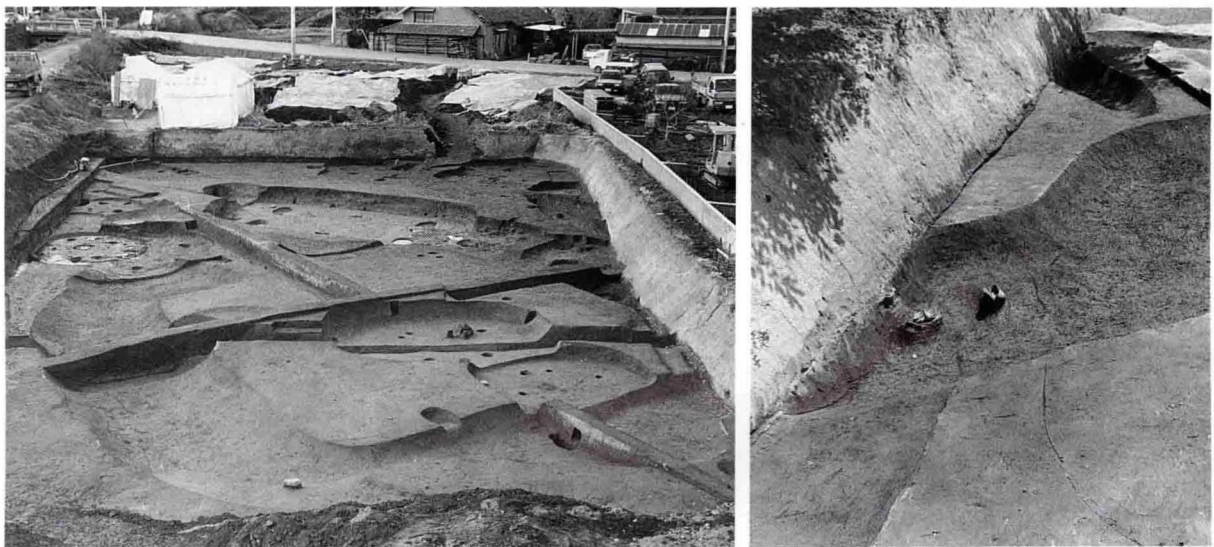


図57 SDZ-9 出土土器 (1:4)



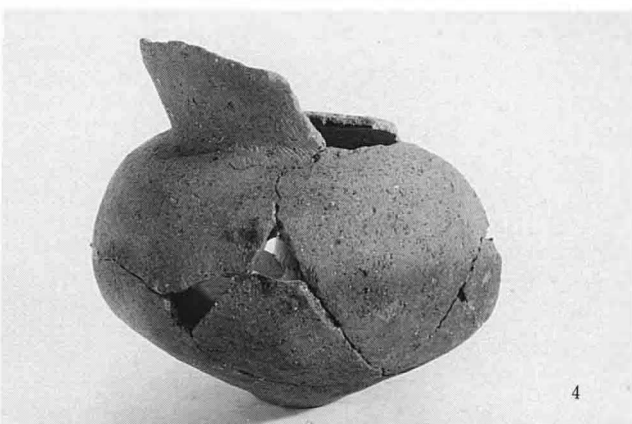
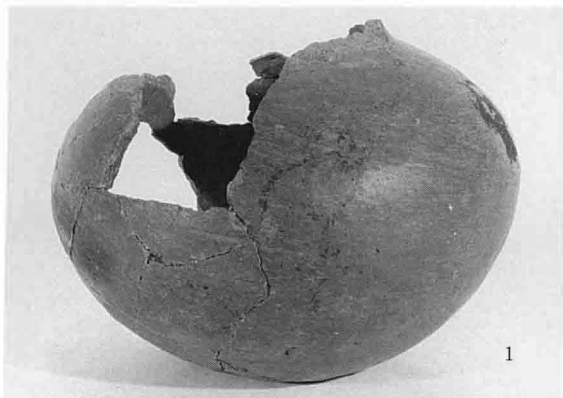




図58 SDZ-9・10 (1:150)

SDZ-9周溝内からは弥生時代以降の各時代の遺物が検出されている。そのなかで、確実に周溝墓に伴う土器として判断されるものは図示した7点の土師器である。いずれも欠損品であり完形とはならないものの、溝底近くに原形を保ちながら位置する個体で、溝掘削後上部から欠損品のまま転落して埋没した状態を予想しておく。

赤色塗彩され焼成前に底部を穿孔する壺3点(1~3)は、いずれも口縁部を欠失するが、有段口縁壺である可能性が高い。埋葬行為に伴い一括して製作された供献用の壺と想定したい。いずれも形態を異にしている点興味深く、複数の製作者集団の存在を考慮すべきかもしれない。該期のなかでの時間的位置づけは留保しておく。

SDZ-10

(A区 古墳時代周溝墓第3群)

SDZ-9に並列した位置で周溝の開口部分のみを確認している。その形態から前方後方形となる可能性が高く、SDZ-9に比較すれば小形規模と思われる。溝幅は1.5m、深さは最大で60cmであり、突出した開口部から土器が集中的に検出されている。

甕(3~4)は破片として一括出土し、完形に近く復元され、小形丸底土器(2)は原形を保った状態での出土である。破片出土した高坏(1)を相伴遺物とするなら、時間的位置は該期でも新相に近く位置づけられる。

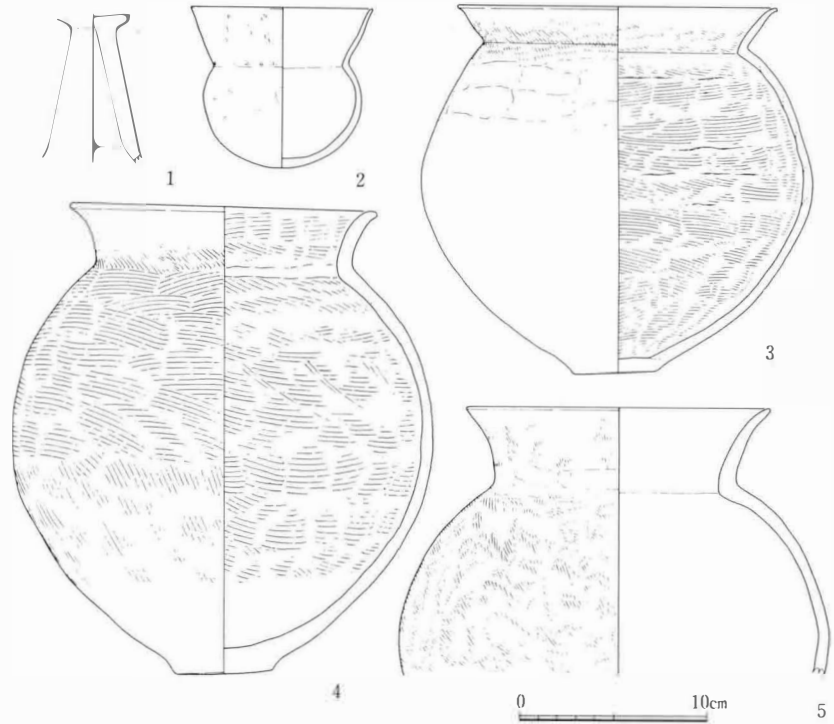


図59 SDZ-10出土土器(1:4)



6 平安時代

SB-22・29 (A区)

隣接して検出され、一辺4.8m (SB-22) と4.2m (SB-29) 前後の正方形に近い竪穴住居であり、北東壁にカマド設置の痕跡が認められる。床面は中央部分ほど硬く、壁際ほど軟弱で不明確となる。該期古段階の竪穴住居は、全般にやや大形規模で密集傾向が強く、廃棄時のカマド除去が目立つ。

出土土器は、内面を黒色処理し糸切り底部をケズリ調整した土師器坏(図61-1~13、図62-1~7)と、底部糸切りままの須恵器坏(図61-14~19、図62-8~24)がほぼ同比率で存在する。ロクロ調整甕(29~31)に加えて武蔵型と呼ばれるケズリ甕(28)も存在する。平安古期の基本的組成であり、9世紀前半代の年代位置をもつものと考えられる。なお、墨書土器の多さについては注意される。

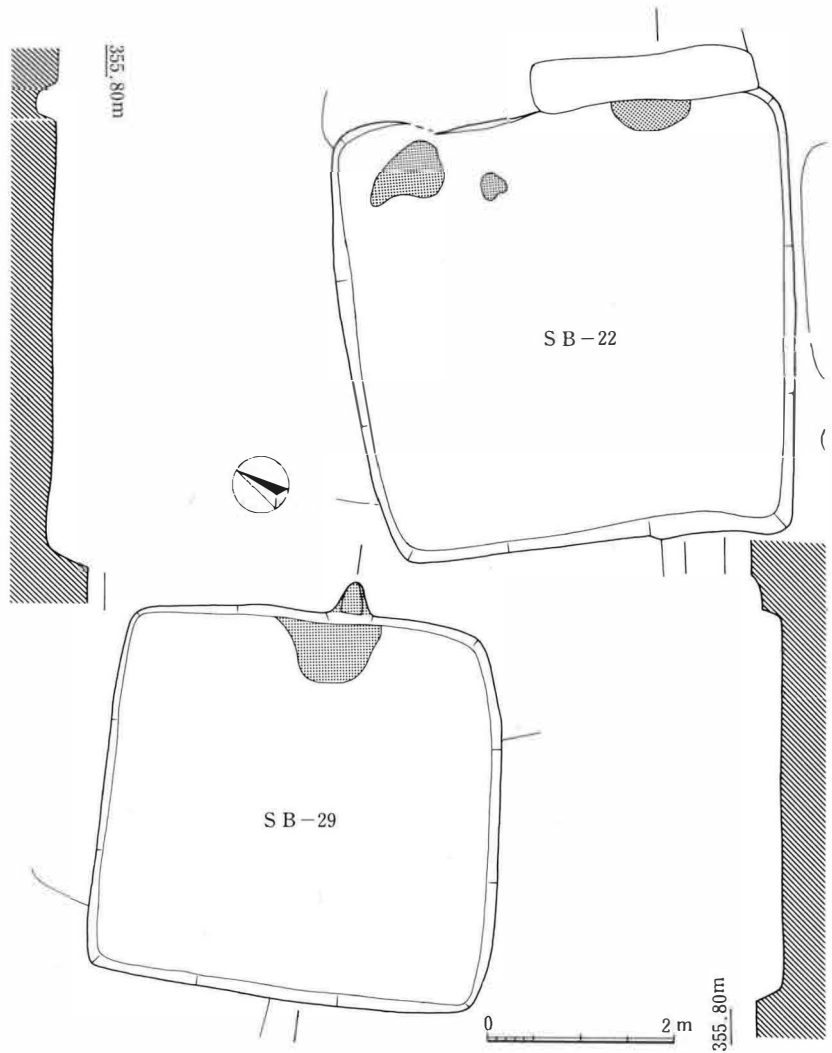


図60 SB-22・29 (1:80)

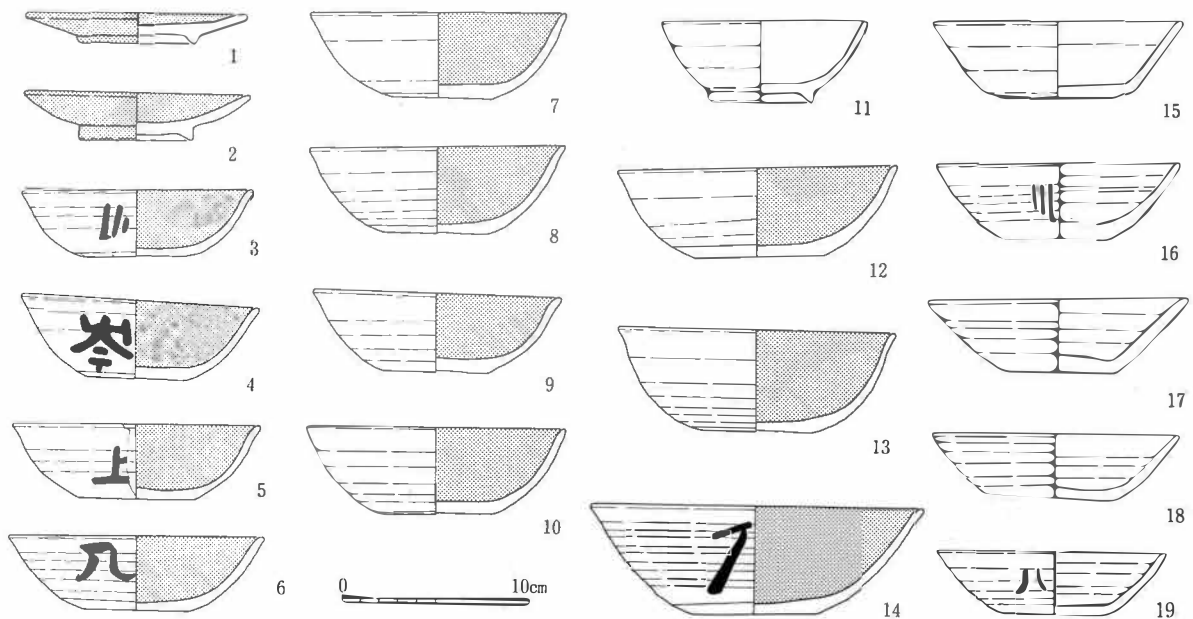


図61 SB-29出土遺物 (1:4)

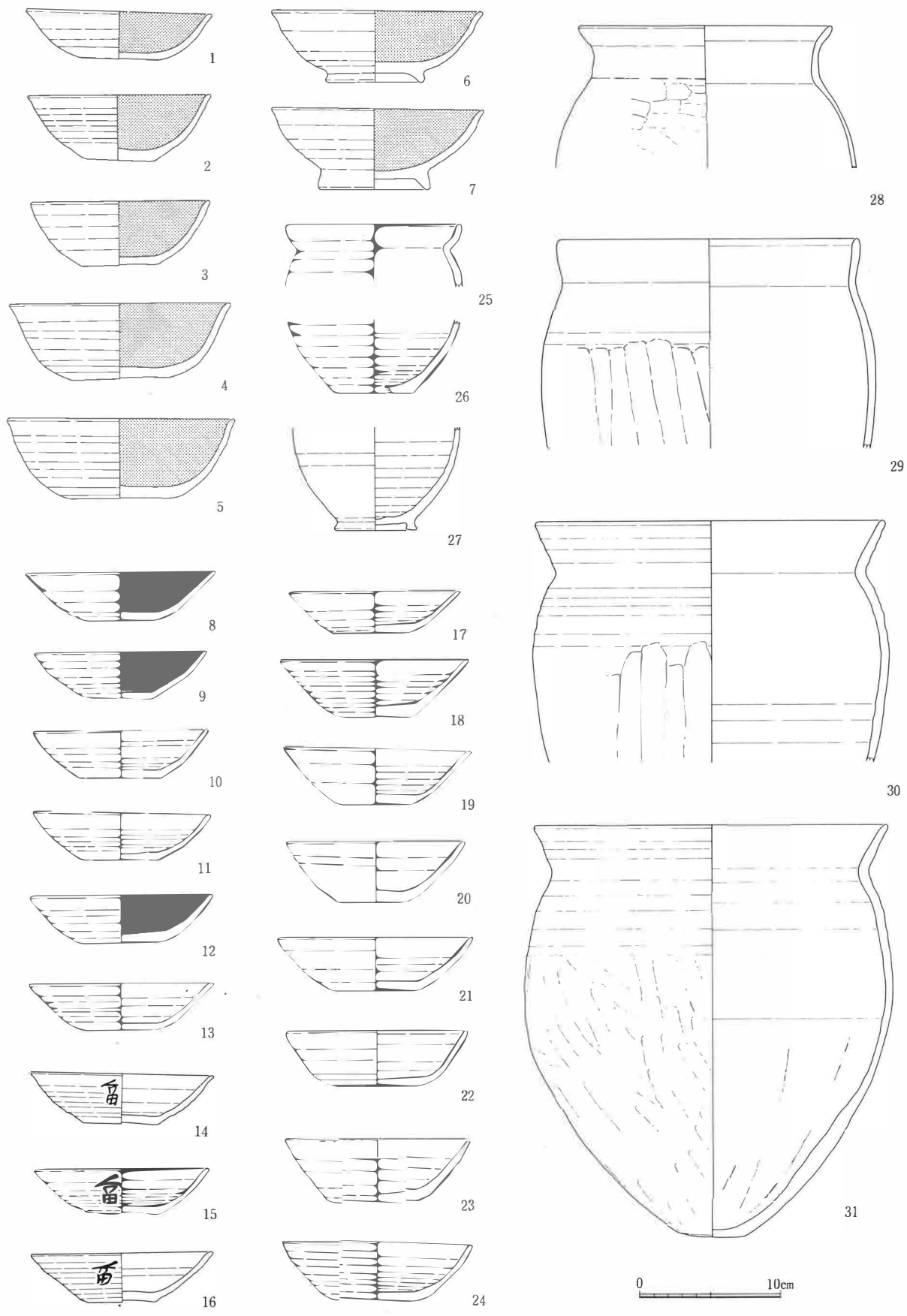


图62 SB-22出土遗物(1:4)

SB-44 (A区)

一辺3.6mの正方形に近く、カマドの存在は未確認のまま、床面もやや軟弱である。氾濫にともなう砂により急激に埋没した竪穴住居であるが、床面及び壁際にはそれ以前の埋没によると思われる土の堆積が認められ、氾濫堆積時点では既に廃絶していた可能性も考えられるところである。

床面上には完形及びごく一部を欠損しただけの土器が放置された状態で検出され、良好な一括出土資料となる。光ヶ丘窯式の灰釉陶器(1)、黒斑・軟質焼成で末期的様相の須恵器坏(2~4)、内面黒色処理し底部糸切りのままケズリ調整を消滅させた土師器坏(5~13)、外面カキ目調整の小形ロクロ甕(16・17)、ロクロ甕(18・19)による組成は、平安中期の基本的傾向を示している。仁和年間の洪水記事との関連から、年代的に9世紀第4四半期に固定できる可能性がある。

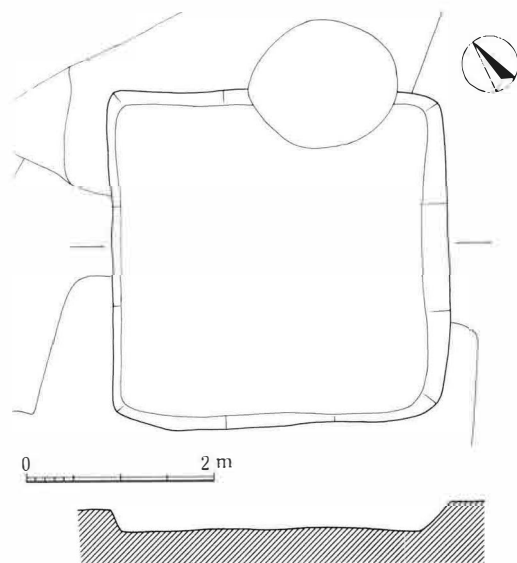


図63 SB-44 (1:80)

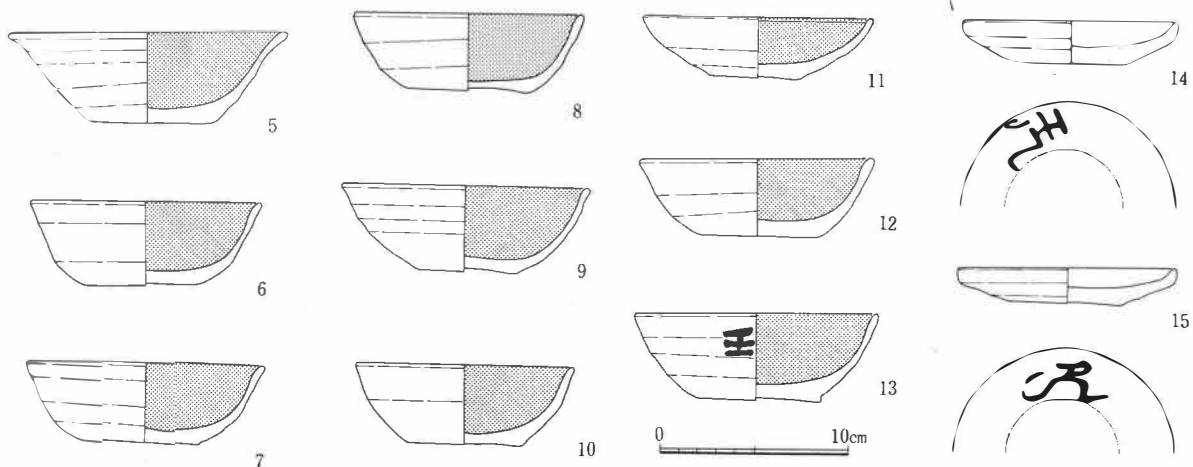
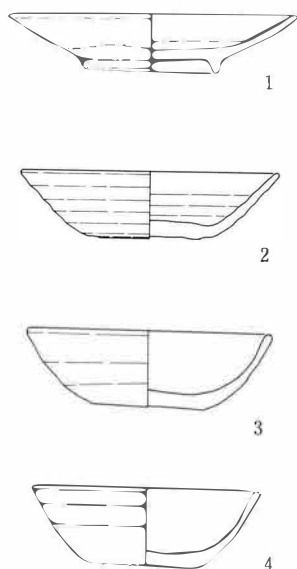


図64 SB-44出土遺物① (1:4)

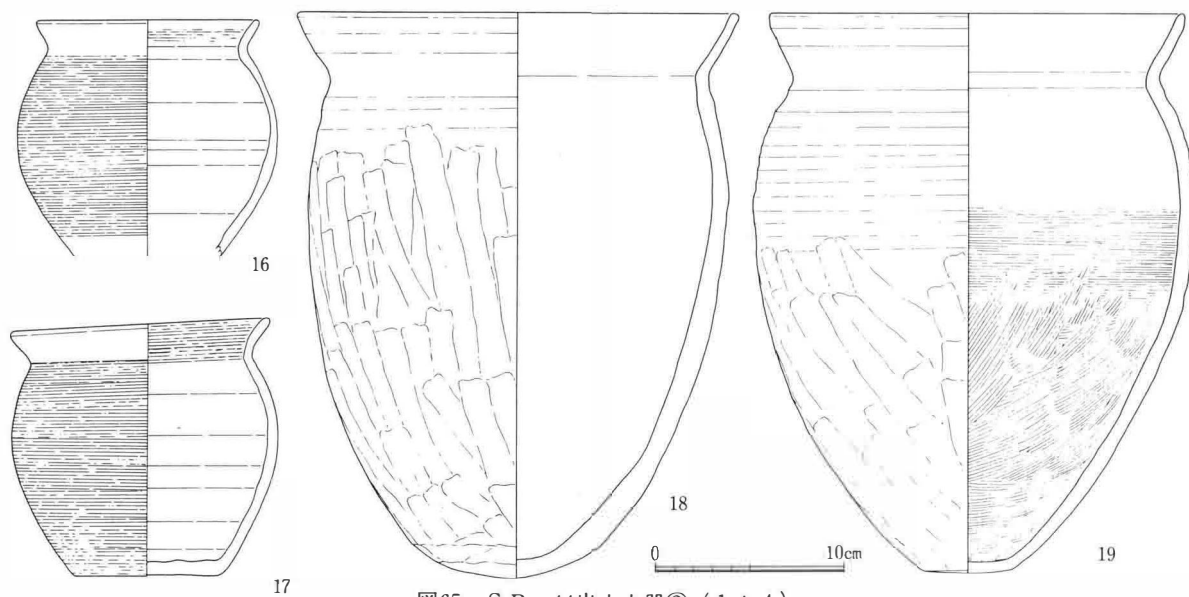
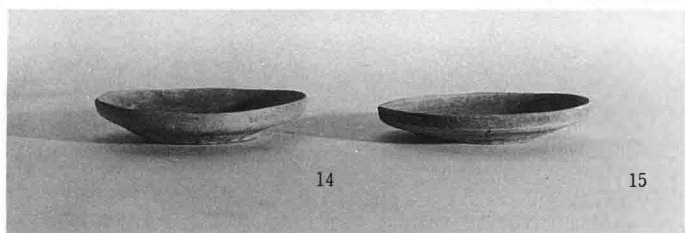
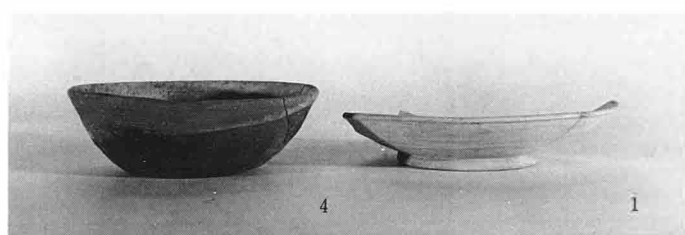


図65 S B-44出土土器② (1 : 4)

類例の少ない形態の土師器 (14・15) は高台を持たない「托」であろう。外面に則天文字系の墨書が施されている。同類の文字を持つ土師器坏が、埋没を同じくする石川条里遺跡氾濫砂層からも出土しており、その由来が注目される。



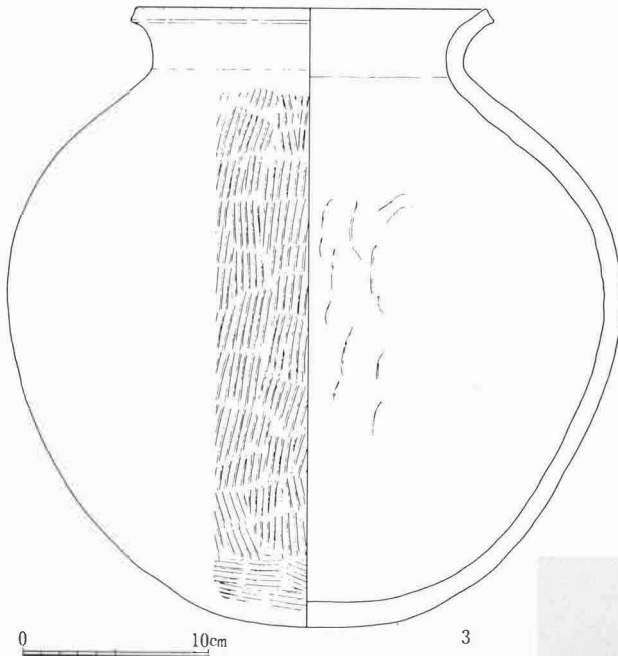
D区水田遺構と出土土器

B・D区において検出された水田遺構を被覆する砂層は、仁和4年(888年)信濃国大洪水の記事と整合する可能性が高いと考えている。水田面あるいは砂層中の遺物出土はごく稀といってよいが、D区においては畦畔際の2か所で3個体の完形土器を検出している。

灰釉陶器皿(1・2)は刷毛塗りの施釉と三日月高台から光ヶ丘1号窯式に比定されよう。須恵器甕は体部全面に平行叩き目が残り、内面にはあて具の痕跡が認められる。SB-44資料と同じく平安中期に属す。

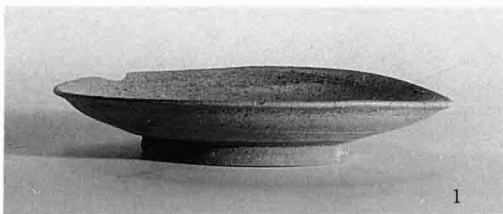


D区水田面と土器出土状態 (No. 1)



水田面土器出土状態 (No. 2・3)

図66 D区水田面出土土器



SB-83 (D区)

4.8×3.7mの長方形を呈し、東壁の南隅付近にカマドが設置され、付近を中心として比較的多くの土器破片出土が認められる。中期まで営まれた平安水田の埋没後、氾濫砂層の上部より掘り込まれ構築されるものである。当遺跡での検出住居遺構としては最新の段階にある。

黒色処理を消滅させ粗雑化した土師器坏(1~3)、碗(5・6)、黒色処理の碗(4)、ロクロ調整甕にとってかわる羽釜(8)等、平安新期の基本的組成を示す。10世紀後半、あるいは11世紀代にかかる所産として位置付けられ、中期との年代的な断絶が予想されるものである。

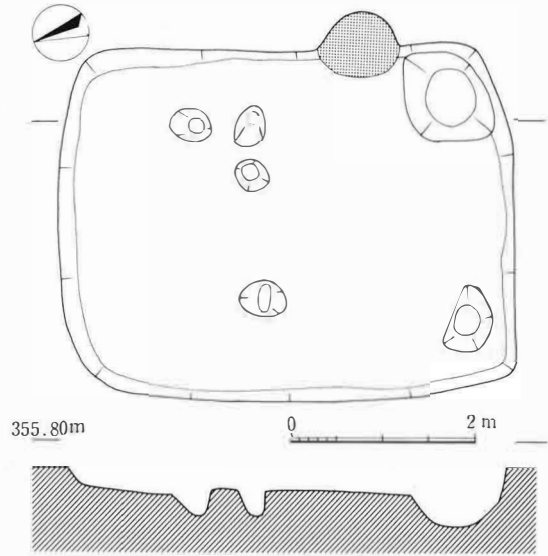


図67 SB-83 (1:80)

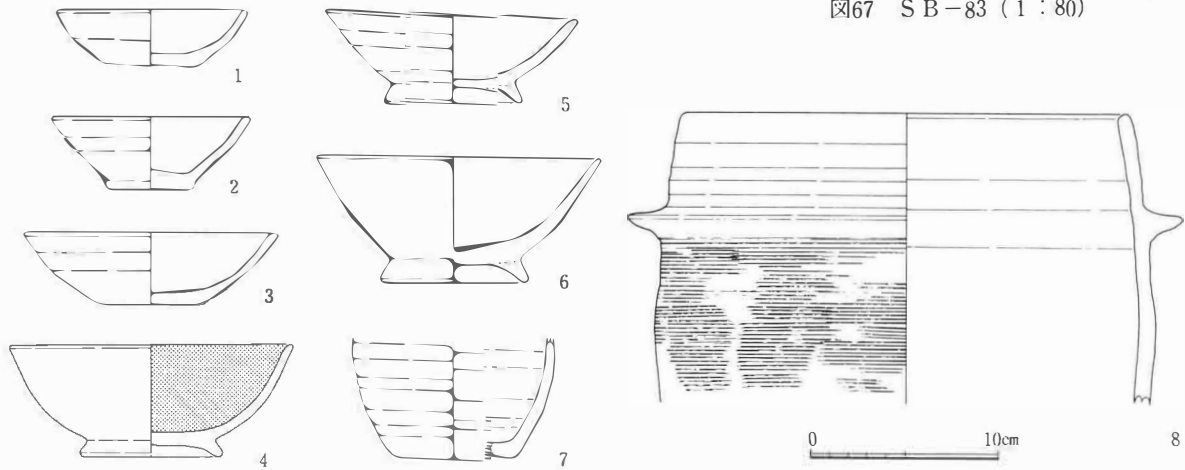


図68 SB-83出土土器 (1:4)

(中世)

井戸-39 (III区)

中世の遺構として多数の井戸が検出されている。ほぼ完形に復元される内耳土器を出土した井戸-39を除いて出土遺物は僅少である。径1m程度の円形素掘り構造で、灌漑水用であったものか。

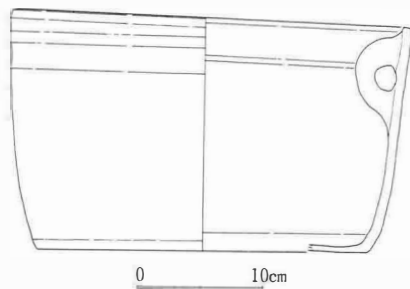


図69 井戸39出土土器 (1:6)



7 石器・その他

本遺跡には、弥生時代を中心として、古墳・平安時代にわたる石器がある。石器または未成品913点、黒曜石等の硬質の剥片4,249点9.4kg、粘板岩等の打製品または磨製品の剥片1,095点12.7kgがある。これらのうち石器及び未成品について、鶴田氏(1991、長野市教委『中俣遺跡ホカ』)の分類基準に従って分類を行なった。準拠しているため、該当するものがなく欠けている項目もある。他の時代のものも付随して整理した。

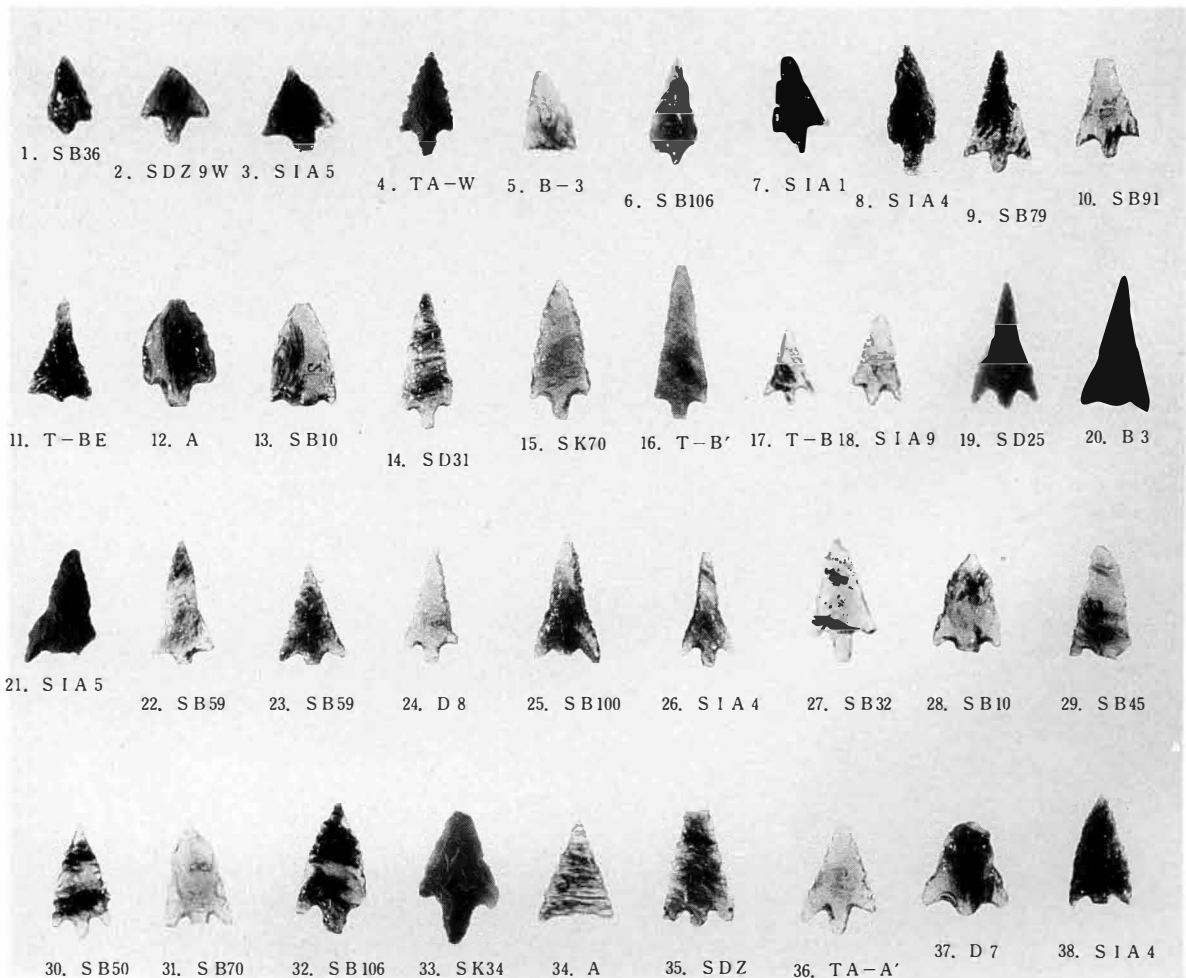
I群 「剥片を素材としたもの」

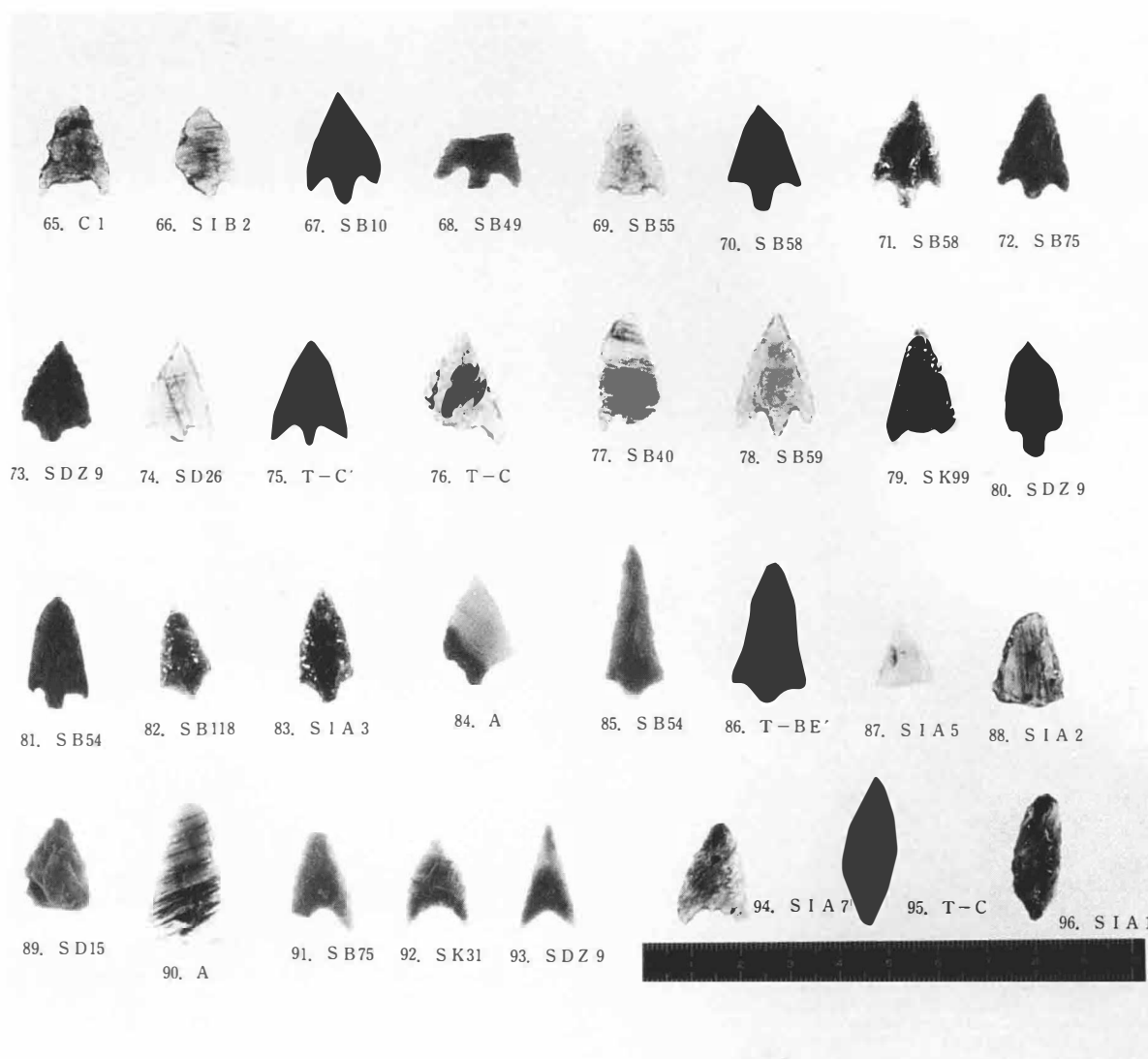
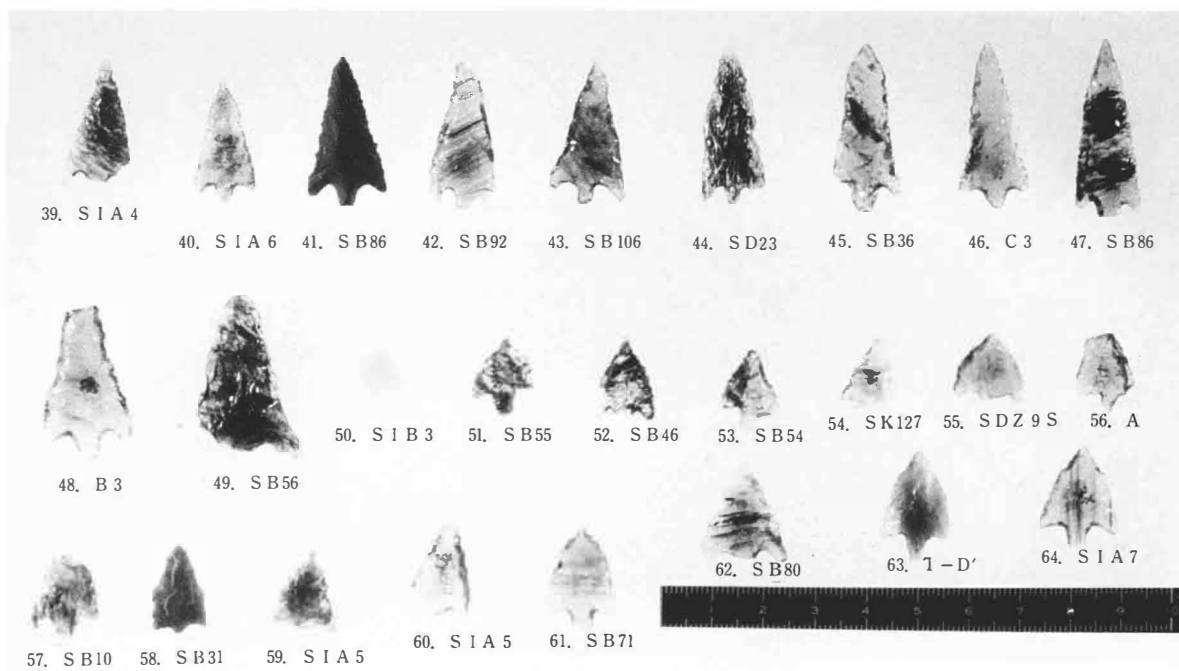
II群 「礫を素材としたもののうち剥片剥離調整加工が施されているもの」

III群 「礫を素材としたもののうち研磨及び敲打による加工を施したもの」

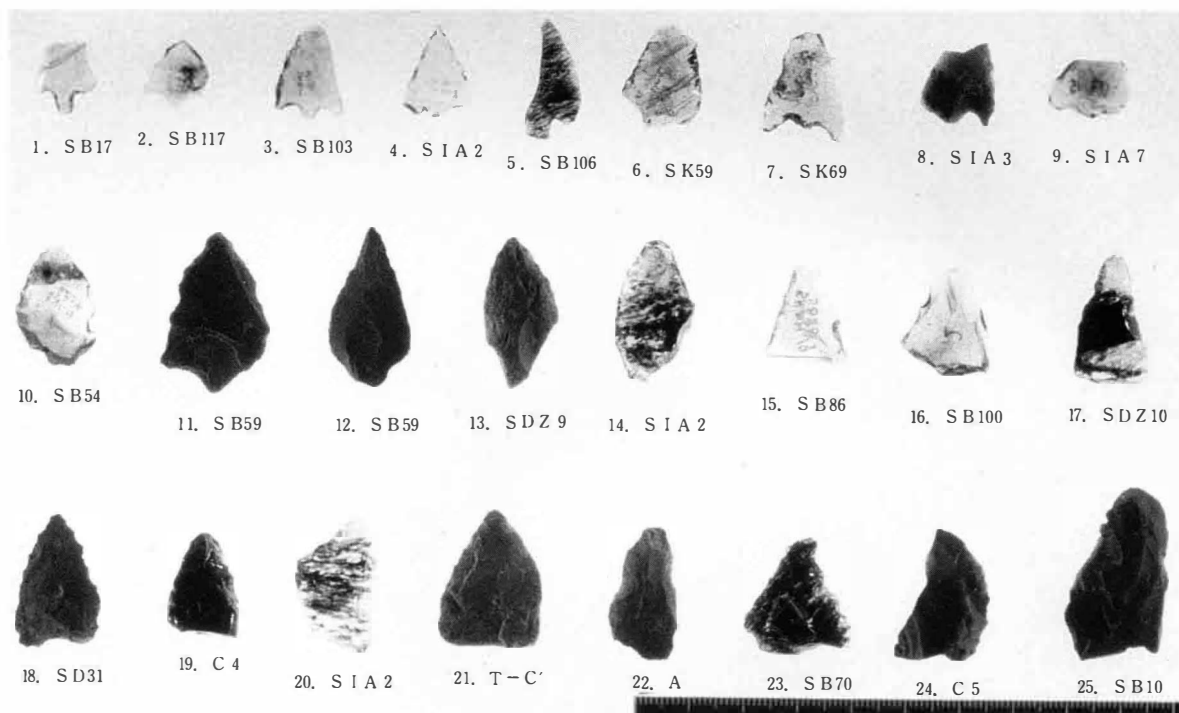
I-I群 打製石鏃

製品は108点あり、基部の形態から有茎と無茎に大別される。有茎石鏃は平基16点、凹基65点、凸基5点である。凹基は長身で細いもの33点とハート形を呈するもの30点とに形から分けられる。80・81はスベード形をして他と異なり、81は石質も緑色の珩質凝灰岩であることから磨製石鏃の未成品であるかも知れない。無茎石鏃は10点で平基4点、凹基4点、凸基2点である。凸基の96は先端に摩耗痕がみられ錐としての利用もある。先端部のみ破損品は14点ある。石質は黒曜石が77%を占め、他は水晶・チャート・珩質頁岩・石英質安山岩等である。総点数は117点である。



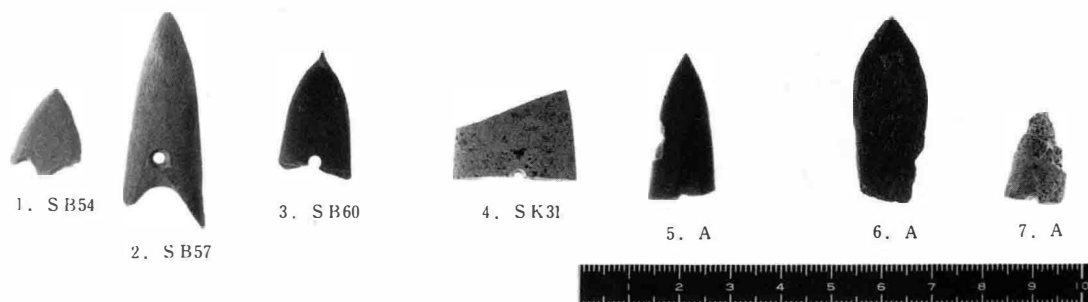


また、打製石鏃を意図していると認められるもの、このままでも製品となりうるものも含めて一括した。未調整部をもっているものである。26点ある。黒曜石は60%である。



1-2群 磨製石鏃

剥片を素材とし、全面が研磨され先端と逆刺が作り出されているもの。1は有茎。2～5・7は穿孔されているが6はない。片岩・凝灰岩・粘板岩が使用され、7は鹿の角製と思われる。8点ある。弥生III期の所産である。



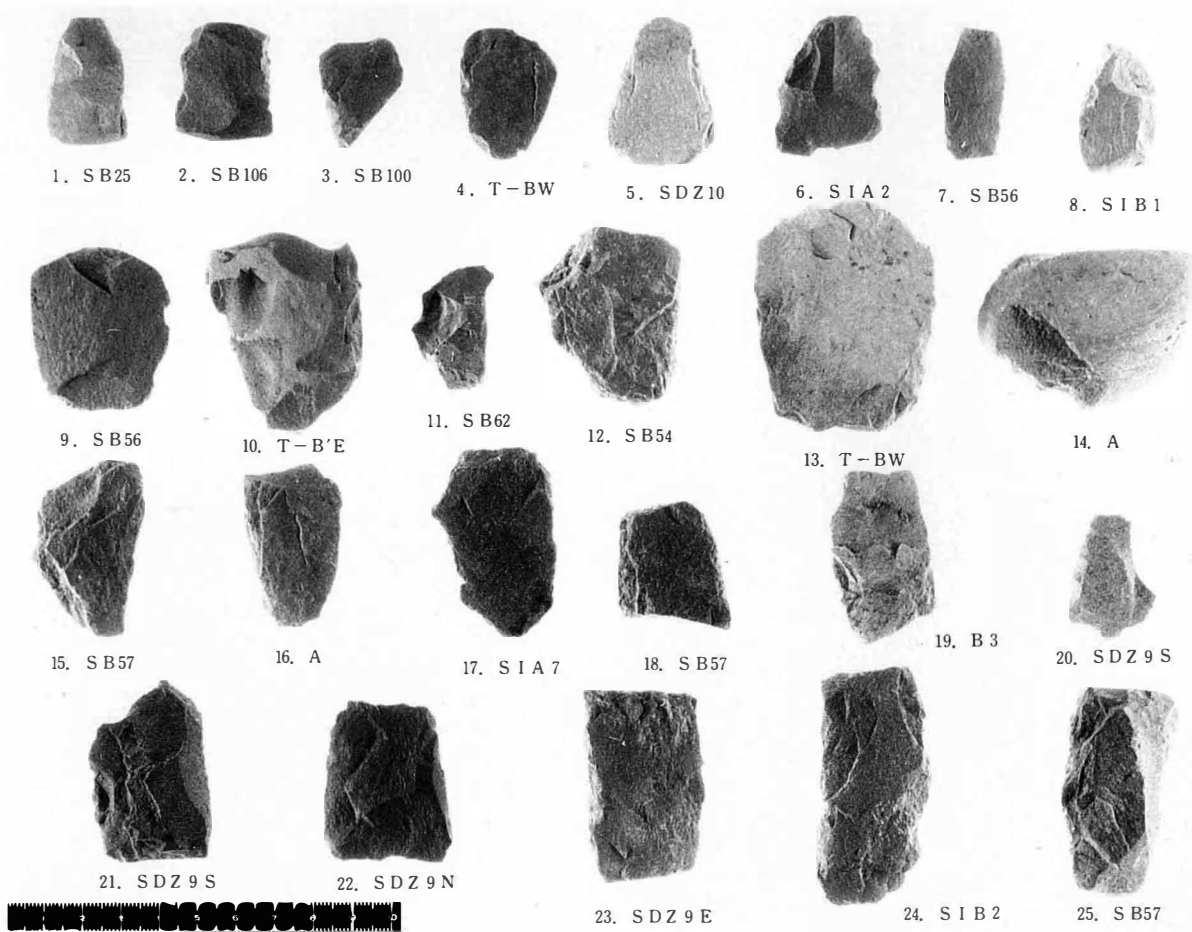
1-3・4群 磨製石鏃未成品

I-3群 剥片を素材とし、厚さが5mm程度と薄く、表裏両面とも研磨されているが、研磨が全面に及ばず剥離面が残されているもの。

I-4群 剥片を素材とし剥離剥片加工を全面に施し、長方形を呈するものが多く、厚さ5mm程度の薄いもの。端部に研磨痕が認められるものもある。

上記の分類に従うと、I-3群の1・2・4が該当し、他はI-4群に属す。(25は厚く扁平片刃石斧の未成品であらうか。) 3は端部が研磨される。9～13は体部の一部に研磨がなされ、10～12は線状痕を明瞭に残している。5は縁取り状にカットされ、他は剥片剥離加工がなされている。

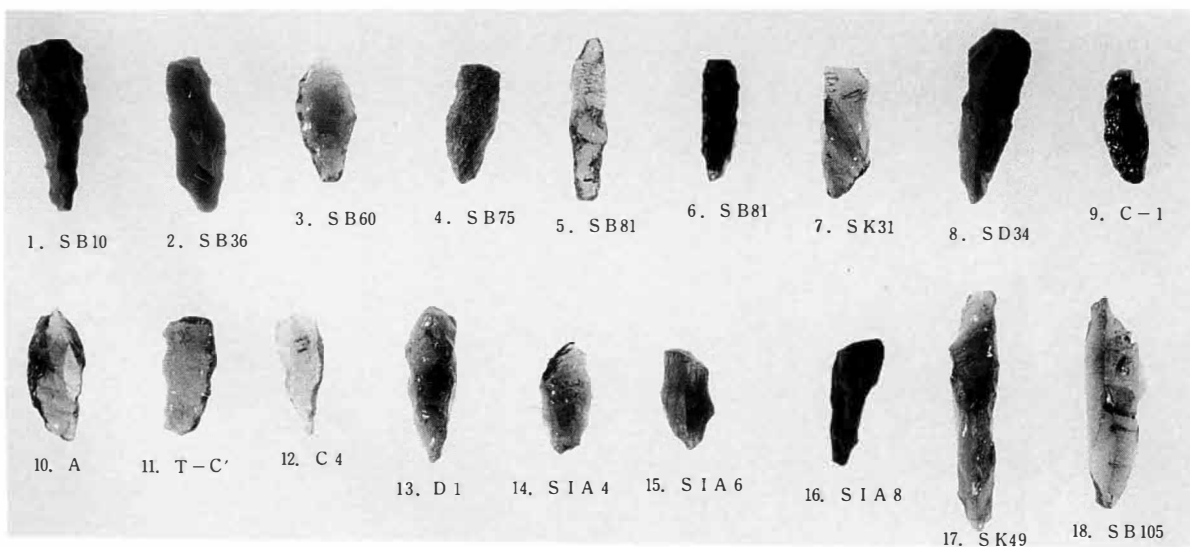
石材として珪質凝灰岩・粘板岩等がある。

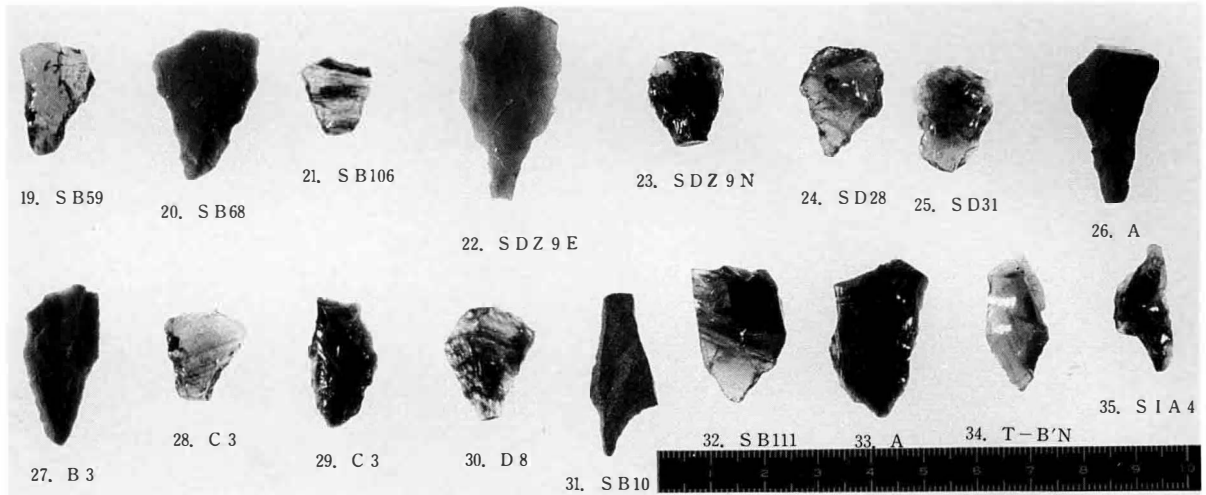


1-5群 石錐

棒状の先端部を作り出しており、その先端部に摩耗痕が認められるもの。全面に剥片剥離加工が施されているものと、周縁部及び局部だけに加工があるものとがある。全面のものは全体が棒状を呈するもの(1~16)、つまみを有しているもの(19~28)がある。周縁部または局部に剥離をもつものは不定形である(29~35)。

黒曜石・チャートが使用され、チャートの石錐は摩耗痕が顕著である。28点ある。

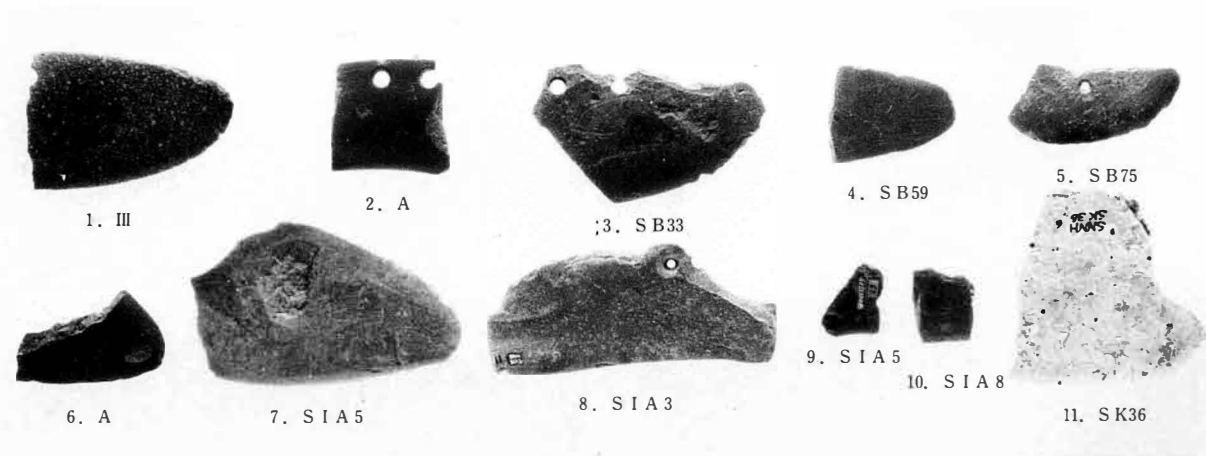




Ⅰ-6群 石包丁

研磨がなされ、鋭利な刃部を作り出し、刃部との対辺側に穿孔があるもの。研磨は1・4・6・7が全面になされて整った形をしている。5・8・11の刃部は研磨されて整えられている。対辺側は穿孔されるものもされないものも、剥片剥離加工が残されたままである。Ⅰ-7群①類に近い一群である。5が片刃で他は両刃であるが、2・4・10の刃部は丸味を帯びている。

安山岩・粘板岩・珪質凝灰岩、凝灰岩と様々な石材が使用されている。12点出土している。



Ⅰ-7群・Ⅰ-14群

Ⅰ-7群 剥片の周辺部に光沢痕をもつもので、形状は不定形で大きさも一定ではない。剥片剥離加工がなされ、研磨されるものもある。

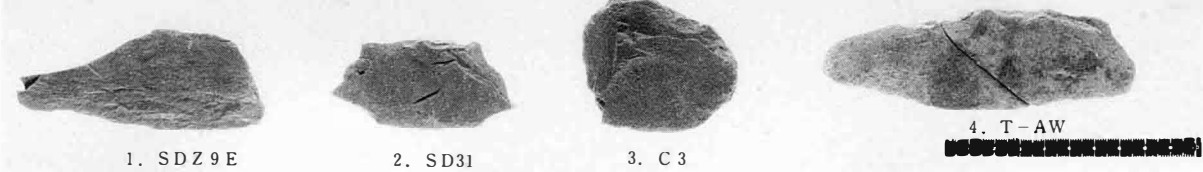
Ⅰ-14群 厚さ1cm前後の大形の剥片を使用し、形状を大きく変えることなく、剥片の鋭利な側縁に使用または調整加工による5mm以下の小さな剥離痕が認められるもの。形状及び大きさは一定でない。

以上の分類に従って分けると②-1の剥片は粘板岩製で顕著な光沢痕をもっている。これらの光沢痕をもつ石器は、Ⅰ-14群に分類される剥片の鋭利な側縁をそのまま利用している。使用頻度の低い剥片は光るまでに至らず、刃部にわずかな摩耗または刃潰れがみられる程度である。ここではⅠ-14群も含めて扱い、剥片にわずかな剥片剥離加工をして、剥片の鋭利な側縁を利用するものを一括した。弥生Ⅲ期に多くがある。

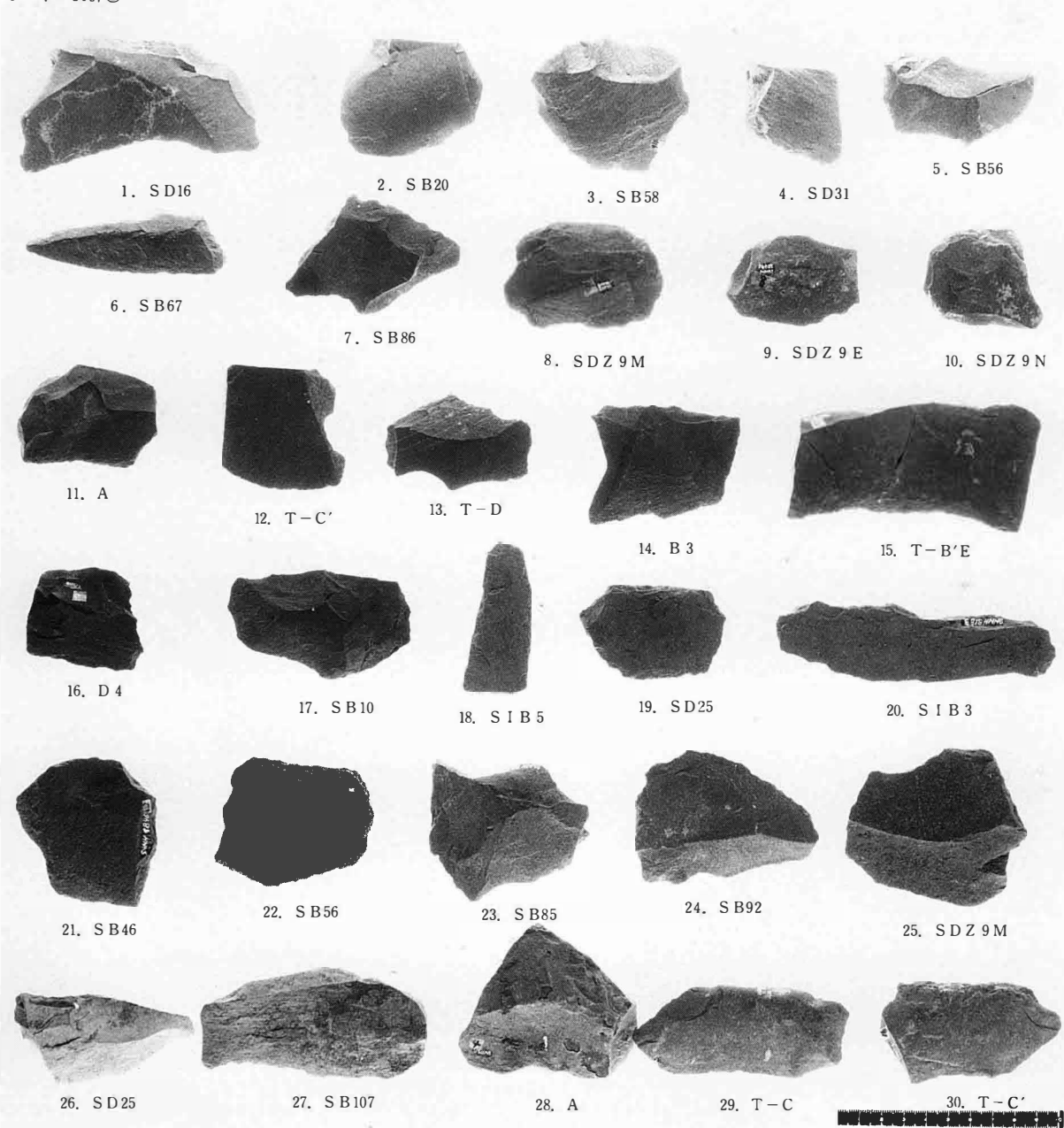
64点のうち示していないがチャート・珪質頁岩類は、側縁にのみ剥離痕がみられるもので、石器として定型的に造り出されたものではなく未成品でもないが、代用的に使用された可能性をもつもの18点も含めてある。また小形の粘板岩類の小さいものは破損品も含まれると思うが光沢をもつ剥片がある。

①は、剥片の刃部に研磨が施される剥片で、1は摩耗（光沢）痕と研磨がなされている。2・3は刃先の研磨のみである。石包丁の未成品ともいえるが、刃部にわずかな研磨を施し、そのまま利用している加工度の低さからここに分類した。

I-7群①



I-7・14群②

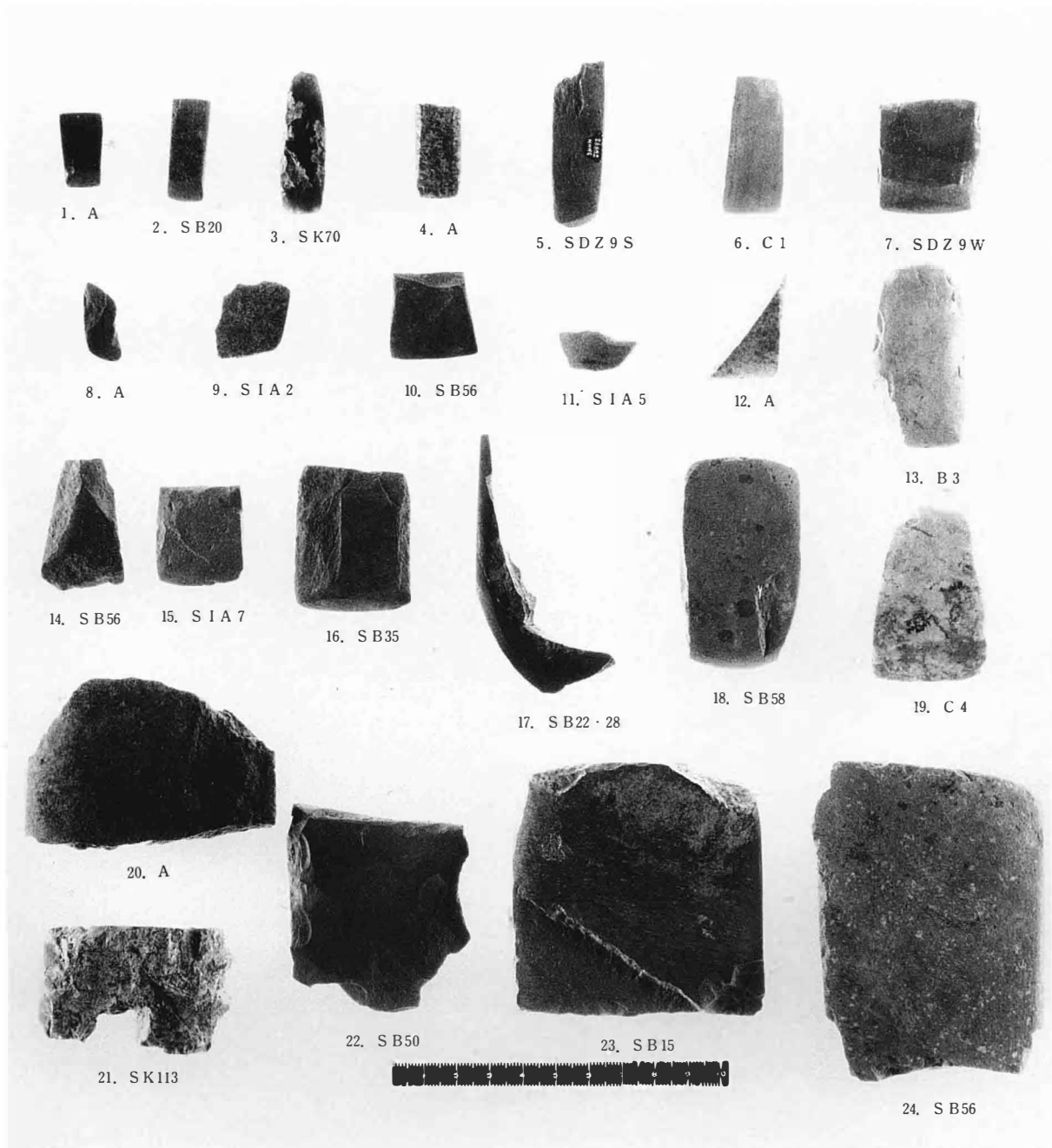


Ⅰ-8群 石剣

全面を研磨した剣形の石器と思われるもの。1点出土。(Ⅰ-9群の石剣未成品に該当するものはなかった。)

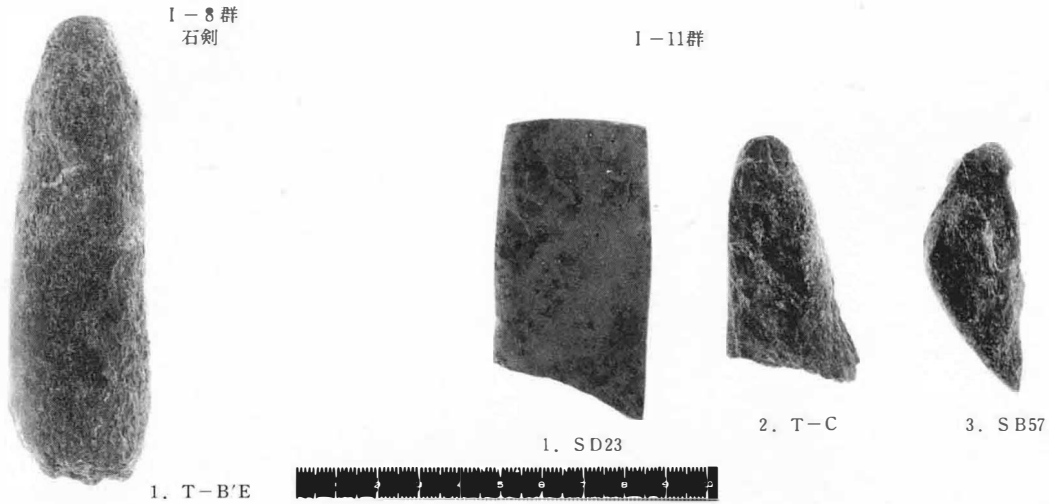
Ⅰ-10群 扁平片刃石斧

全面または一部が研磨され、研磨により一側縁部に鋭利な刃部を作り出した扁平な斧形の石器。大・小に大別され、小形のものにはノミ形の細身のもの(1~6)、幅広のもの(7~16・18・19・22)がある。大形のもので全体が残るものはなく、刃部はない(17・20~24)。刃部のあるものはいずれも片刃である。いろいろな石材が使用され、蛇紋岩・片岩・輝緑岩・粘板岩・砂岩等がある。26点出土している。大形品は幅が5cm以上で、厚手の輝緑岩製のものである。製作工程としては敲打により整え、研磨したもので、Ⅲ群の太型蛤刃石斧にも属するものである(20・23・24)。



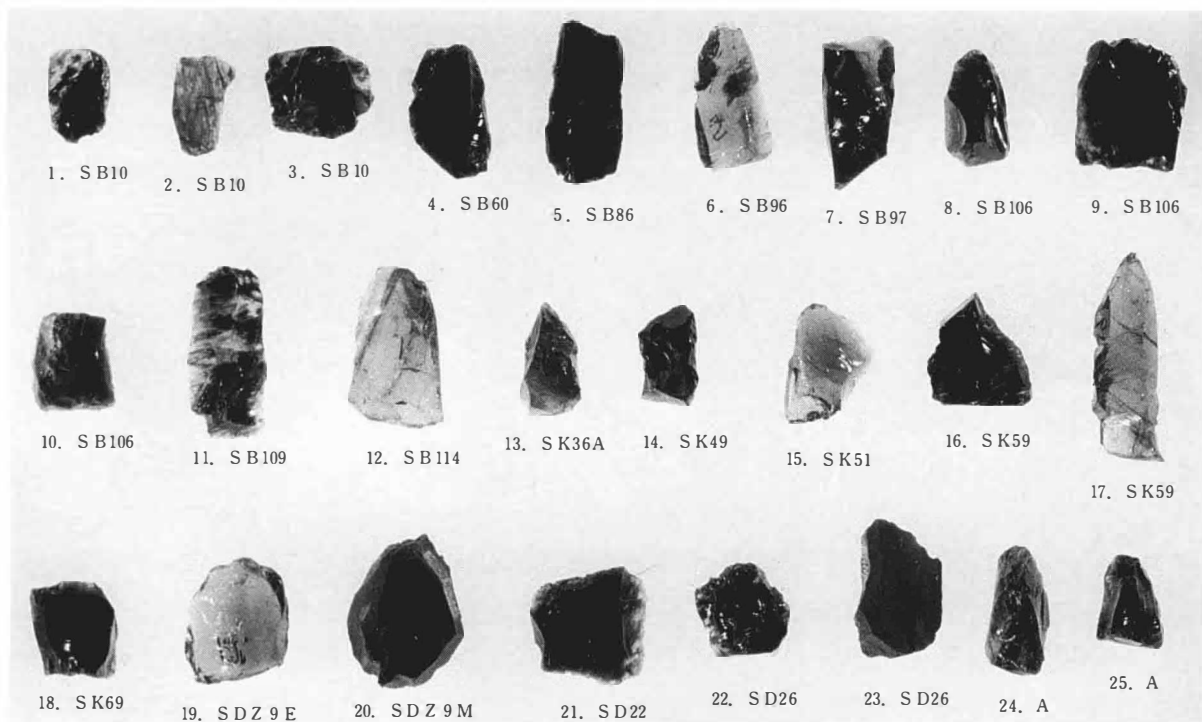
Ⅰ-Ⅺ群 扁平片刃（両刃）石斧未成品

剥片の一部に研磨痕が認められるもので、一部に稜を作り出しているもの。1は線状痕が残り、扁平石斧の基部の稜まで研磨しているが刃部は作り出していない。2も基部には研磨がなされるが、刃部は整形されていない。3は片面にわずかな研磨がなされる。

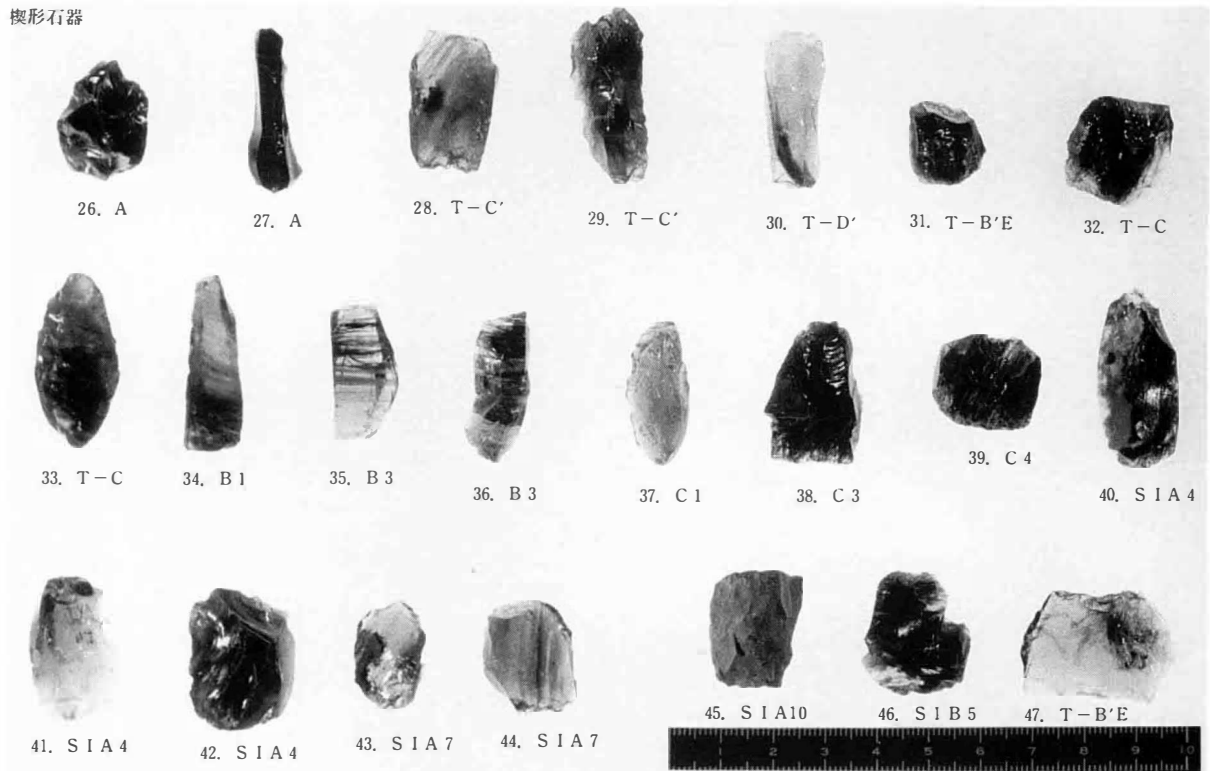


Ⅰ-Ⅻ群 楔形石器

対峙する辺に剥離痕があり、両極打法による剥離が認められる剥片。楔形石器である。46点ある。黒曜石がほとんどである。弥生Ⅱ期に多くの所産が帰属され、数量的にも多い。機能を特定することはできないが、一部には削器的な用途も予想され、一定の組成を成していたようである。

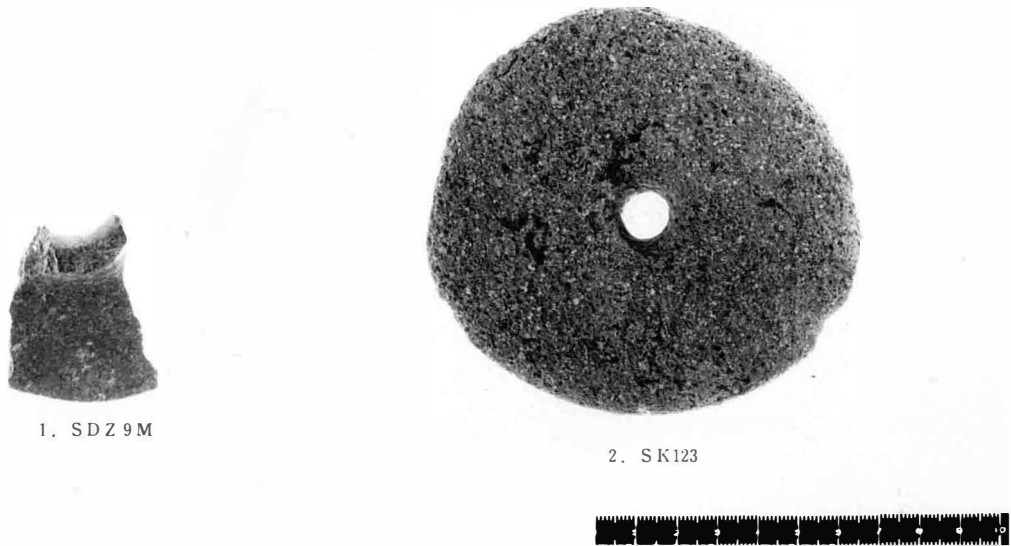


楔形石器



1-13群 環状石斧

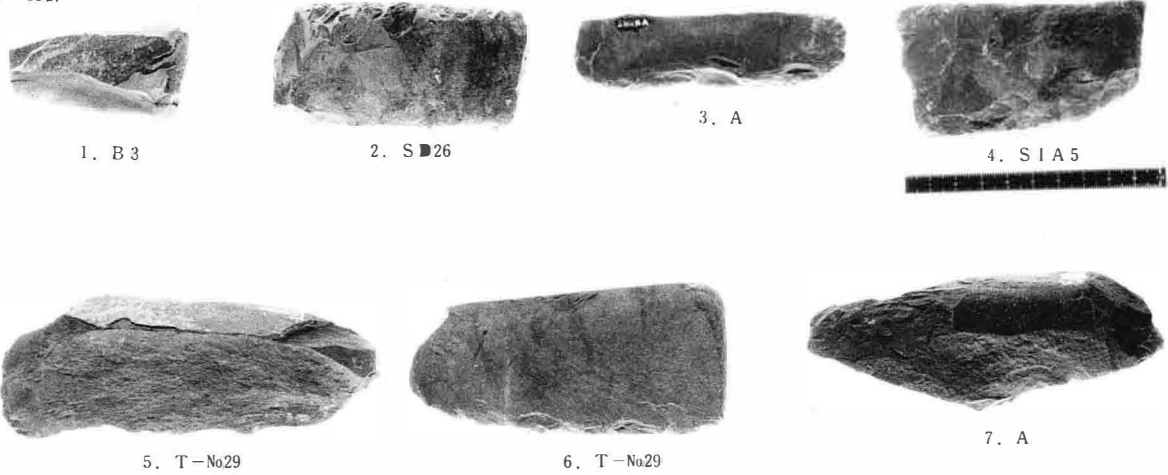
環状石斧の小片であるが、全面に研磨が施され、鋭利な刃部が作り出されている。輝緑岩製である。(2は安山岩製で穿孔されているが、周縁部は丸味を帯びており石斧ではない。)



1-15群

剥片剥離加工が施されたものを一括した。表裏両面より調整加工が施されているものが多く、何らかの形状を作り出そうとしているが、一定の形状は見出さないものである。2は剥離と研磨が施され、磨製品を作り出そうとしているようである。

I-15群

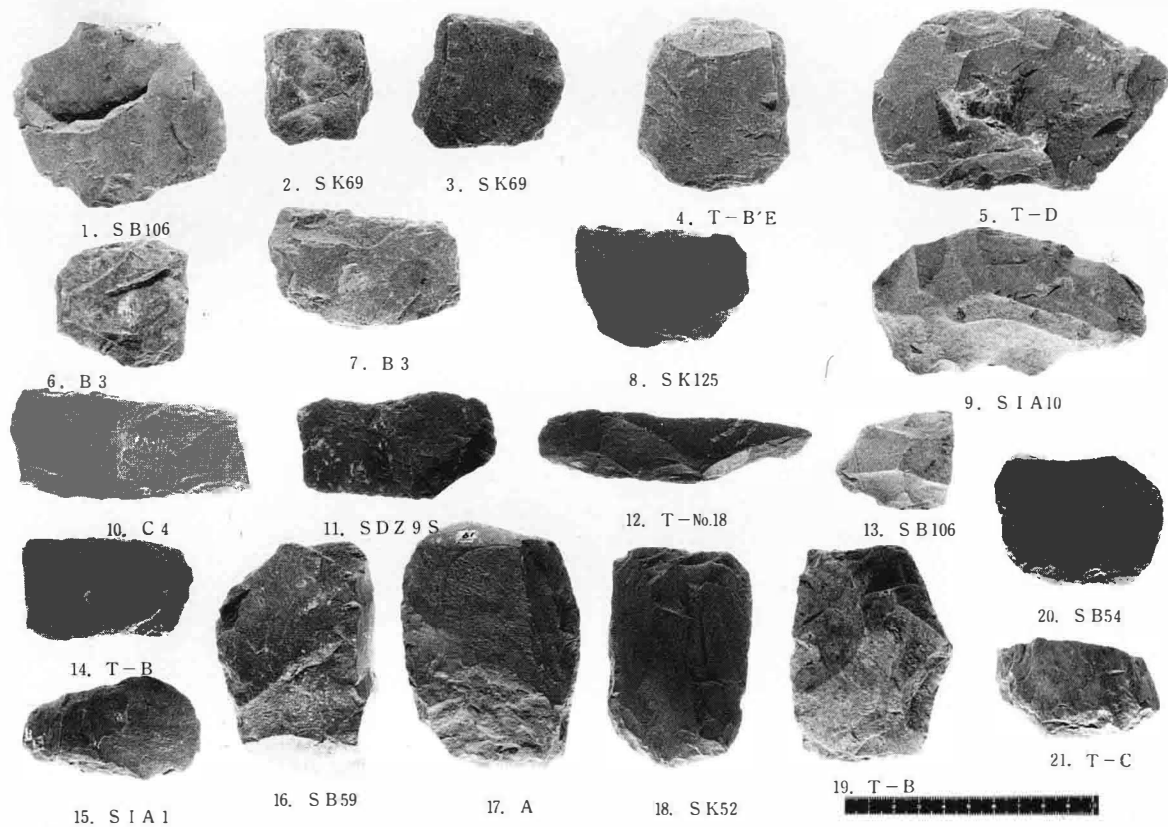


I-16群

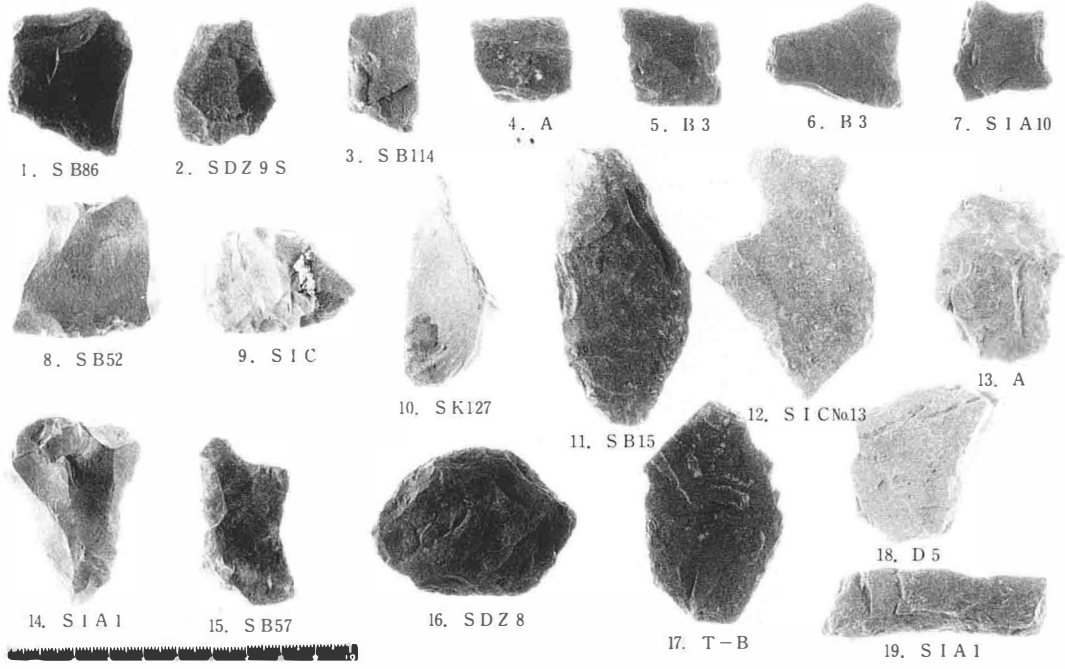
剥片剥離調整加工が施されるもので、特定の石器と判断できないものを一括した。打製石斧の破損品と思われるが断定できないものは含めた。鶴田分類では大形なものとなっているが、ここでは、剥片剥離を加えて利用している不定形な石器とした。①は剥離加工が明らかで、大形のもの。②は小形のもの、③は剥離加工度の低いものとした。また、スクレイパーも明確に判断できる②-10を除いて明確な基準で抽出することができないので含めてある。

①-10-12は薄手(1cm)の細長い長方形のものである。16は、片刃状になっており、摩耗痕がみられる。

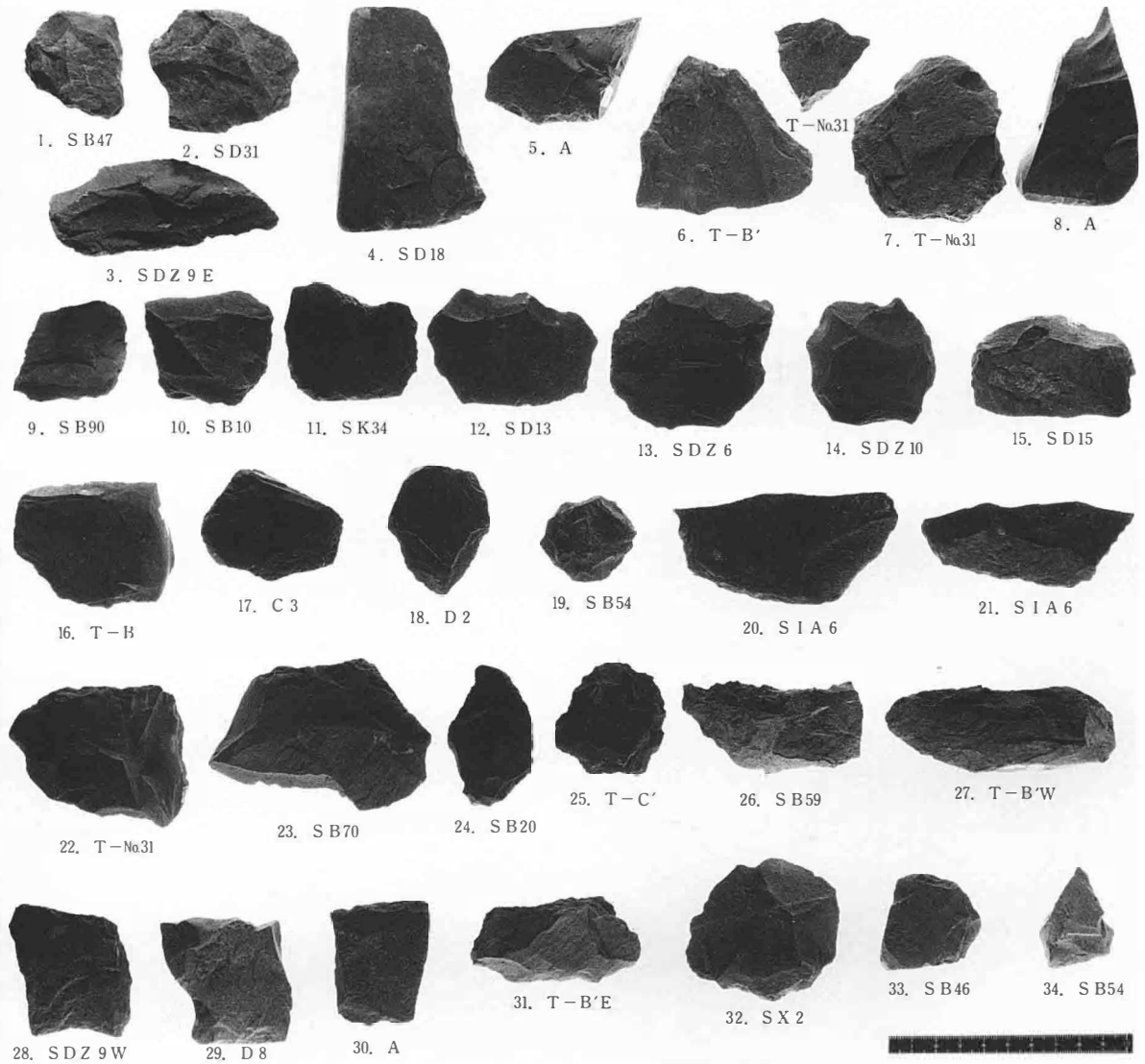
16群-①



16群-②

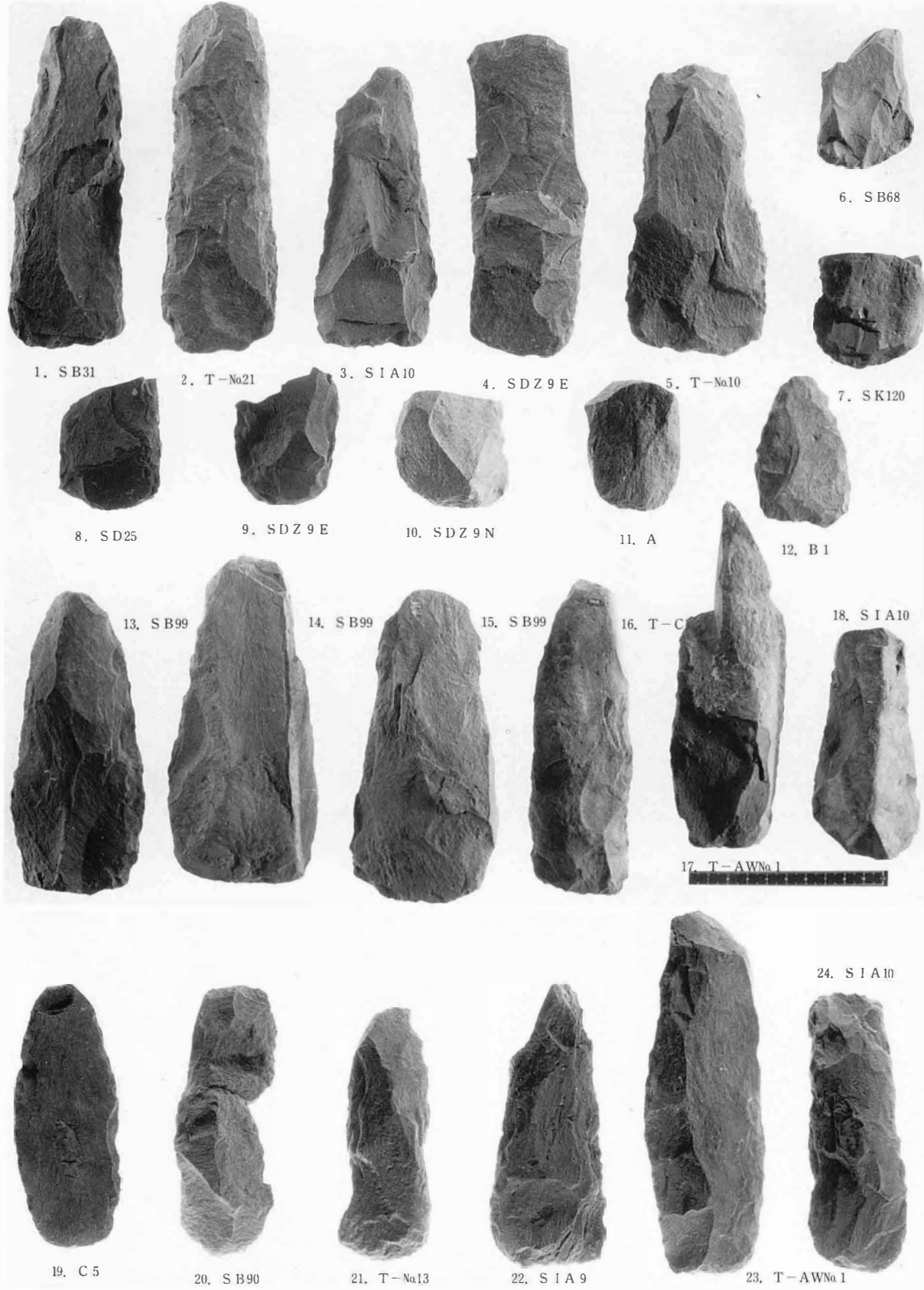


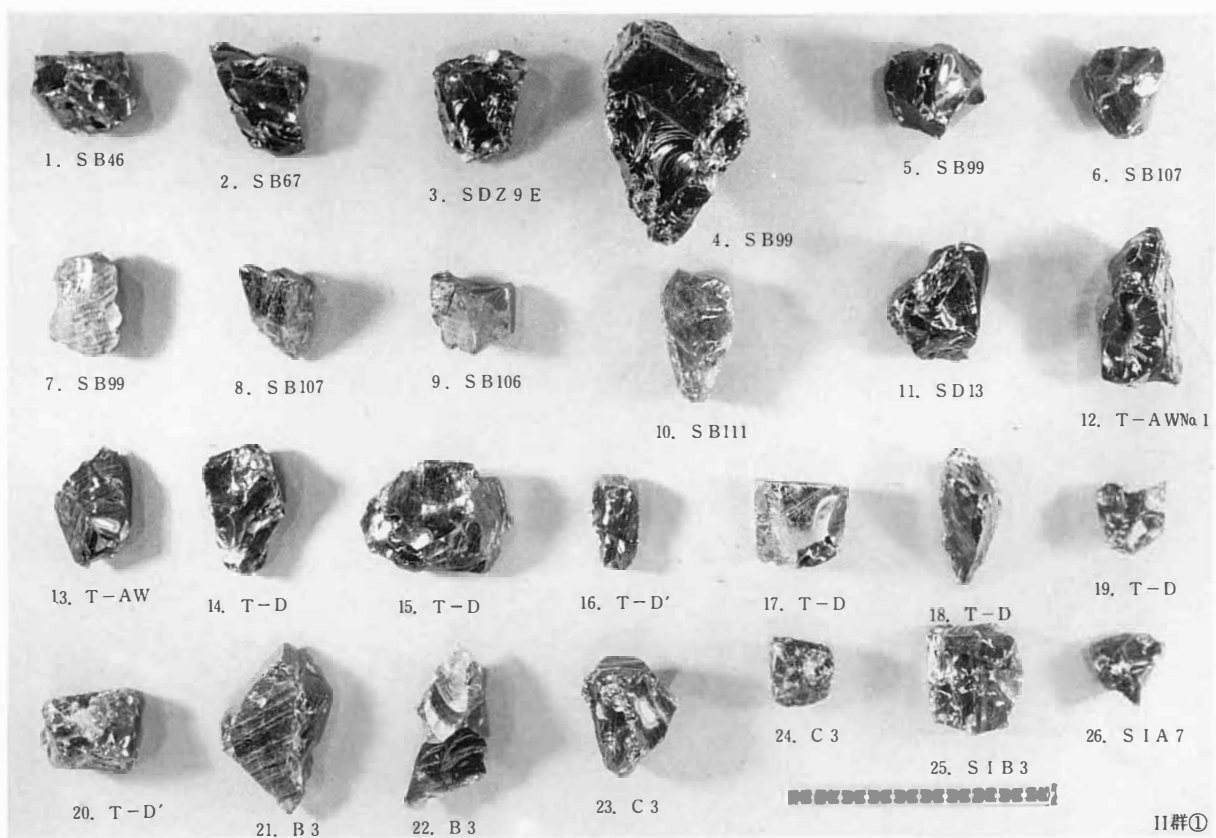
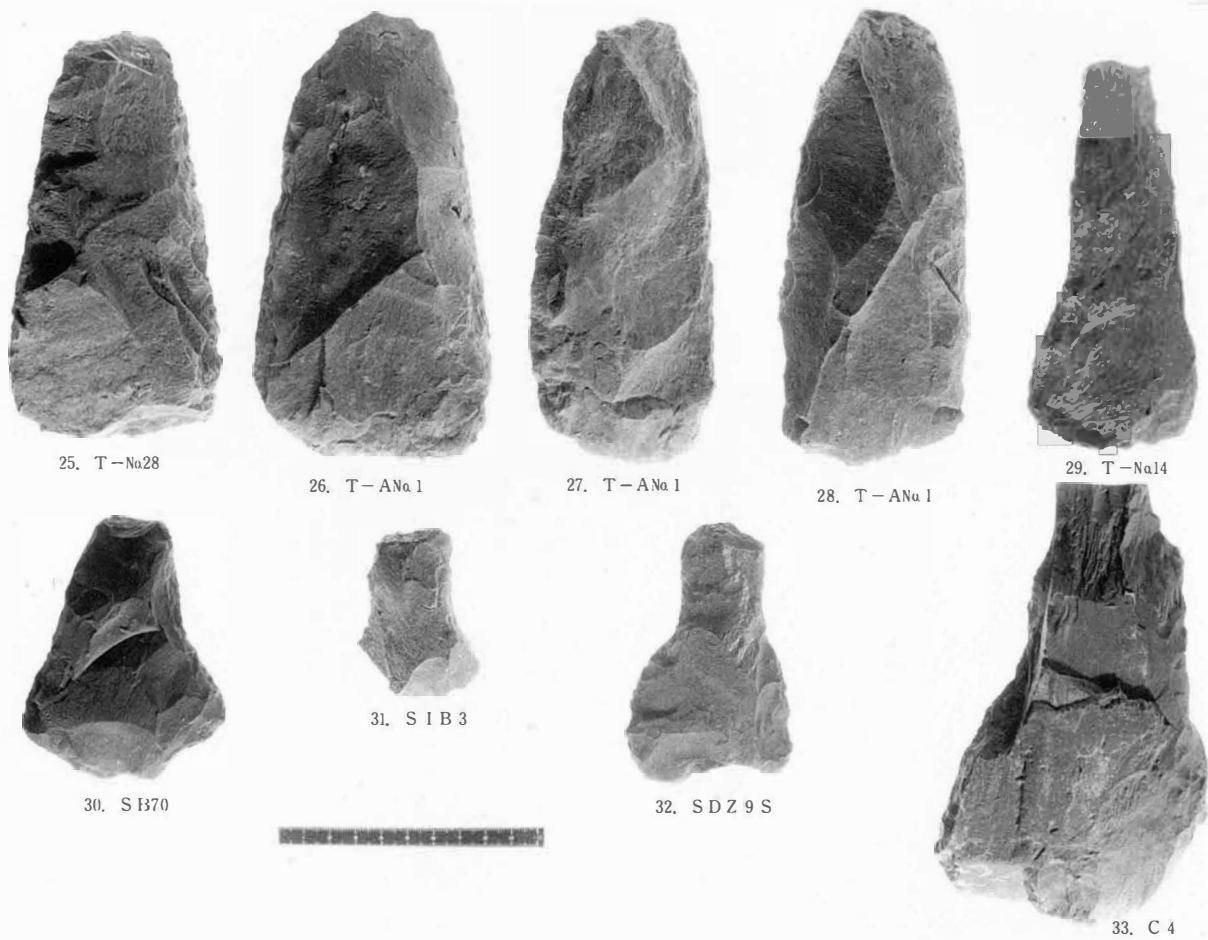
16群-③



1-17群 打製石斧

38点ある。使用した痕跡の顕著なもの12点と少ない。殊に完存するもののなかでは1~5に使用痕が認められるが、他は使用の痕跡が認められず未成品ともいえるものである。





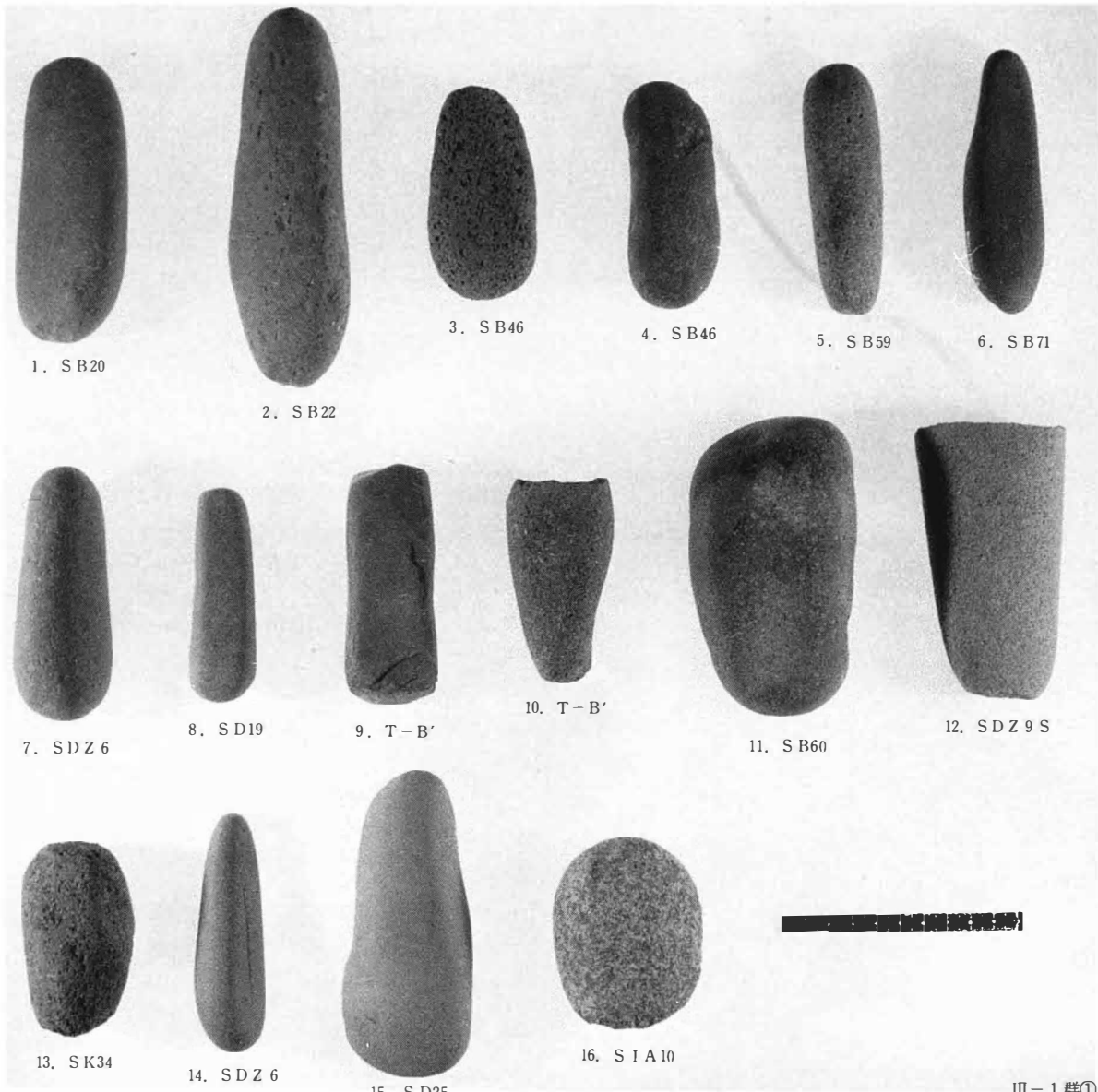
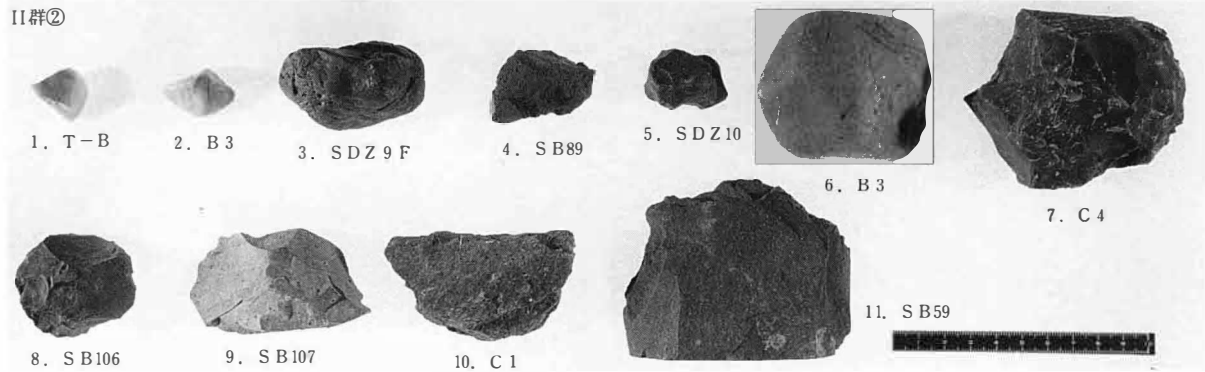
II群 ①残核（黒曜石）

②残核（チャート他）と原石

剥片を剝した残核、また原材料と思われる礫である。黒曜石26点。チャート・石英・粘板岩がある。

原石としては搬入品と思われる緑泥片岩・鉄石英・碧玉・ヒスイ・水晶・仏頭石等がある。

II群②



III-1群①

III-1群 敲打石・凹石・磨石

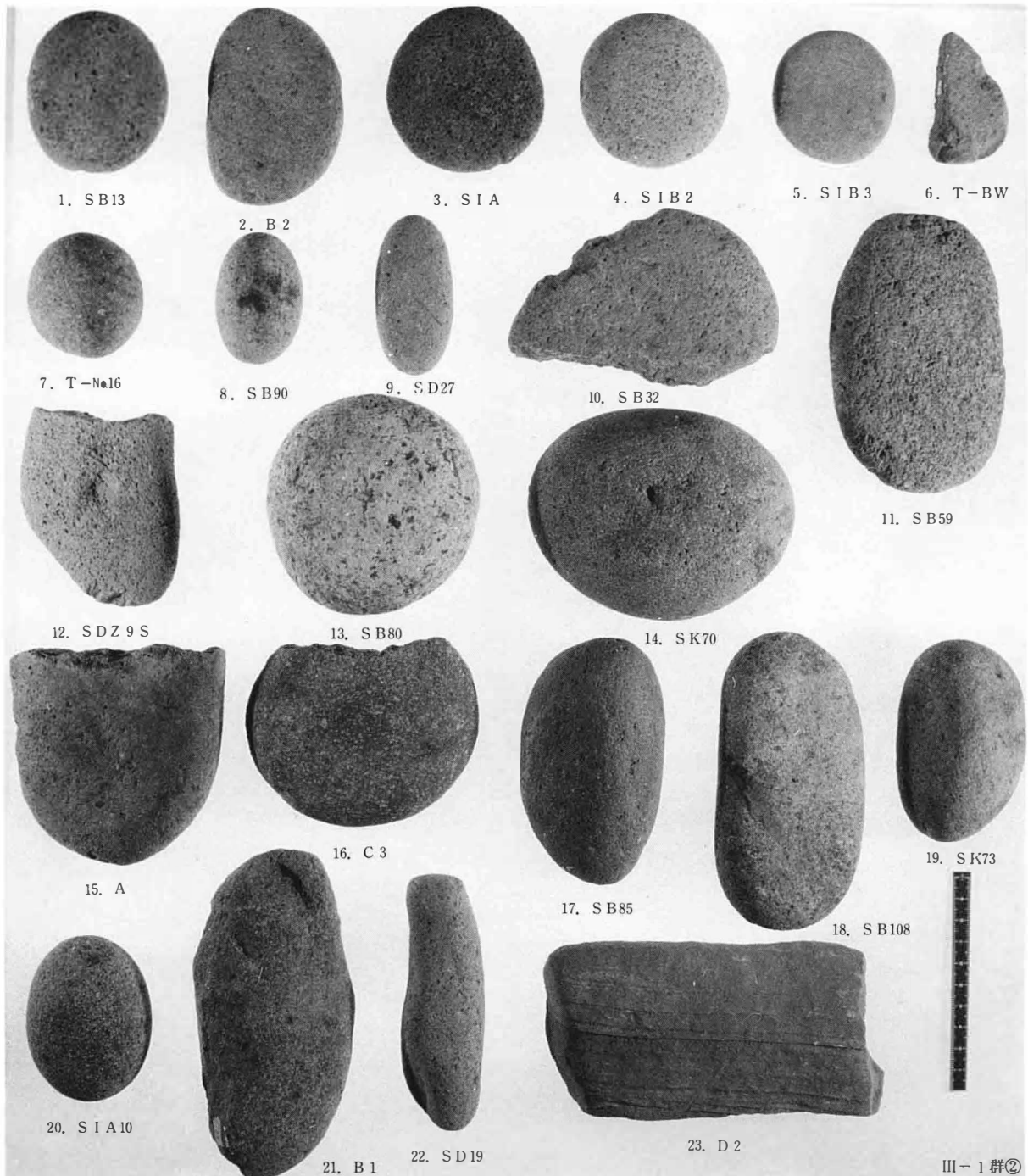
III-1群①

棒状の川原石を素材とし、敲打が認められるものである。40点ある。安山岩・粘板岩等の河原石である。

- 1 棒状の端部にツブレ痕をもつもの（1～10）
- 2 棒状で端部にツブレ痕と体部にスリ面のあるもの（14・15）
- 3 棒状ではあるが楕円形に近いもので両端に敲打痕があり、窪みとスリ面があるもの（11～13・16）

III-1群② 磨石

川原石をそのまま素材とし、円礫の平面を利用してスリ面としている。扁平な円礫を利用しているもの（1



～6、10～12)。12は線状の研ぎ痕と敲打痕がある。7～9は円球状である。22・23はスリ棒状に端部をスリ面としている。

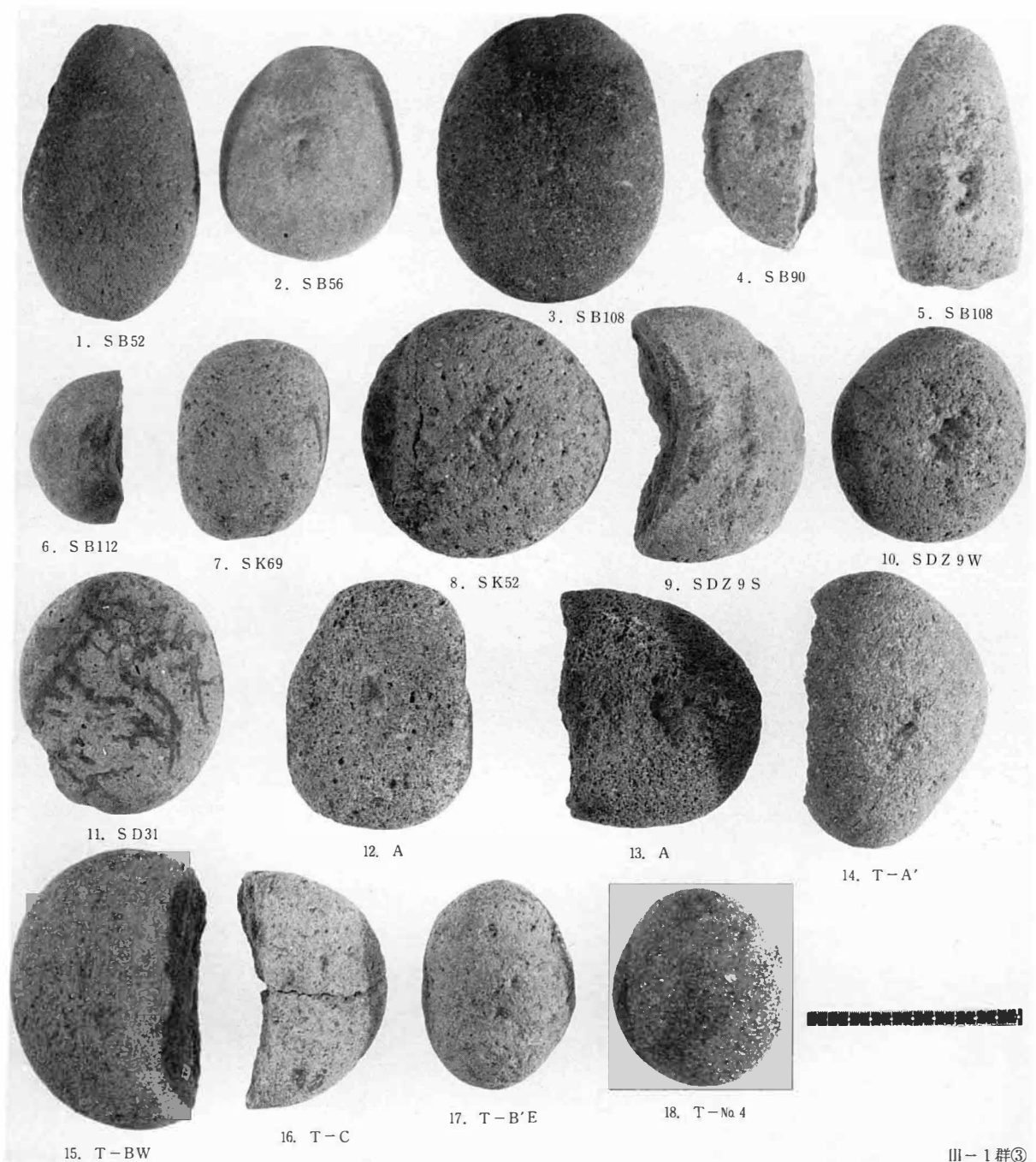
III-1群③ 凹石

円礫を使用し、敲打による窪みのあきらかなもの。

III-1群②・③で80点ある。

III-1群④ 凹石（未掲載）

掲載してないが、窪みを意図的に設けた凹石の一群である。これらは、平安時代～中世所産のものである。7点ある。多孔質安山岩製である。



III-1群③

III-2群 磨製石斧・太型蛤刃石斧

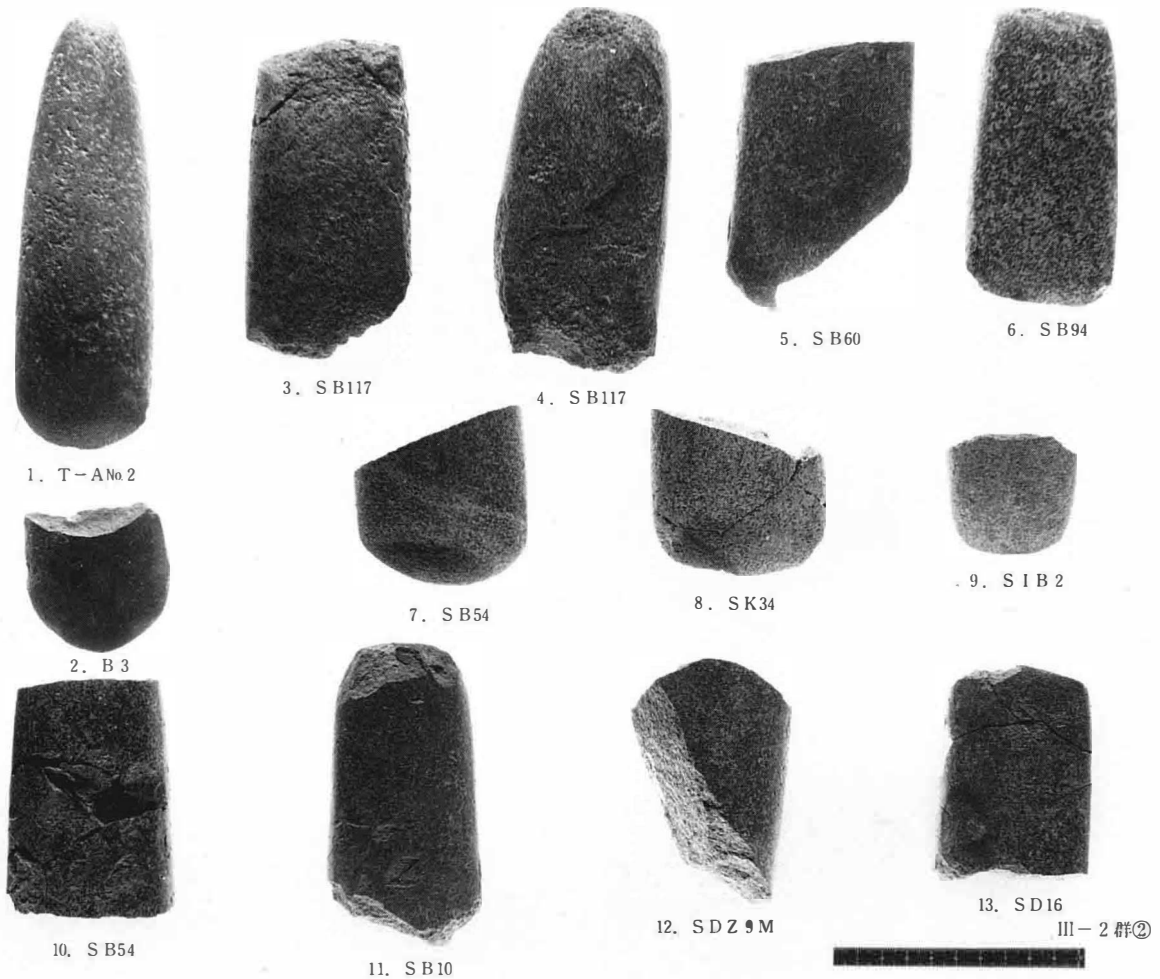
III-2群① 短小な磨製石斧

III-2群② 磨製石斧・太型蛤刃石斧

磨製の石斧類を一括した。

短小の石斧である5点のうち、1・2は研磨が全面になされ、2は両側面が研磨されたもので装着痕や刃こぼれが顕著である。4は刃部だけ研磨され、5は研磨面が一部あるのみのものである。2が片刃気味で他は両刃である。

②群の大形石斧は、1・2が乳棒状の緑色の珪質粘板岩製磨製石斧である。3～9は輝緑岩製太型蛤刃石斧で、側縁や頭部が研磨されて稜を作り出している。破損品が多く完存するのは一点のみである。10～13は刃部が欠損しており石槌の可能性もある。13は他よりやや扁平である。小破片も含めて21点ある。



III-3群 砥石

III-3群① 不定形な砥石

小さな棒状の川原石(砂岩等)をそのまま利用しているもの(5~9)。扁平な小円礫の平面を利用しているもので板状である(10~24)。置き砥石等の大形品の破片を利用しているもの(25~30)がある。

III-3群② 方柱状の砥石

矩形に整形されたものを使用した砥石で、砂岩と凝灰岩がある。11は穿孔されている。平安時代の所産で11点ある(2は古墳、13は弥生時代II。)

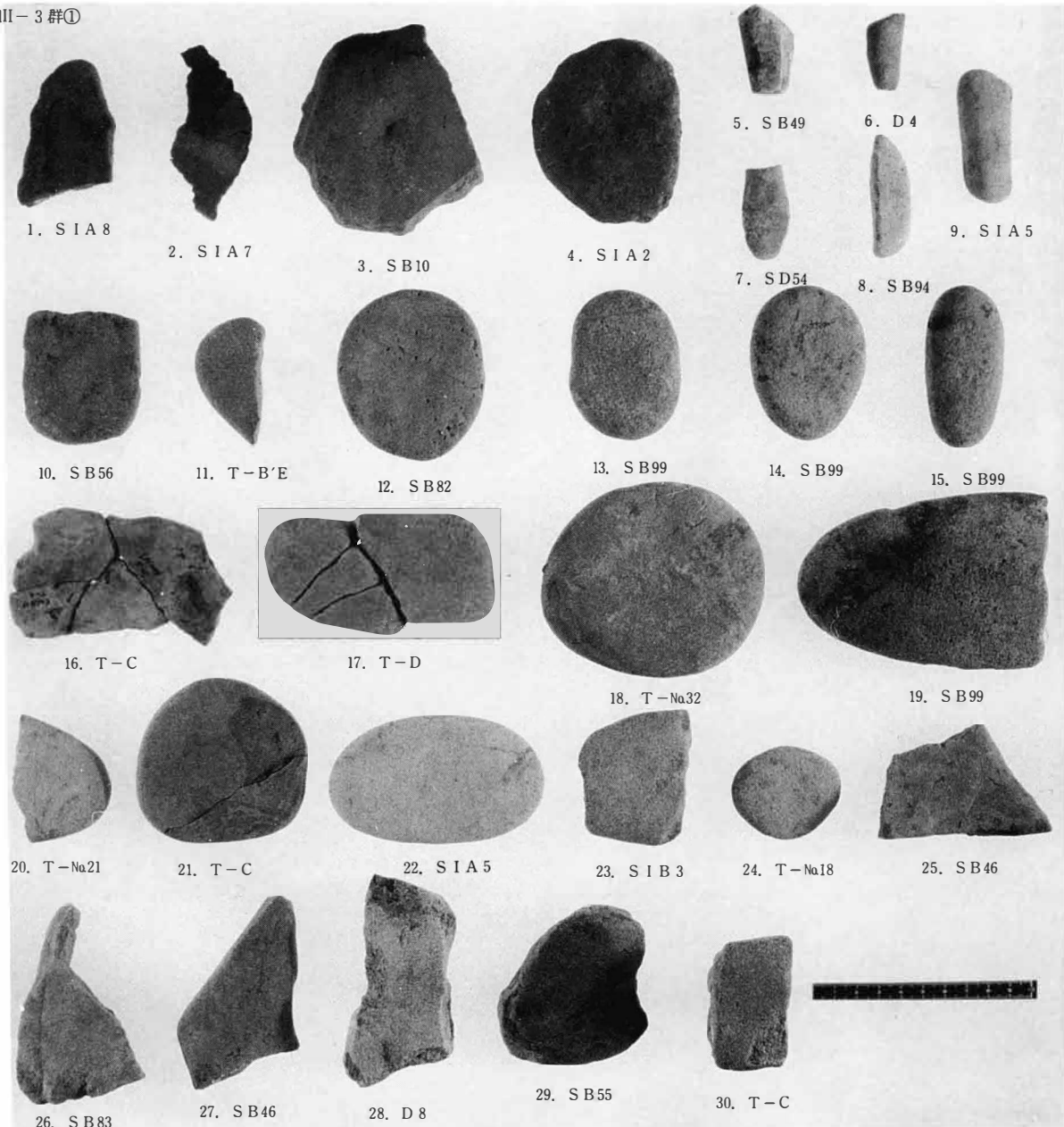
III-3群③ (鶴田分類III-6群 未掲載)

大形の礫面に皿状にくぼんだ研磨面があるもの。研磨面に数条の溝があるものもある。大形の砥石である。

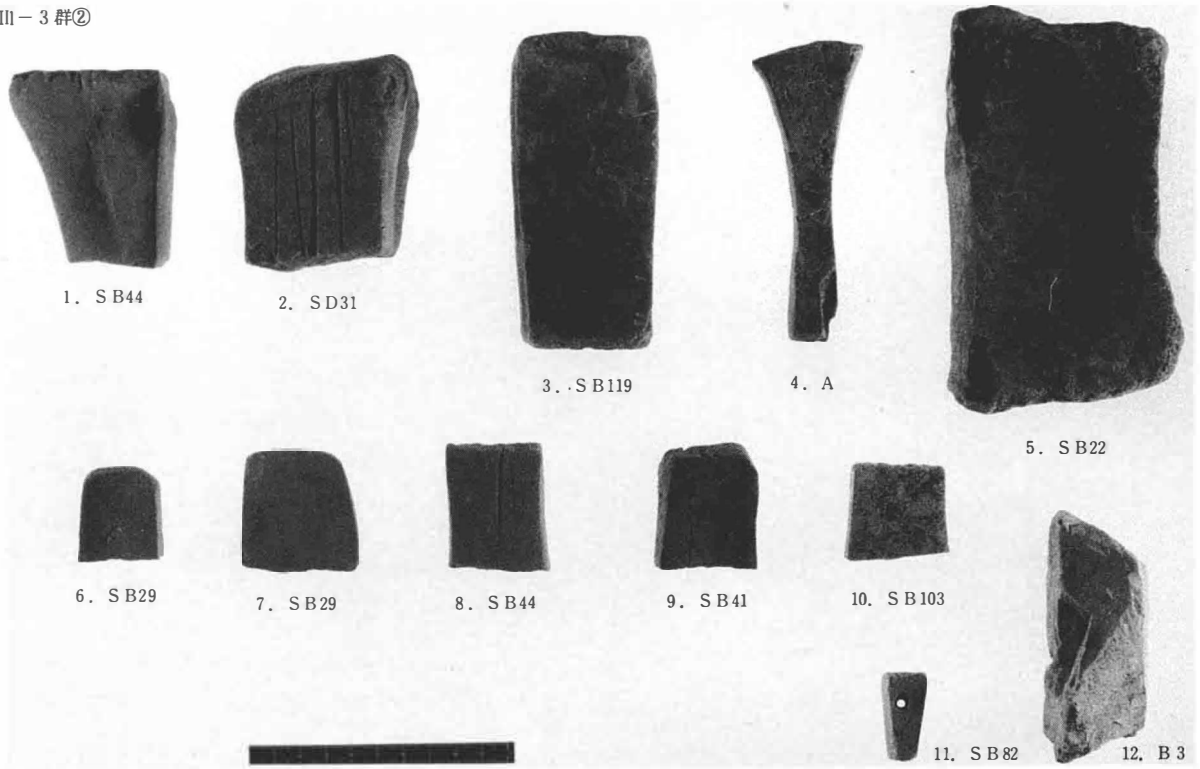
III-3群④ ミガキ石(未掲載)

小形の円礫の表面に研磨の際にできた擦痕を残すもので、土器等の器面調整に利用される。10点ほどある。

III-3群①



III-3群②

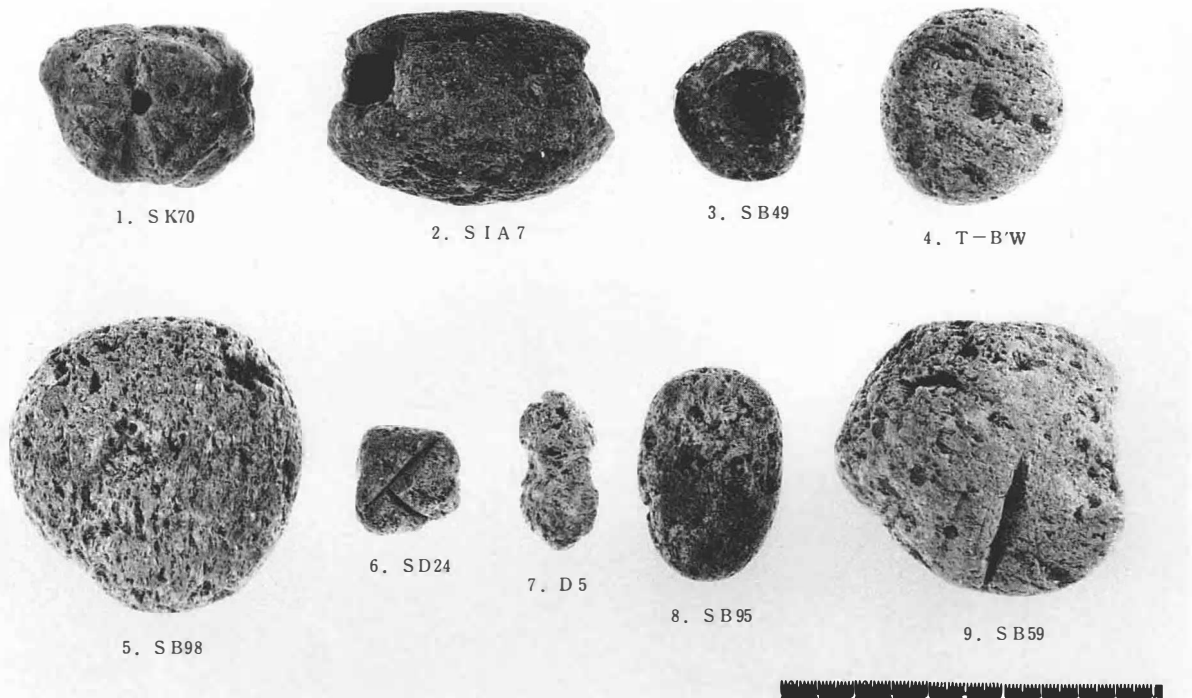


III-5群 台石 (未掲載)

大形の平坦な面をもつ自然礫の平坦面に研磨痕を有する台石である。1点ある。

III-7群 軽石製品

軽石製品を一括した。1・2は浮子であろうか、管状になっており、1は十字に溝をもち中央に円形の窪みをもっている。4・5は中央にのみ穴の穿ちかけ状の窪みをもっている。6～9は軽石を磨きに利用したものである。

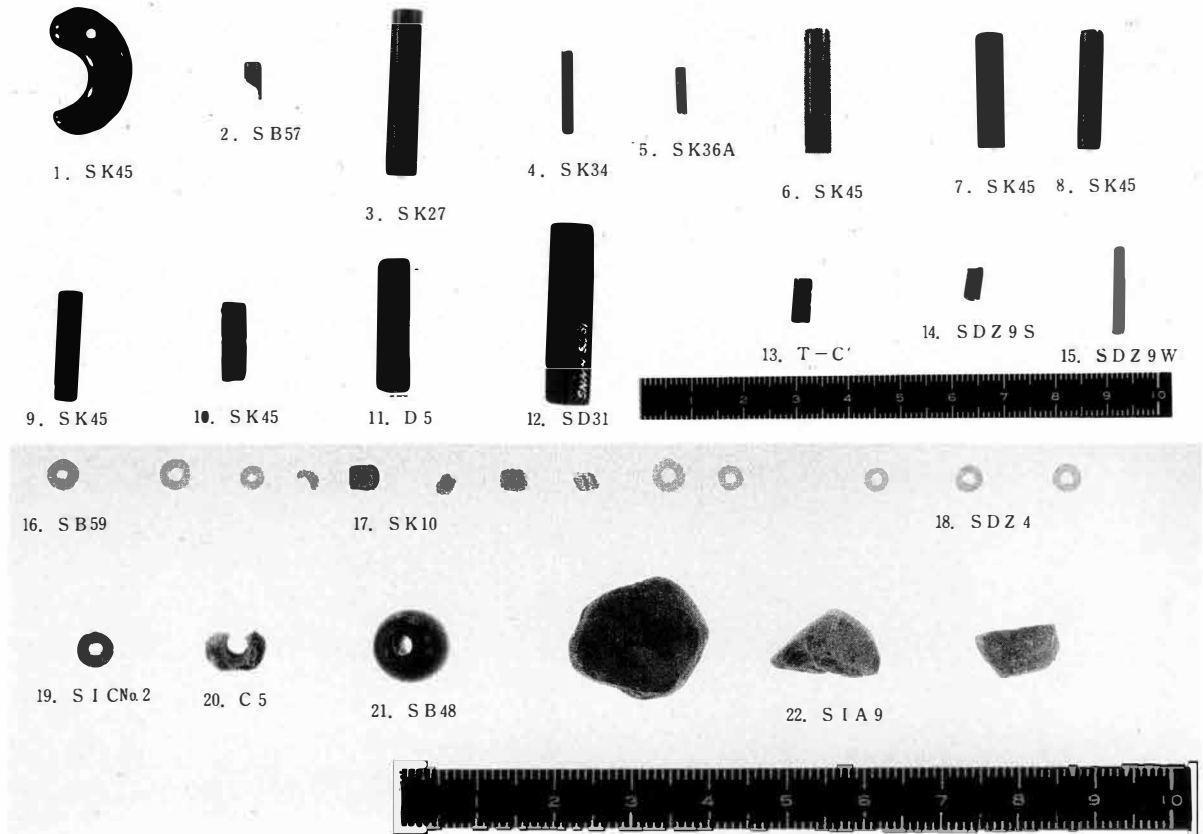


勾玉・管玉

4・14は鉄石英製、11は滑石製、それ以外は全て碧玉製である。1・6～10は土壙墓から、14・15は周溝墓から出土したものである。2・4・5は弥生II～IV期の所産、その他は古墳時代の所産と考えられる。

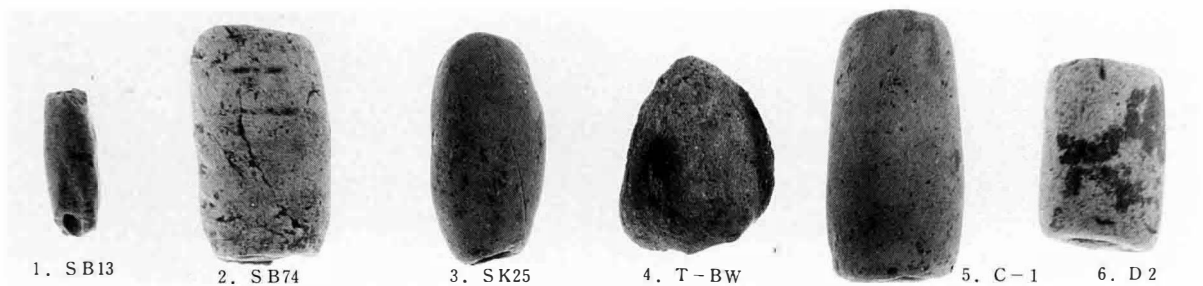
ガラス小玉・玉類・玉類未成品

16～18はガラス小玉で、コバルトとスカイブルーが見られる。19・20は滑石製白玉、21は滑石製丸玉である。22の3点は玉類の未成品、すべて滑石製で表面には粗い研磨痕が見られ、穿孔されたものもある。



土錘

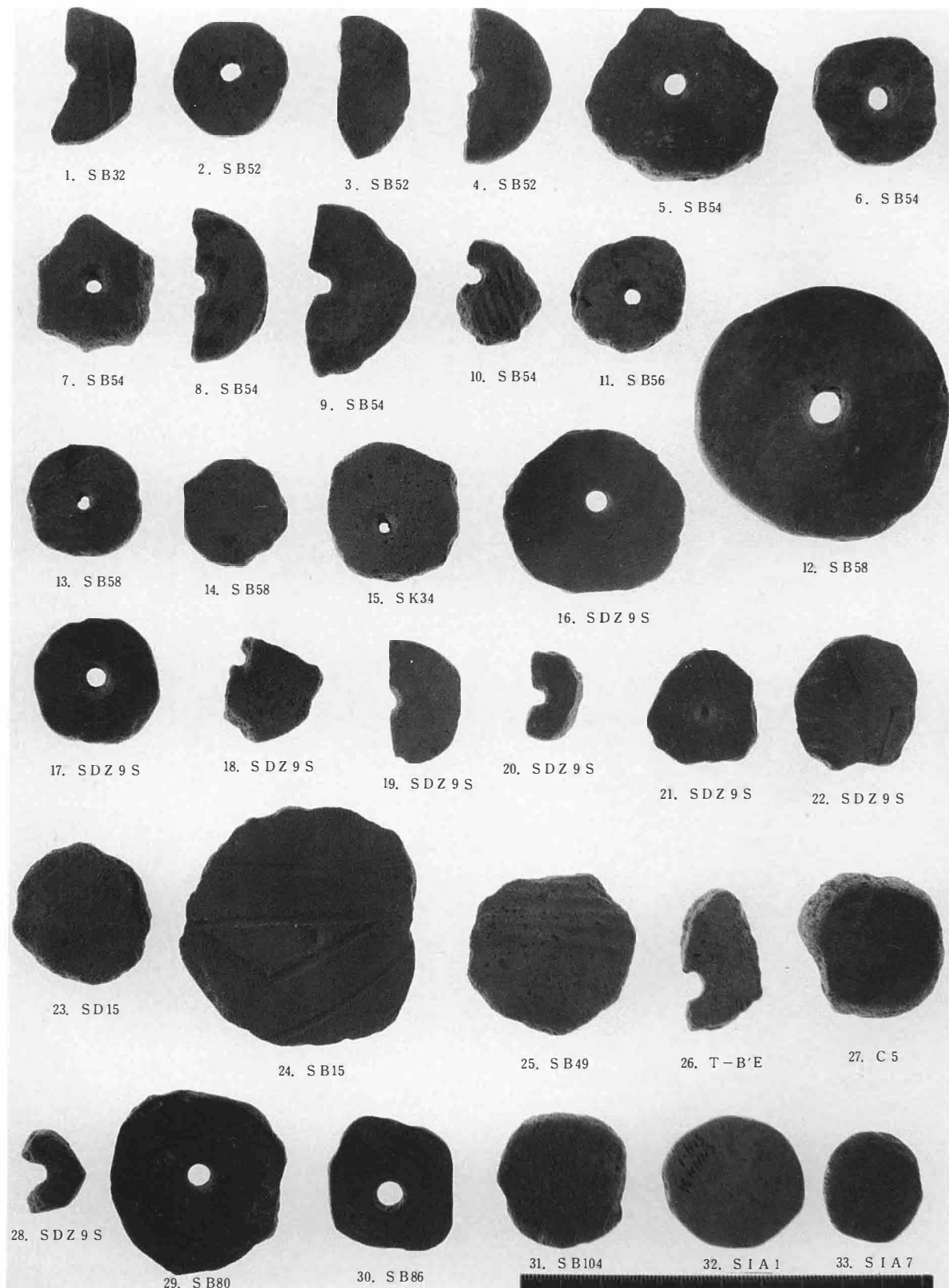
土錘は6点出土した。2の表面には圧痕のような横方向の筋が数カ所に見られる。すべて穿孔され、平安時代の所産と考えられる。



土製円板

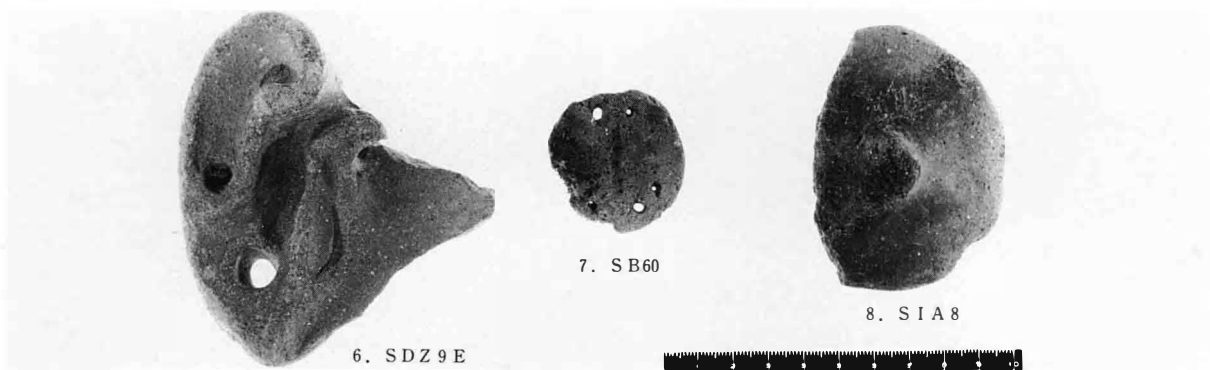
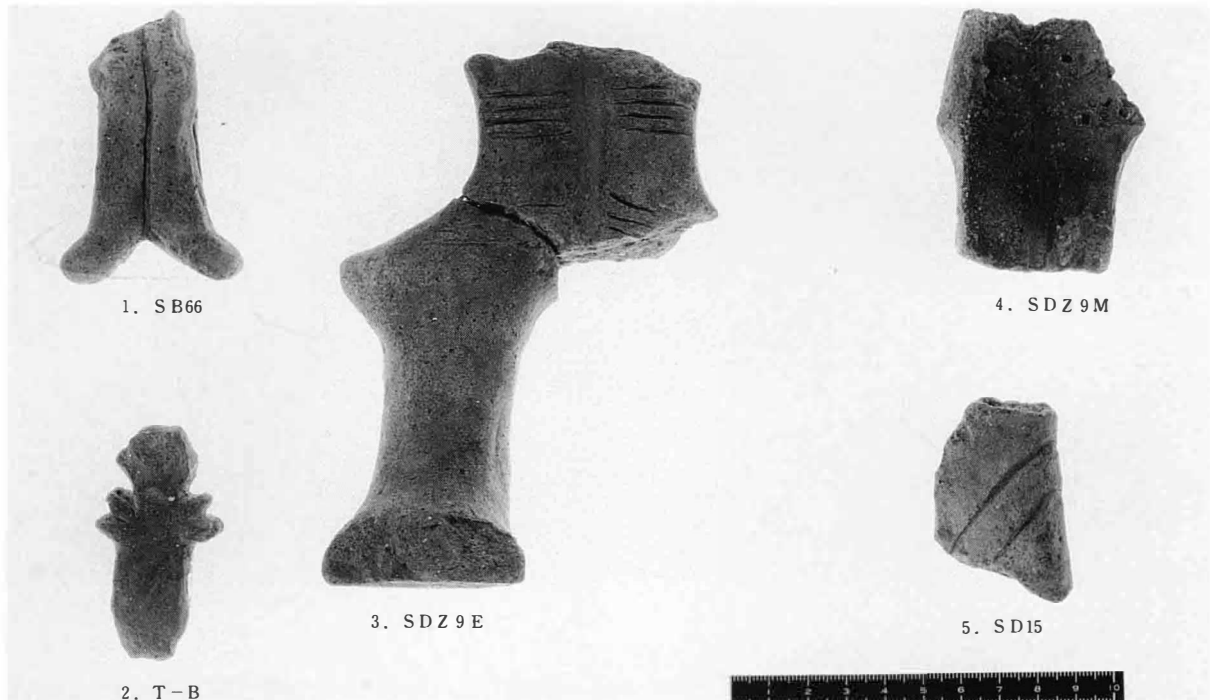
土器片を利用しているもので、端部を削って円形に整え、主に中央付近に穿孔している。穿孔途中、あるいは穿孔している痕跡のない円板もある。径3cm(4～5g)前後のものが多く見られるが、大きいもので径6cm、小さいもので径1.4cmを測り、大きさにはかなりのばらつきが存在する。

甕の体部破片を利用しているものがほとんどであるが、22・24は沈線文が施された壺の体部破片である。25には浮線文が施され、29は底部を利用している。6・8・9・11・12・17・20・32は赤色塗彩の破片を用いている。4は焼成前に整形されたもので、土製紡錘車と思われる。25は弥生I期、他は弥生II～III期の所産と考えられる。



土偶・土製品

土偶は全部で5点出土した。1は身体の中央と両側面に沈線を持ち、両手と頭部を欠く。2は頭部の数カ所に破損が見られるがほぼ完形に近いものである。3は体部上半と左足を欠く。体部腹面には沈線が、背面には同心円文様が施される。4・5は体部破片である。6は現状で三つの穿孔（一つは穿孔途中）を持ち、耳をモチーフとした土製品で、形態などから土面の破片と見られる。7・8は円板状土製品。7は現状で五つの小孔をもつ。8は中央につまみ状の突起をもつ蓋形を呈する土製品である。すべて弥生I期以前の所産であると考えられる。



紡錘車・瓦・羽口

紡錘車は二点。1は滑石製で古墳時代、2は土製で平安時代の所産である。3は布圧痕をもつ平瓦。

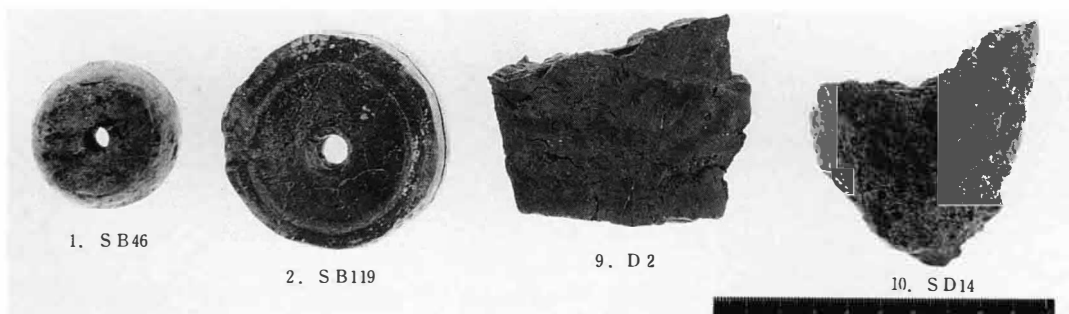


表9 石器・その他の出土状況と分類

地区	遺構	時代・期	1	1 未	2	3 4	5	6	7 14	10	11	12	15	15 Ob	16	17	Ⅱ 2	Ⅲ 1	Ⅲ 2	Ⅲ 3	Ⅲ 5	Ⅲ 7	Ob 個	剥片 g	珪頁剥片 個	珪頁剥片 g	粘板剥片 個	粘板剥片 g	軽石 個	その他			
ⅡⅢ	SB-8	弥生・Ⅴ																		2			1	5	1	4	2	14					
Ⅲ	SB-9	弥生・Ⅴ																															
Ⅲ	SB-10	弥生・Ⅲ	4	1					1			3		3	1					2	1		24	36	10	55	1	10		焼骨			
ⅢA	SB-12	平安・古																					1	3			1	2		土鍾			
ⅢA	SB-13	平安・中																	2							2	93						
Ⅲ	SB-14	弥生・Ⅲ							1														1	3			2	83					
Ⅲ	SB-15	弥生・Ⅲ								1					1				2	1			5	11	5	84	4	61		管玉・鉄滓・有孔円板・骨			
Ⅲ	SB-17	弥生・Ⅲ	1	1					1														5	18	4	26	13	39					
A	SB-19	平安・新																					16	50			6	17					
A	SB-20	平安・古							1										3				*	16	2	24	*	194		角釘・鉄滓			
A	SB-22	平安・古								(1)								1		1			9	64	1	6	1	23	20	鑿・刀子・鉄滓			
A	SB-25	平安・古				1																	1	3	1	3	7	33		鉄*・鉄滓			
A	SB-26	平安・中																					5	14			4	77					
A	SB-27	平安・古															1						1	4		1	5			獣骨・歯			
A	SB-28	平安?								1													2	5	1	2				骨			
A	SB-29	平安・古																					6	27			1	39		刀子・鹿角			
A	SB-31	平安・古	1						1														1	1					3	獣歯・鎌2			
A	SB-32	平安・中	1															2					6	8			4	63		有孔円板			
A	SB-33	平安・中					1																							釘			
A	SB-34	平安・中	2																				6	3						鉄滓・骨			
A	SB-35	平安・中	2							1													2	9			1	13					
A	SB-36	弥生・Ⅲ																		1			46	88			52	175					
A	SB-37	平安・古																					4	11			2	14		鉄滓・鹿角			
A	SB-39	平安																					2	3									
A	SB-40	平安・古	2																				3	12			1	170	3	珪実・釘・鉄滓・鹿歯			
A	SB-41	平安・古																															
A	SB-42	平安・古																					2	11			1	14	2				
A	SB-44	平安・中																					2	2					2	鉄			
A	SB-45	平安・中	1																1				7	14			1	25					
A	SB-46	古墳・後	3			1			1														5				12	166	1	滑石紡錘車・耳環2・焼骨			
A	SB-47	平安・古												1	1								19	64			10	53		丸玉			
A	SB-48	平安?																					6	8					10				
A	SB-49	平安・古	2																				12	21	1	6	3	18	19	円板			
A	SB-50	平安・古	1							1													6	31			2	5	10	刀子・骨			
A	SB-51	平安・古																					3	11			3	7					
A	SB-52	弥生・Ⅴ		1																			15	30	1	13				有孔円板 2	・土製紡錘車 1		
A	SB-53	平安?																					2	7			2	4					
A	SB-54	弥生・Ⅲ	3	1	1				2					1	3				1	2	4		28	62	4	27	20	141	5	有孔円板6	・鉄滓・骨		
A	SB-55	弥生・Ⅲ	2						1					1									15	33	2	15	18	226	3	珪玉・焼骨			
A	SB-56	弥生・ⅢⅣ	1			2			2	3	1								2	1	1		37	119			11	29	4	有孔円板			
A	SB-57	弥生・Ⅲ	2		1	3													1				32	49			12	81	7	管玉・人歯			
A	SB-58	弥生・Ⅲ	2						3	1													42	81			65	511		有孔円板3			
A	SB-59	弥生・Ⅴ	3	2			1	1	1														73	174	4	31	37	306		ガラス小玉			
A	SB-60	弥生・Ⅲ			1		1												2	1	1		44	103	2	8	4	64		骨針・土版・焼骨・鉄滓			
A	SB-61	弥生・Ⅲ																					17	34	4	41	12	303		鹿角			
A	SB-62	弥生・Ⅲ?																					13	16	1	4	5	71					
A	SB-63	平安				1																	16	24			5	40	7				

表9-2

地区	遺構	時代・期	1	1 未	2	3 4	5	6	7 14	10	11	12	15	15 Ob	16	17	Ⅱ 2	Ⅲ 1	Ⅲ 2	Ⅲ 3	Ⅲ 5	Ⅲ 7	Ob 個	剥片 g	珪頁剥片 個	珪頁剥片 g	粘板剥片 個	粘板剥片 g	軽石 個	その他		
B	SB-65	平安																											1			
B	SB-66	古墳・前																					4	15	1	3			4	土偶		
B	SB-67	古墳・前							1					1		1							30	63			8	47	2			
B	SB-68	弥生・I?					1								1			1					33	126	1	2	5	53				
B	SB-69	古墳・前?																					3	4			1	5				
B	SB-70	古墳・前	1	1											1	2					1		10	115			3	42				
B	SB-71	古墳・前															1	1					8	25			2	9				
B	SB-72	古墳・前?																					3	19			2	14				
B	SB-73	弥生・II																					4	7			4	24				
C	SB-74	平安・中																					4	17			2	37	1	鉄滓		
C	SB-75	平安・中	2				1	1															13	89	7	40	6	41	2			
C	SB-76	平安・中																					4	7								
C	SB-77	平安・中																					1	2								
C	SB-78	平安・古																					5	25								
C	SB-79	平安・中	1																				12	35	1	1				釘		
C	SB-80	古墳・前	1																1				16	33								
C	SB-81	古墳・前				1																				1	6	1	4			
D	SB-82	平安・新																													刀・土錘	
D	SB-83	平安・新																														
D	SB-85	平安・新							2														2	7	1	5	2	26		釘・石鉢・馬歯		
D	SB-86	弥生・III	2	1					3		1			3	1					1			25	73			23	45	6	有孔円板		
D	SB-87	古墳・前																					1	1			1	3				
D	SB-88	古墳・前					1																1	1			1	4				
SIA	SB-89	平安・新																					4	7						9	刀子・鉄石英原石	
SIA	SB-90	弥生・II												1	1	1							1	4			2	12				
SIA	SB-91	弥生・II	1											2									13	24			7	80				
SIA	SB-92	平安・中	1						1			1															1	26				
SIA	SB-93	弥生・III												1									4	29	1	10	2	8				
SIA	SB-94	弥生・III																		1	1											
SIA	SB-95	平安・新																					2	3							釘・鉄滓・骨	
SIA	SB-96	平安・中												2									14	28			1	2			鉄滓	
SIA	SB-97	平安・中										1											1	1	1	4					骨	
SIA	SB-98	平安・中?																					1	1						1	刀子	
SIA	SB-99	平安・古						1						3	1								30	100	4	20	7	68				
SIA	SB-100	平安・古	2	1										2																2		
SIA	SB-101	平安・古	1																				6	*						1	鉄滓	
SIA	SB-103	平安・古		1										1									2	5			3	5	1		鉄滓	
SIA	SB-104	平安・古																					9	26	2	6	1	15				
SIA	SB-105	弥生・V												2									3	4			1	16				
SIA	SB-106	弥生・II	4	1			1	1				3		3	2								63	133			18	118				
SIA	SB-107	弥生・II							2																							
SIA	SB-108	弥生・I																					3	13			2	8				
SIB	SB-109	平安									1			2	1								57	138	5	20	12	163			骨	
SIB	SB-110	平安・新												1									3	8			*	25	3		鉄滓	
SIB	SB-111	平安・中												1									3	6								
SIB	SB-112	平安							1														1	3						1		
SIB	SB-113	古墳・前																					2	5						1		

表9-3

地区	遺構	時代・期	1	1未	2	3	4	5	6	7	14	10	11	12	15	15Ob	16	17	Ⅱ2	Ⅲ1	Ⅲ2	Ⅲ3	Ⅲ5	Ⅲ7	Ob 個	剥片 g	珪頁剥片 個	珪頁剥片 g	粘板剥片 個	粘板剥片 g	軽石 個	その他		
SICD	SB-114	平安・中												1		1	1								1	2			1	1		鉄滓		
SICD	SB-115	平安・中																							1	1				4				
SICD	SB-116	古墳・前																							7	25	2	12						
SICD	SB-117	弥生・ⅢⅣ		1																		2			4	29			1	10				
SICD	SB-118	古墳・前	1																						1	1			1	10	3			
SICD	SB-119	平安・古															1								6	12								
SICD	SB-120	古墳・前																							8	19			5	18				
ⅡⅢ	SDZ-3	古墳・前																														鉄・鹿歯		
Ⅲ	SDZ-4	弥生・Ⅴ																														ガラス小玉3・骨(土器棺)		
Ⅲ	SDZ-6	弥生・Ⅴ	1														1				2								1	10	1			
ⅢA	SDZ-8	弥生・Ⅴ?															1								3	2					4	銅指輪・骨		
A	SDZ-9	古墳・前	7	1		4		2	4	2				2		4	3	5	1	9	1	5			222	526	9	78	77	877	47	土偶2・円板8・管玉・環状石斧		
A	SDZ-10	古墳・前	1	1		1											1								16	29			4	13	74			
Ⅲ	SD-13	奈良・平安															1		1			2			4	13					3			
A	SD-14	平安・古																							1	1						ふいご羽口		
A	SD-15	古墳・前	1														1								17	22		12	73			刀子・鉄・土偶・円板		
A	SD-16	弥生・Ⅲ?		1												1									10	53		9	72					
A	SD-17	平安?																							1	1								
A	SD-18	弥生・Ⅲ																							2	27		3	21					
A	SD-19	弥生・Ⅴ																			2		1				1	35	2	19	17			
A	SD-20	平安?																							2	2			2	2				
A	SD-21	平安																1							7	15		6	126	3		骨		
B	SD-22	古墳?												1											5	14	1	2						
B	SD-23	平安	1									1													10	23		3	94					
B	SD-24	古墳・前															1	1	2					1	13	12		4	25	23				
C	SD-25	古墳・前	1					2									1	2	1						29	102	1	9	85	2				
C	SD-26	平安・古	1											2	1										42	146	2	12			28	緑泥片岩・骨・歯		
D	SD-27	平安																							1	5		1	10					
SIA	SD-28	平安					1																		24	43	1	15	1	5				
SIB	SD-31	古墳・前	1	1			1		3							1						2			27	143		16	113	1		管玉		
SIB	SD-32	弥生																							4	7								
SICD	SD-34	平安?					1																		5	14		2	11					
Ⅲ	SK-7	弥生・Ⅲ																															鹿歯	
Ⅲ	SK-10	弥生・Ⅴ																							5	4		1	3			ガラス小玉9・鉄剣・鉄釧		
Ⅲ	SK-11	弥生・Ⅴ?																															鉄鏃	
Ⅲ	SK-12	弥生・Ⅴ?																															鉄釧	
Ⅲ	SK-14	弥生・Ⅴ?																															鉄釧	
A	SK-18	弥生?																							2	2								
A	SK-19	中世							1																									
A	SK-20	平安・中																											2	12				
A	SK-21	平安・中																																
A	SK-23	中世																																
A	SK-24	古墳・前																							1	2	1	7						
A	SK-25	平安・中																															土鍾	

表9-4

地区	遺構	時代・期	1	1 未	2	3 4	5	6	7 14	10	11	12	15	15 Ob	16	17	Ⅱ 2	Ⅲ 1	Ⅲ 2	Ⅲ 3	Ⅲ 5	Ⅲ 7	Ob 個	剥片 g	珪頁剥片 個	珪頁剥片 g	粘板剥片 個	粘板剥片 g	軽石 個	その他		
A	SK-26	平安																					2	3			3	6		鹿齒		
A	SK-27	古墳																												管玉・骨		
A	SK-28	平安?																										1	骨			
A	SK-30	弥生・Ⅲ?																					3	24		1	8		焼骨			
A	SK-31	弥生・Ⅲ	1		1				1								1		1				11	40		4	84	6	鉄滓			
A	SK-32	弥生・Ⅲ?																					7	13		2	6					
A	SK-33	?																					7	48								
A	SK-34	弥生・Ⅲ	1												1	1		1	1	2			13	48	8	46	18	70		管玉(鉄石英)・有孔円板		
A	SK-35	弥生・Ⅱ?																					3	6								
A	SK-36	弥生・Ⅱ?										1											5	19	1	9	2	100				
B	SK-39	弥生・Ⅱ?																					3	12		1	5					
B	SK-40	弥生・Ⅰ?	1											2									14	36		3	18					
B	SK-43	弥生・Ⅱ												1									3	12	1	0						
C	SK-44	平安?																					2	3								
C	SK-45	古墳																														
C	SK-46	平安?																					1	2								
C	SK-48	平安?																					1	7								
C	SK-49	弥生・Ⅲ	1				1					1		1	1								22	73		9	88	4				
C	SK-50	弥生・Ⅱ?																					1	2								
C	SK-51	弥生・Ⅱ?										1											9	61								
C	SK-52	弥生・Ⅱ?																									3	7			骨	
C	SK-53	平安																					1	1							焼骨	
C	SK-54	弥生・Ⅱ?																					9	25		2	6					
C	SK-55	弥生・Ⅱ?																					4	6								
C	SK-56	弥生・Ⅰ?																					5	6		1	22					
C	SK-57	弥生・Ⅱ?																					3	19								
C	SK-58	弥生・Ⅱ?												1									5	49								
C	SK-59	弥生・Ⅱ?	1									2											7	9		1	5					
C	SK-60	弥生・Ⅱ?																					2	3								
C	SK-61	弥生・Ⅲ																					2	8		1	5					
C	SK-65	弥生・Ⅱ?																					4	4								
C	SK-66	弥生・Ⅱ?																								1	5					
C	SK-67	弥生・Ⅱ?																					1	3								
C	SK-69	弥生・Ⅱ?		1								1											9	23								
C	SK-70	弥生・Ⅲ	1							1													39	156	9	58	3	35				
D	SK-71	平安																								1	4					
D	SK-73	古墳・前																														
D	SK-79	平安																									1	11				
D	SK-83	弥生?																					2	3		1	4					
D	SK-89	弥生・Ⅱ																					4	6	1	1	7	82			骨	
S1A	SK-91	平安																									1	1			銅	
S1A	SK-94	?																					3									
S1A	SK-96	?																					1	2		1	14					
S1A	SK-97	?																					1	0		1	4					
S1A	SK-98	中世																					1	4								
S1A	SK-102	?																					1	1		1	14					
S1A	SK-105	弥生・Ⅰ																														チャト質原石・滑石原石・骨

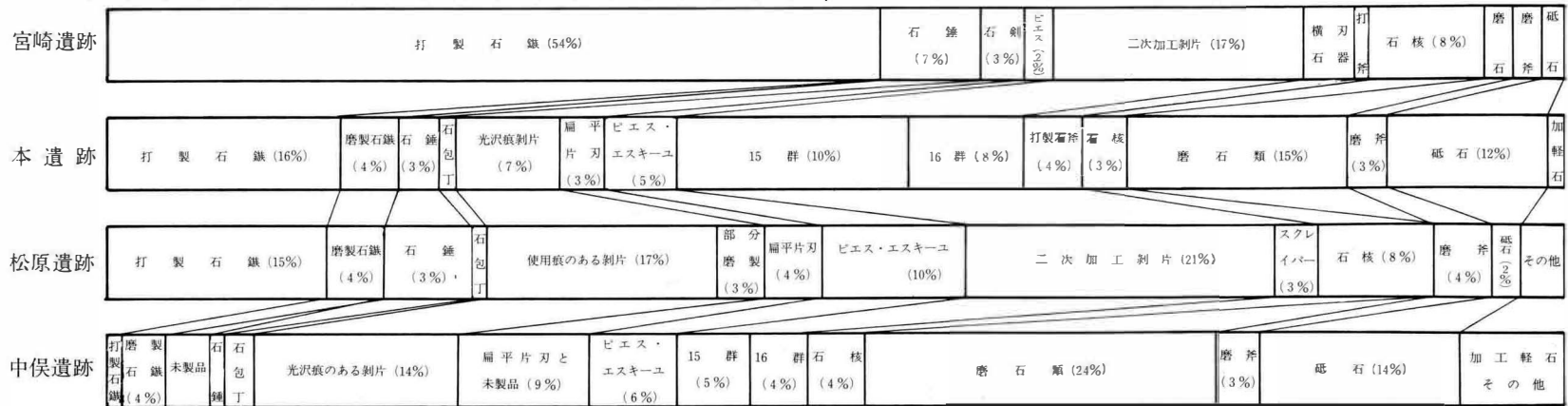
表9-5

地区	遺構	時代・期	1	1 未	2	3 4	5	6	7 14	10	11	12	15	15 Ob	16	17	Ⅱ 2	Ⅲ 1	Ⅲ 2	Ⅲ 3	Ⅲ 5	Ⅲ 7	Ob 個	剥片 g	珪頁剥片 個 g	粘板剥片 個 g	軽石 個	その他		
SIA	SK-109	平安																					1		7					
SIA	SK-110	?																					1	2						
SIA	SK-111	平安																						1	12	1	3			
SIA	SK-112	中世																							1	10				
SIA	SK-113	近世								1													2	2						
SIA	SK-114	平安																1										鉄滓		
SIA	SK-116	平安												1											1	9				
SIA	SK-117	?														1														
SIA	SK-119	平安																						1	12		1			
SIA	SK-120	平安														1									1	79	1	鹿齒		
SIA	SK-121	弥生?																					1	3	1	4	2	10		
SIA	SK-122	弥生?																					2	3						
SIA	SK-123	弥生・Ⅱ																										鍾		
SIB	SK-125	平安													1															
SIB	SK-127	?											1		1								3	6						
SICD	SK-131	平安・中																					2	5		1	23	1	骨	
SICD	SK-133	弥生・Ⅲ																					2	*		1	26	1		
I	井戸 9																											凹石		
B	SX-1	平安・新																					9	29		4	295			
B	SX-2	古墳・前											1		1								3	3						
C	ピオ	弥生・Ⅱ																					9	12		2	3			
Ⅲ	検出面	一括						1										1			1				3	7		茶臼		
A	検出面	一括	7	1	3	2	2	2	4	5		4	2	1	6	1		11	2	2			238	674	*	1400	54	鉄滓		
B	B-1	平安・中新										1			1								5	7		3	10	3	鉄・齒	
B	B-2	～古墳～													1						1					1	33			
B	B-3	弥生・ⅠⅡ	3			1	1			2		2	1	10	3		3			1			63	161	1	7	30	320		
B	T-A	弥生・Ⅰ														3				1			17	96		11	183	1		
B	T-AW	弥生・ⅠⅡ														2	2	3		1			26	103		11	96			
B	T-A'	弥生・ⅠⅡ													1								8	17		5	60			
B	T-B	弥生・ⅠⅡ													4								34	102		16	219	2	ビス 原石・土偶	
B	T-BW	弥生・ⅠⅡ				2	1							2				1					27	78	1	3	*	122	土鍾	
B	T-B'	弥生・ⅠⅡ													1	1			2				11	34		9	147			
B	T-B'W	弥生・Ⅰ													1	1										2	114		石英(石核?)	
B	T-B'E	弥生・ⅠⅡ				1			1			2		1	2			1			1		23	75	6	34	18	123	石剣・有孔円板・齒	
B	T-C	弥生・ⅠⅡ							2			1		4	1	1		1		4			58	123	5	14	18	71		
B	T-C'	弥生・ⅠⅡ					1		5		1	2		1	1					1			1	29	7	14	20	151	管玉・骨針	
B	T-D	弥生・ⅠⅡ						1						2	1				2		1		45	120	10	49	7	109		
B	T-D'	弥生・ⅠⅡ									1					1	1						28	79	5	30	10	91		
B	T-No.	弥生・ⅠⅡ										2			2	5		5		4	1					4	191			
C	C-1	平安・新～	1				1			1				3									39	133	1	4	10	51	4	緑泥片岩原石・土鍾・硬質安山岩
C	C-2	平安・中新																					7	22	2	14				
C	C-3	～古墳～	1				2		1					4	1		2	2					15	59	1	6	5	45		
C	C-4	弥生・Ⅱ～		1			1		1	1		2		18	1	1	1	2	1				81	234	5	18	24	339	10	
C	C-5	弥生・ⅠⅡ		1										4		1		1			1		32	64		4	12	3	玉・土面?・齒	
D	D-1	平安・新～					1																2	12		3	23	11	釘?・骨	

表9-6

地区	遺構	時代・期	1	1未	2	3	4	5	6	7	14	10	11	12	15	15Ob	16	17	II	III	III	III	III	III	Ob	剥片 個	珪頁剥片 個	粘板剥片 個	軽石 個	その他			
D	D-2	平安・中新															1								8	20			6	土錘			
D	D-3	平安・中																															
D	D-4	～古墳～								1						2									20	39	1	*	5	57	29		
D	D-5	弥生・II～								2							1							5	5	1	2	1	2	26	管玉		
D	D-6	弥生・II																	1					6	15	1	2	1	2				
D	D-7	弥生・II純	1													1								18	39	6	164						
D	D-8	弥生・II純	1					1		1							1							52	114	8	113						
SIA	SIA-1	～平安～	2							1						2	3							16	36	1	2	19				鉄滓・円板	
SIA	SIA-2	～平安～	1	3						1		1				3								21	55	1	13	17	215			鉄	
SIA	SIA-3	～古墳～														1								15	43	1	7	5	24			鹿歯・骨	
SIA	SIA-4	弥生・II～	5					2								5								100	175	1	13	35	213	*		鉄滓・ミチュア 土器?	
SIA	SIA-5	弥生・II～	6						2		1					2								84	171	34	154	2					
SIA	SIA-6	～弥生～	1					1		2						5	3							43	90	7	220	1					
SIA	SIA-7	弥生・II	2	1		1					1			2		4								31	84	2	13	10	88			円板	
SIA	SIA-8	弥生・I純		1					1		1					2								31	67	4	14	1	30			土製品	
SIA	SIA-9	弥生・I純	1													3		1						33	67	4	14	1	30			滑石4 (玉未成品含む)	
SIA	SIA-10	弥生・I													1	5	1	3						20	46	4	8	8	86	1			
SIB	SIB-1	～平安～																						4	12			6	26	5			
SIB	SIB-2	～古墳～	1		1																			40	120			19	292	3			鉄滓
SIB	SIB-3	～弥生～	2													2		1	1	3				30	29	1	30	6	38	2			
SIB	SIB-4	弥生・I II																						2	14								
SIB	SIB-5	?								1				1										1	3								
SIC	1 検出	～平安～																						11	39	1	4	11	69				白玉
SIC	2 検出	～弥生～																						10	32			3	38				鉄滓
SID	2 検出	～弥生～																						4	9			1	31				骨
合計			117	26	8	24	28	12	64	26	3	46	9	135	72	38	26	134	29	104	4	7		3068	8297	181	1099	1095	12682	538	個	g	

石器組成グラフ



まとめ

弥生時代を中心とした本遺跡の石器の総点数は900点を越えるという膨大なものである。打製石鏃、磨製石鏃、石錐、石包丁、石剣、扁平片刃石斧、楔形石器、打製石斧、石核、磨石、敲打石、凹石、磨製石斧、大型蛤刃石斧、環状石斧、砥石、台石、加工軽石等がある。これらの定型的な石器の他に二次的な加工痕や光沢痕等の使用痕の残る剥片280点も含めてある。製品を作る過程で出来た剥片の数量も大きいものである。剥片数では黒曜石が3068点(71%)、珪質頁岩・チャート類181点(4%)、粘板岩類1095点(25%)である。重量では粘板岩類が最大である。剥片数からみて黒曜石の剥片が7割を占めており、多用されていたようすが窺える。

表末に示した長野市内の松原遺跡と中俣遺跡石器組成グラフは、主に弥生時代中期の遺跡における石器組成を表したものである。両遺跡の資料と比較する中で本遺跡の石器について見てみることにする。

打製石鏃は有茎石鏃が86点(80%)あり、有茎で長く細身、側縁が内湾し長さが幅の2倍以上の石鏃が半数以上ある。石質は黒曜石製が70%と、後・晩期の宮崎遺跡(1988、長野市教委)では16.7%、松原遺跡47%というなかで高い率である。

石包丁は丁寧に全体が研磨されたものと、刃部の対辺に剥離調整を残したままで使用しているものがある。

光沢痕のある剥片は中俣遺跡で町田氏が報告しているが光沢痕がなければ剥片としてかたづけられてしまうもので、剥片剥離後に手を余り加えず鋭利な剥片の側縁をそのまま利用したものである。光沢痕とともに刃先のみ研磨している剥片もあり、不定形で整形していないものの鋭利で幅広の刃部を使用する等磨製石包丁と通じるものがある。松原遺跡では珪酸体の付着した剥片と一部磨製の施した剥片が20%、中俣遺跡15%、本遺跡でも弥生II・III期に集中し7%という数値を示している。ただ、数量の多さがそのまま使用度において圧倒するものではないという所見もあるが石包丁が石器組成の1・2%の割合では入手しやすい石器であったといえるのではなかろうか。

また弥生I・II期所産の打製石斧がかなり有り、16群にも破損した打斧と見られるものが含めて有るため全体の4%以上にのぼる。前代の宮崎遺跡で1%、弥生中期の中俣・松原遺跡ではほとんどない事と対照的である。完存するものの中には未使用ないし未成品とみられるものが多くある。短冊形と撥形両者があるが、その中間の基部がやや狭く刃先が広がるタイプに使用痕がなく、直立して出土した状況からして儀器的な要素も考えられる。

磨石類・敲打石は15%あり弥生時代I・II期に多い。砥石も各時代にみられるが、小形の不定形の砂岩をそのまま利用しているものは、弥生時代の所産に多くある。

磨製石斧は縄文時代の系譜を引く乳棒状の緑色の珪質粘板岩製のものと、大陸系の輝緑岩製の大型蛤刃石斧がある。十分に使用されたようで刃部が片減りになっている。

原石の中には搬入品であるヒスイ、鉄石英、碧玉等の玉類の原石があり、石英質安山岩や緑泥片岩の剥片もわずかであるがあり、他の石器についてもそれぞれの石器の未成品もあることから遺跡内で製作されたようである。

本遺跡の石器のあり方は、弥生時代I～III期を中心とした豊富な資料である。狩猟具である打製石鏃、農耕具である打製石斧と共に、大陸系の大型蛤刃石斧や扁平片刃石斧がある。剥片数においては黒曜石の割合が70%と高いことである。

引用参考文献	長野市教育委員会	1988.	3	『宮崎遺跡』
	”	1991.	3	『中俣遺跡・押鐘遺跡・檀田遺跡』
	”	1991.	3	『松原遺跡』

8 周溝墓等出土の弥生時代金属製品

—篠ノ井遺跡群聖川堤防地点出土金属製品の応急処置—

- 基本方針 : ① 鉄釧の形状を明確にし、個体数を知ること。
② 鉄以外の使用素材を明確にすること。
③ 原則として、欠損部の復元は行なわない。

鉄 釧

SK-10 3個体が整然と積み重なった状態で錆付いており、4つの破片に分離している。完形品はなく、そのうち1個体は破片1点のみ残っている。また、一部に布の痕跡があり、釧への付着状況からその布が、3個体をいずれかの形で包んでいたと判断される。釧自体の保存のためには、3個体を1個体ずつに切り離して、破片を接着してから錆取りをするのが好ましいが、布の痕跡も保存する必要があるため、1個体ずつには分離せず、錆付いたままの破片どうしを接着した(エポキシ樹脂系接着剤;後掲)。次に、一部欠損のまま、布の痕跡のある部分以外の不要な錆を除去(手術用メス、ニッパー、エアブラッシ)。硬化接着剤の盛り上がっている部分を整形して(精密加工用グラインダー)、アクリル樹脂を塗布。最後に、古色仕上げ(アクリル絵具)を行なった。

形状の観察:環の最大径6.2cmでほぼ円形。使用されている鉄材の幅4mm前後、厚さ2mm弱、断面形態凸レンズ形で、外面に稜をもつ。

製作状態の推定:螺旋状の構造ではなく、単環の集合と判断される。造りは、鍛造・研ぎ出し。

SK-12 釧の集合体が、土のかたまりの中に包み込まれて、形状を保っている状態で保管されていた。

- ① 円筒形に積み重なっている釧の、個体数を調べること。
- ② 釧の形態(両端の有無 or 接合部のつなげ方)はどうなっているか、つきとめること。
- ③ 釧の積み重なり順序を明確にすること。

を中心に土と錆の除去から始めた。

釧自体の劣化が進んでいる(遺物内芯部の空洞化がすすんでいる)ため非常に脆く、土を除去する際の土の崩壊で破折してしまう箇所もあった。またすでに土のかたまりのなかで細片に割れてしまっていて、積み重なり順序が特定できない破片もあった。この釧の集合体には、2個体以上にわたる布の痕跡がなかったので、1個体ずつに分離した(エアブラッシ)。この結果破片総数は78点になった。さらに、破片の両端は、土のなかで劣化が進んでおり、破断面が不明確になっている。まず、破片表面の土をメスでできるだけ取り除き、エアブラッシで破片のだいたいの形状を表出させた。次に破断面のふくれた錆をエアブラッシで少しずつ削り下げ、本来の表面を出した。

接着工程は、照合できた破片どうしを、2種類の接着剤を使い分けて行なった。

- 密着破断面どうしには、シアノアクリレート系瞬間接着剤
(東亜合成化学社製/ボンド・アロンアルファ)
- 多孔質、接点の少ない破断面どうしには、
2液タイプ・エポキシ樹脂系接着剤(セメダイン社製/ハイスーパー5分間硬化型)

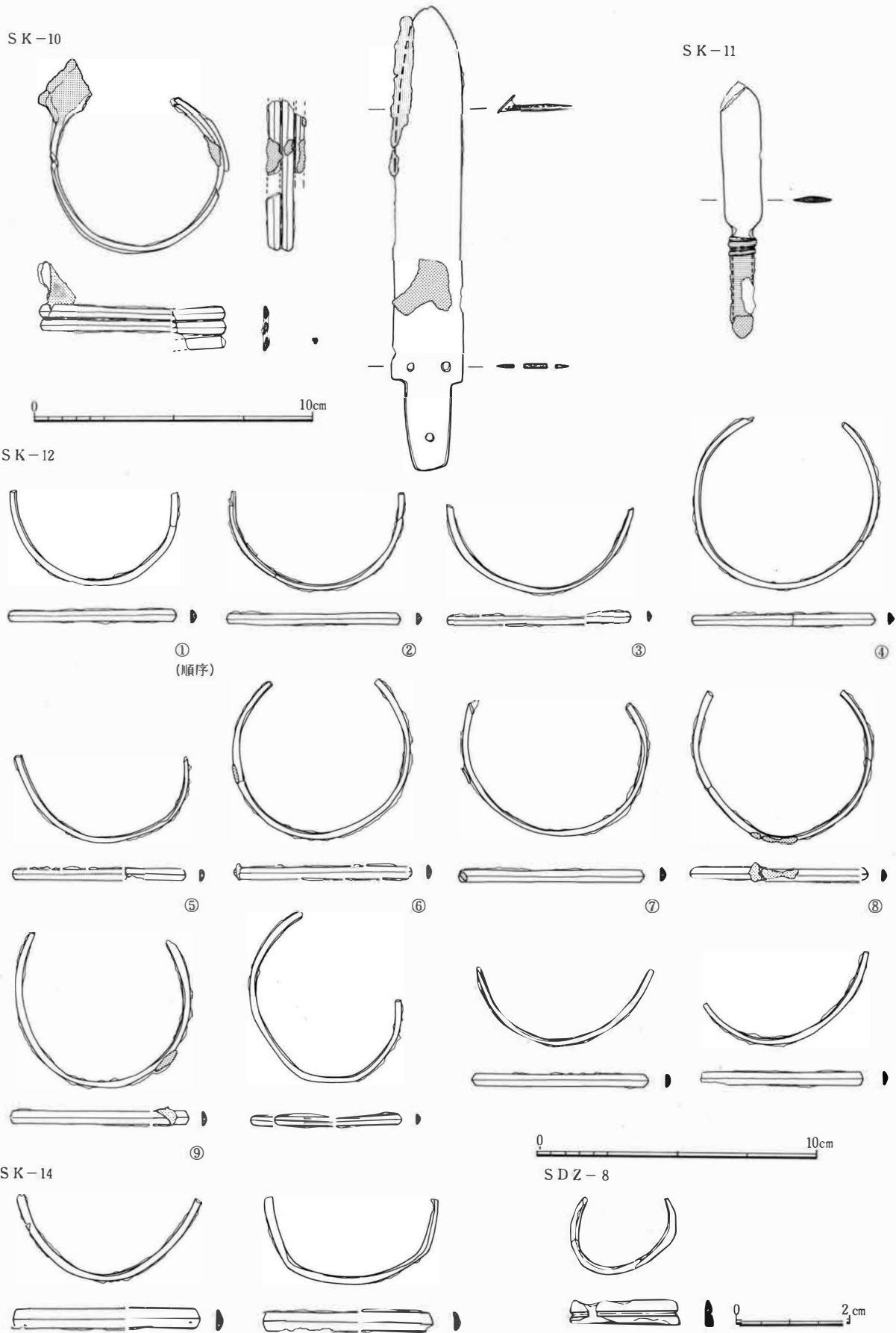


図70 周溝墓等出土金属製品 (1:2、SDZ-8のみ原寸)

接着の結果、わかったことわからなかったことは次のとおり

- ① 破片総数78点を46箇所で見合できた。
- ② 積み重ね段数は、9段。順序も判明。
- ③ ただし、②に属さない破片もあるため、埋納時の積み重ね段数は確認できなかった。
- ④ 完形品が得られず、開放形である場合の端部、閉塞形である場合の接合部は不明。

接着後、遺物表面に残る不要な錆をエアブラシで除去し、硬化接着剤の盛り上がった部分を精密加工用グラインダーで成形して、アクリル樹脂を塗布。最後に、アクリル絵具で古色仕上げを行なった。

形状の観察：環の径6.0～6.7cmで、6.2cm付近に集中する傾向が認められる。成人男子の手首最大径の値に近似していることは注目される。使用されている鉄線の幅4mm前後、厚さ2mm弱、断面形態凸レンズ形で、外面に稜をもつ。SK-10鉄釧とはほぼ同型式といえる。

埋納状態の推定：出土状態は、整然と積み重なったSK-10鉄釧とは異なり、ややななめにかさなり、あるものは突出した状態だった。錆取り、接着作業の結果から、1個体ごとの変形は認められず単環の釧が9個体以上に積み重ねられた状態で布にくるまれたか、あるいは装着されたかの状態で、埋没中に何らかの力で崩れ、傾斜したまま互いに錆び付いたと思われる。また、完形品が得られず、明らかに環の開放端部あるいは閉塞接合部と判断できる部分が検出できなかったことは、後述の着脱状態の推定の限界に結びついている。

SK-14

全ての破片で、その表面が土を巻き込んだ錆に覆われており、メスとニッパーで錆の除去から始めた。遺物内芯部の空洞化が進んで脆くなっている上に破片の両端は、破断面が中空になっていたり崩壊していたりしている。このため、簡単に取れる錆の除去に留め、接着作業に移った。

なお、破片総数34点のなかの1点の表面に、布の痕跡がみられるが、付着面積が小さく埋納時の状況は判断がむずかしい。

使用接着剤は、SK-12の釧と同一である。

接着の結果、わかったこと、わからなかったことは次のとおり。

- ① 破片総数34点を14か所で見合できた。
- ② 部分的な破片の接着で、形状に特徴のあることがわかった。
- ③ 完形品は得られず、開放形である場合の端部or閉塞形である場合の接合部は不明。

接着後、SK-12の釧と同一の処置を行なった。

形状の観察：環の径6.0cm以上で、使用されている鉄材の幅7mm前後と、SK-10・12鉄釧より幅広の形態。厚さも2mm強とやや厚手で、断面形態凸レンズ形で、外面に稜をもち、内面がやや内湾する傾向が認められる。環の平面形は円形と考えるより隅丸の方形に近いものを予想させる。

着脱状態の推定：SK-10・12鉄釧も含め、開放形としての両端部があったとすれば、その素材と断面形態からみて比較的容易に開閉することができるとと思われる。ただ、開放形の輪の開閉を頻繁に行うことは金属疲労の点から考えにくい。

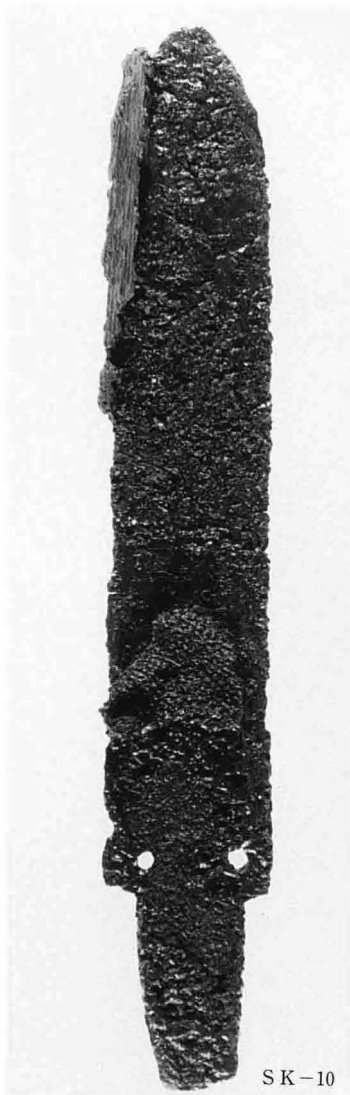
日常的使用（装着）のあり方を考えた場合次の想定が可能である。

鉄釧が開放形で両端部がある場合

- ① 取りはずしが容易なので、毎日のように着けたりはずしたりして使っている。



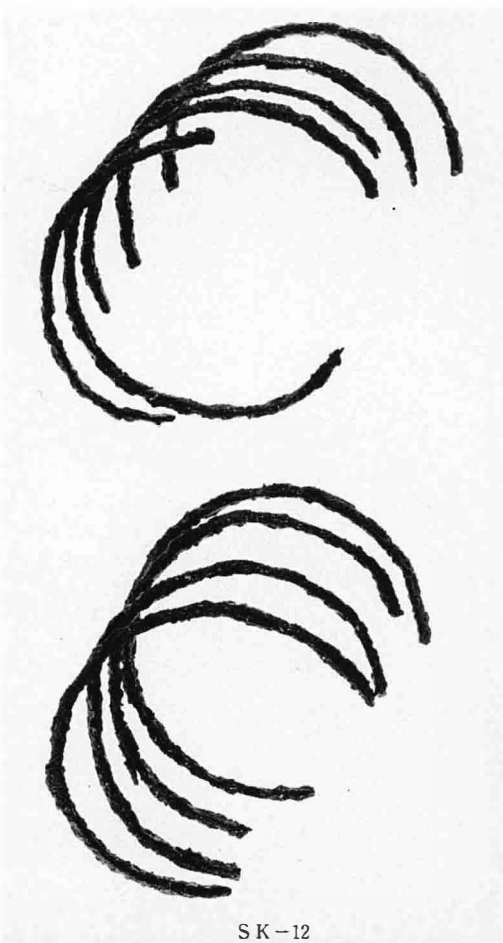
SK-10



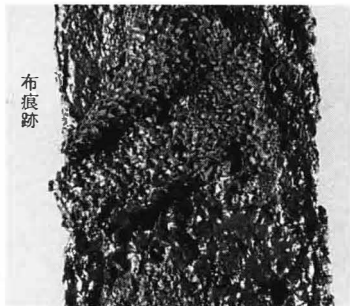
SK-10



SK-11



SK-12



布痕跡



木質殘存



SK-12



処理前



SDZ-8

② 釧の開口部を少し押し広げ、手首の細い部分で腕にはめ、ずっと着けている。

鉄釧が閉塞形で接合固定される場合

幼い時期に環に手を通し、いつも（長年～生涯）身に着けている。

鉄 剣

SK-10 表面に、遺物本体よりも固い錆のふくれが生じられているため切除した。（精密加工用グラインダー）その結果、2箇所内芯部が空洞化していて、小さな負荷にも耐えられない状況であることがわかった。その空洞部にエポキシ樹脂（前掲）を補填し強化した。また、エアブラッシによる錆取りの工程で、形状と寸法を明らかにした。表面に布の痕跡と木質の残存片が観察される。布については埋納時に剣を包んでいたものの一部か、付近にあった布が剣と接触していた部分が錆に巻き込まれて偶然形を留めたものか不明。木質については、2種類が残存していることがわかる。1つは、剣表面刃部に沿って付着するように残っているもの。もう1種類は、刃部と45～50度の角度で接して残っているもの。前者は、鞘木残欠、後者は、剣と接触していた板状木質の残欠と思われる。

形状の観察：全長16.5cm、茎（なかご）部3.1cm、刃部最大幅2.4cm、同厚3mm弱。刃関孔（はまちあな）2、目釘孔1。錆（しのぎ）は明瞭でない。

群馬県有馬遺跡礫床墓群（群馬県教委1990『有馬遺跡II』）出土遺物に顕著な類例を認める。なお、同遺跡出土の鉄釧においても、当遺跡との型式的一致点が指摘できる。副葬品として検出された一群の鉄製品の類似性について、地域と時間を限定する興味深い分布が抽出される可能性がある。

鉄 鏃

SK-11 表面に4箇所、錆のふくれが進んでいるため切除した。（精密加工用グラインダー）SK-10鉄剣と同様に、内部の空洞化が進んでいたためエポキシ樹脂（前掲）を補填し強化した。

形状の観察：先端部が欠損、遺存部分の全長は8.9cm、茎部長3.8cm、刃部最大幅1.9cm、同厚3mm弱。柳葉鏃形式で、錆は明瞭でない。茎には、やや粗い繊維を素材とする紐状のものを巻きつけた痕跡や布の痕跡が観察できる。

指輪状青銅製品

SDZ-8 形状の観察：最大径1.3cmの楕円形。幅4mm、厚さ1mm強、断面形態長方形を呈する。外面には一条の凹線が刻まれる。指輪状の青銅製小環は、長野市四ツ屋遺跡において出土例がある。同製品は、薄板を環状に曲げただけの簡略な製作であり、本例とは趣を異にしている。

補記 今回の応急処置は、出土遺物の劣化を抑制し保存するという目的以上に、出土時のままでは考古学的情報を遺物から見出しにくいことに対する次善の処理という観点で行った。付着している土や遺物の形状を損ねている膨張した錆は、ほとんどの場合、遺物表面との間で界面（境目）をつくっている。錆をどこまで取るかは、これを基準にすると判断しやすい。現在、各方面で行われるようになってきている方法としては、修復作業に入る前のX線による透過撮影があげられる。錆に覆われ、形状が不明確だった遺物本来の形や、肉眼では観察が難しい細かい亀裂（遺物破折の初期症状）、金属質の残存度合い、内芯部の劣化（空洞化）、複数の金属素材の有無（鉄と青銅・銀・金など）を把握しておくことによって、短時間に確実に、しかも安全に錆取り作業ができるようになってきており、普及が望まれる。今回応急処置した出土遺物は、遺物と錆の界面を数種類の道具で追いかけるように表出し、破片接着・補強までに留まっている。今後、形状的にも素材的にも劣化が抑制されるよう、手立てを講じて行きたい。

長野市の埋蔵文化財

- 第1集『信濃長原古墳群』
第2集『浅川西条』
第3集『中村遺跡』
第4集『塩崎遺跡群』
第5集『塩崎遺跡群(2)』
第6集『三輪遺跡—付水内坐—元神社遺跡』
第7集『田中沖遺跡』
第8集『篠ノ井遺跡群』
第9集『四ツ屋遺跡(第1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)』
第10集『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』
第11集『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』
第12集『浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスA・E地点遺跡—』
第13集『浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構』
第14集『石川条里的遺構(2)・上駒沢遺跡』
第15集『箱清水遺跡(2)』
第16集『石川条里的遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』
第17集『浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスB・C・D地点—』
第18集『塩崎遺跡群IV—市道松節—小田井神社地点遺跡—』
第19集『土口将軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—』
第20集『三輪遺跡(2)』
第21集『芹田小学校遺跡』
第22集『長野吉田高校グラウンド遺跡』
第23集『横田遺跡群 富士宮遺跡』
第24集『塩崎遺跡群V 殿屋敷遺跡』
第25集『南川向遺跡』
第26集『東番場遺跡』
第27集『小柴見城跡』
第28集『宮崎遺跡』
第29集『浅川端遺跡』
第30集『地附山古墳群』
第31集『町川田遺跡』
第32集『中条遺跡』
第33集『鶴前遺跡・塩崎城跡』
第34集『石川条里遺跡(4)』
第35集『篠ノ井遺跡群II』
第36集『屋地遺跡II』
第37集『篠ノ井遺跡群III』
第38集『栗田城跡・下字木遺跡・三輪遺跡(3)』
第39集『塩崎遺跡群(6)・石川条里遺跡(5)』
第40集『松原遺跡』
第41集『小島柳原遺跡群中俣遺跡・浅川扇状地遺跡群押鐘遺跡・壇田遺跡』
第42集『田中沖遺跡(2)』
第43集『南宮遺跡』
第44集『塩崎遺跡群(7)』
第45集『石川条里遺跡(6)』

長野市の埋蔵文化財第46集

篠ノ井遺跡群(4)

平成4年3月25日 印刷

平成4年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会
発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 ほおずき書籍株式会社